

機動戦士ガンダムーBullet in the desertー

五河陽太

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

(注意) 本作品は機動戦士ガンダムー0079年時代ーのオリジナルストーリーです。

地球連邦軍とジオン公国の戦いが激化の一方を辿る中、名家の御曹司アキハ・アンドーは

技術者の腕と名家を絶やさないために父親のテツハの判断で地球連邦軍に亡命する。

だが、そこで待っていたのは中東最前線での戦いの日々だった。

ある日、第一種警戒態勢から出撃したアキハは異常なザクイーと遭遇する。

圧倒的な実力を発揮するザクイーを退けたアキハたちだが、操縦していたのはアキハと同じ歳の美少女で――。

技術士官の少年と美少女が出会おうと始まる戦場での絆の話。

オデッサ作戦の裏側を描いたサイドストーリー。

是非お読みください。(了)

目次

序章 青年と地球	1
序章 青年と中東情勢	5
序章 遭遇	11
第1章 連邦とジオン	
秘事	21
その話は……。	24
密会 (1)	27
密会 (2)	31
疑惑	35
その名は「ガンダム」	38
蠱惑的な猫	40
相棒	44
静寂と喧噪	47
月下の出会い (1)	51
月下の出会い (2)	55
月下の出会い (3)	58
逃亡 (1)	62
逃亡 (2)	67
モビルアーマー (1)	69
モビルアーマー (2)	74
第2章 理想と現実	
再会 (1)	80
再会 (2)	84

希望	153
エピソード	
狂気の先に	149
悪魔再臨 (2)	145
悪魔再臨 (1)	141
市街地戦 (2)	136
市街地戦 (1)	132
狂気	130
最後の戦場	126
それぞれの進む道	
それぞれの戦いかた (2)	123
それぞれの戦いかた (1)	121
接敵 (3)	118
接敵 (2)	114
接敵 (1)	111
苦悩	108
初陣 (2)	103
初陣 (1)	100
小隊 (2)	98
小隊 (1)	95
疑惑 (2)	93
疑惑 (1)	91
再会 (3)	87

序章 青年と地球

「あれが地球か、思った以上に大きいな！ それに、青色に白色、茶色、複雑な色が凄く綺麗だ！ あそこが俺の行くべき大地なんだ！」

スペースシャトルの中でアキハ・アンドーは無邪気にはしゃいでいた。

スペースシャトルの中の表示板には「0079年9月1日」と文字が流れて、戦争の時事ニュースが無慈悲に流れていた。

地球はアキハにとっては理想の新天地だった。

大事に抱えた白銀の防弾アタッシュケースと単身でアキハは今日、地球連邦軍に亡命をする。

18歳のアキハには亡命の意味も覚悟も「地球」の前では霞んでしまっていた。

アキハはシャトル内で流れる機長の大気圏突入に関する注意を聞く。

その上で、シートベルトを身に付けて、無事に大気圏突入を果たせるように祈る。

スペースシャトルの窓が防熱シャッターによって閉まる。

風景が見えなくなる。

すると、アキハは自身の身の上起こった意味と今後の生活について席の上で考える。

アンドー家はジオン公国内でも有数の日系技術士官排出の名家だ。

だが、ジオン公国と地球連邦軍の戦争が激しくなるに連れて、アンドー家の安泰も危なくなっていた。

アキハが18歳になり戦場に行く前の日に、父親、テツハがアキハに語った。

『アキハ、貴様は技術士官としての才能がある。アンドー家をここで絶やすわけにはいかぬ。俺はジオン公国に残る。貴様は連邦軍に行け。そうすれば戦争でどちらが勝とうが、アンドー家は続く。貴様はアンドー家の長男としての役割を果たせ——』

アキハはテツハの真摯な言葉と表情に押された。

テツハはジオン公国内でも技術者としては屈指の実力の持ち主だった。

その男が必死にアキハに説明する姿は息子として、一人の、技術者として認められた証でもあった。

アキハはテツハの言葉を受けて、内密に用意されたシャトルで地球を目指した。

手には地球連邦軍への手土産として自身がジオン公国内で開発した「自己成長プログラムAI」を持って指定場所である北米を目指していた。

「亡命してでも成さねばならぬ事がある」

アキハにはまだそこまでの覚悟はなかった。

唯、テツハに技術者として認められ、一人で事を成す内容に自分自身に酔っていた。

アキハは夢見がちな所があった。

幼い時から一度、地球に行つてみたいと考える節があった。

その、願いが叶った今、アキハは自身の身に起こる運命について全く考えもしていなかった。

シャトルが大気圏突入体勢に入った。

機体が空気との摩擦で激しく振動する。

アキハは自身の分身でもあるアツシユケースを抱きしめる。

「本当に大丈夫か?」、「爆散しないよな?」

そんな疑念に駆られながら、無事大気圏突入が終わるのを祈る。

何分、いや、何時間にも感じる時が経過した。

激しい振動がおさまり、防熱用のシャッターが開かれる。

アキハが覗き込んだ窓から見える世界はコロニーとは全く異なる世界だった。

広がるのは蒼い海。波打つ海原の上を魚たちが飛び跳ね生命の息吹を感じさせる。木々は青々敷く茂り、戦争が起きているなんて嘘だと感じさせる。鳥たちがアキハを歓迎するように群れでシャトル下側を滑空していく。全てが新鮮。全てが未知の世界だった。

アキハは身体が怠く感じた。

「これが……、重力か」

アキハ以外誰も乗っていないシャトル客室内で1人事を喋る。

無重力になれたスペースノイドにとって重力は憧れであり、一度は体験したい神秘でもあった。

アキハは自分がその憧れを体感していると解ると無性に嬉しくなった。

地球最高！

今後、待つ試練だつて簡単に行くさ！

そんな気分していると、スペースシャトルは森林の中に建造された滑走路に吸い込まれるように高度を下げた。着陸まで秒読みだ。

3、2、1――。

大気圏突入時以上の振動が身体を襲う。

激しい音を立てながらパラシュートを展開したスペースシャトルは勢いを徐々に殺していく。

結果、見事に滑走路内で止まるのに成功した。

アキハは振動が止み、風景が止まったのを窓越しに見ると、大きく安堵の息を吐いた。

アキハは搭乗員搭乗用の連絡路が接続されるのを待つて、席を立つとする。

すると、アキハが降りる前に、客室にサングラスを着けた黒い服で筋肉質な男たちが3名乗り込んできた。

アキハの席の横で出る行為を封鎖した男たちはアキハに低く、唸る獣の如き声をかけた。

「アキハ・アンドーだな。我々と一緒に来てもらおう。君には色々と言わなければならない」

「俺に話があるのは当たり前ですね。何せ俺は亡命者ですから――。でも、少し仰々しくはないですか？ 俺は逃げも隠れもしない。だからそんなにギラつかないで下さいよ」

「肝が座っているのか、無知なのかは解らない。だが、余り我々を舐め

ないで欲しい。我々は戦争をしている。君からは大切な情報を聞き出す必要がある」

アキハは肩を垂らせて、愚痴った。

「重力に慣らす時間すらなしですか？ 亡命者に対する扱いがなっていないですよ。ちゃんと条約を守ってもらえると聞いたので俺は亡命をしてきたのですが？」

「勿論、条約は守る。それは話を聞いた後だ」

アキハの身体にバチツと何かが触れた瞬間、意識が吹っ飛びかける。

最後に視た光景は黒服がスタンガンを持ち、無表情で立ちすくむ姿だった。

(続)

序章 青年と中東情勢

『本日の最高気温は40度。雨は降りません。時折発生する砂嵐にご注意下さい。乾燥した一日になりますので火の取り扱いにはじゅうぶんお気を付け下さい。さて、気象予報の次は——』

アキハはそこでテレビを切った。

アキハは今、北米から移動して中東の最前線にいた。

あの夢にまで見た地球に降りてから2週間が経過していた。

曜日はカレンダーで確認すると0079年8月15日——。

アキハは現実を知って落胆していた。

北米、ジャブローで亡命の話をしたら研究をしながら平穩に過ごせると確信していた。

だが、現実には世知辛い。

暴力の嵐である尋問で、家系について、ジオン公国内、つまりサイド3の情勢について洗い晒しに吐かされた。その後、手土産のAIを取り上げられ、そのまま独房に放り込まれた。

質素な生活を数日間強要された後、解放されたと思ったら、「技術士官としての地位を与える」と突然、連邦軍のお偉いさんに命令され、中東支部に転勤となった。

中東支部といえば現在、オデッサにジオン公国の重要拠点があり、連邦軍が奪還しようとして画策している最前線だ。

激しく危険な砂の大地に飛ばされたと考えるとアキハの気分は落ち込んだ。

テツハと約束したアンドー家の安泰はもう無さそうだとアキハは毎朝、ニュースを観る度に考えた。

連邦軍の軍服に袖を通して、4人部屋から外に出る。

太陽は朝一番から燦々ときつく大地を照らしていた。

連邦軍はオデッサ奪還用にオマーンを拠点に第32技術試験隊を配備していた。

この部隊は通称「天国に最も近い部隊」と仲間内で語られており、戦死者の数が圧倒的に多い。

特に技術士官の戦死者が多く、補充員が間に合わないほどだ。そこへ回された意味を考える度にアキハの気持ちは落ち込んだ。

朝食は午前7時に配給制。

アキハはテントで調理師たちが作ってくれる不味い飯をもらいに、列に並ぶ。

順番が回って来てアキハの番になった。

今日の朝食は朝からパンにハンバーグ、コーンスープと胃がもたれそうな献立だった。

アキハは「食べられないよりはマシ」と考え、調理師から食事の乗ったトレーを受け取る。

そのままテント内に設置してあった席に移動して朝食を食べようとした。

そこへ仲間がニヤニヤと嫌な笑みを浮かべてはわざとらしく体当たりをして来た。

当然、体当たりをされた、アキハはこけてトレーを砂の大地に零してしまう。

アキハの朝食は食べられない姿に変わってしまった。

「何をする！ 俺がお前に何かしたか！」

体当たりをした連邦軍兵はまだ、ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべては話を返した。

「おっと、済まないね。昨日晩から酒を飲んでいて二日酔いなんだ。気分が悪くてつい足がテメエにぶつかってしまったぜ。朝食は諦めるんだな」

「お前の朝食を出せ！ 俺は被害者なんだ！」

「俺はもう朝飯を食っちゃってな。この部隊では1人1回しか飯はもらえない規則だ。技術士官殿はネジでも噛んで空腹を紛らわすんだな」

これには普段は穏やかなアキハも腹を立てた。

唯でさえ、不当な扱いを受けて意気消沈していたのに、追い打ちをかけてきたこの兵士だけは許せないと頭に血が昇った。

拳を固めて、喧嘩もした経験もないアキハが初めて兵士に掴みかかった。

朝食の現場は一気にゴタゴタした喧嘩場に姿を変えた。

アキハだけではない。

他の部隊員も刺激が強過ぎて、平穩がない、この砂の大地で娯楽を求める傾向にあった。

1人、どちらが勝つか賭けを始めたなら、芋づる式に乗る奴が増える。はやし立てる奴がいれば、喧嘩が起きた内容を知らせにくく奴もいる。

気付けば朝食のテント内は拳闘場の雰囲気だった。

アキハは兵士の顔面に頭突きを叩きこむ。

兵士は鼻血を流すが、ニヤリツと最高の笑顔を見せて、右掌底をアキハに叩きこむ。

兵士が格闘戦においてはアキハより何倍も上手だった。

アキハが1発殴る間に、3発兵士は的確にアキハの急所に拳を叩きこむ。

若さではアキハのほうが若く、スタミナはあった。

だが、格闘術を知らない点でアキハが圧倒的に不利だった。

鼻血を流し、口の中を切って血をながしながらも戦うアキハを支える想いは「畜生！」と感じる亡命者への不憫な扱いへの反抗心だった。「さっさとくたばりやがれ！ このジオン崩れが！」

「煩い！ お前に俺の何が解る！」

「何を甘い台詞を吐いているんだよ！ ジオンが地球にしてきた悪行の数々……。忘れたなんて言わせねえぞ！」

「俺とジオンは関係ない！ 言いがかりだ！」

兵士と組み合っては問答を繰り返す。

兵士は鼻血を少し流した程度の傷だ。

だが、アキハはどう見ても満身創痍の状態だ。

これ以上は危ないと誰もが考えたその時、凜とした声が喧噪を切り裂いた。

「これはなんの騒ぎだい！ 朝一番から問題行動を起こしている馬鹿たちがいるのかい！」

威圧感たつぷりの声を聞いて兵士は即座にアキハを掴んでいた手を放して、直立不動の姿勢を採った。

他の兵士たちは蜘蛛の子を散らすように我先にと去って行った。

姿を現したのは黒色タンクトップに迷彩長ズボン姿とラフな格好の美女だった。太陽の陽を受けて煌めく金髪は金色色の稲穂のように見えた。グラマラスな体型は見る者を虜にして放さない魅力があった。だが、女性的な外見とは裏腹に男性的野生感を漂わせていた。

アキハは大地に大の字に寝転がっては声の主を見て気付いた。

自身の上官であり、この試験隊の部隊長でもあるマリア・コーデイアルが来てしまった。

最悪の展開だとアキハは感じた。

マリアは20歳と若い年齢だが、持ち前の豪胆さと度量でこのキャンプ地を仕切っている姉御だ。腕っぷしが強く、軍隊格闘術の達人。モビルスーツ（以下MSに統一）操縦も確かで、この「天国に一番近い部隊」で最も長い勤続年数を叩き出していた。

そんなマリアを前にしたら士官たちも脱帽するしかないのが現地の掟だった。

マリアは切り目で荒れ果てた食事場を見て、だいたいの内容を察知した。

目の前で直立不動の姿勢を採っている兵士に対して質問をした。

「貴様、朝一番から新米技術士官と喧嘩をしたな！」

「ノー・マム！ レクリエーションであります！ 技術士官殿と親睦を深めておりました！」

「では、なぜ貴様と技術士官が血を流している！」

「軽く触れ合ったら勝手に流れました！」

「本当か？」

「イエス・マム！」

「貴様は去って良い！ 後はアタシと技術士官で話す！」

マリアが命令を下すと兵士は一目散に現場を後にした。

アキハは何十発も殴られた痕に触れて、自分の弱さを痛感していた。

そこへ、マリアが胡坐を搔いては話しかけてきた。

「亡命者は大人気だね。アタシも赴任して長くオマーンにいるが、アンタみたいな変わり種を受け入れるのは初めてだよ」

「隊長は俺が憎くないのですか？」

「ジオンは憎いき。でも、アンタはジオンを捨てて連邦軍に亡命してきた。理由はあるだろうが、仲間になったなら詮索はしない。アンタにはアンタの理由があるのだろう？」

「俺の理由……、でありますか？」

マリアは白い歯を見せてニカツと笑った。

「この連中はたいがいジオンが憎くて戦っている。アタシも含めてね。だから、ジオン出身のアンタが憎くなるのは当たり前だ。それは覚悟していたんだろう？」

アキハは首を横に振った。

アキハは父親の庇護の下、研究に熱を入れて一八歳まで育った。はつきり言ってお坊ちゃまだ。

だから、ここまで根深く差別が浸透しているなんて考えもしなかった。

「父親の命令を受け、憧れの地球に行けるのが嬉しくて来ました」なんて言えるわけが

ない。

アキハは心中で考えていた。

マリアはポケットからハンカチを取り出してアキハに渡した。

「アンタはアンタだ。これからアンタが戦う理由や譲れない想いが解ってくる。その日まで死ぬのは止めておきな」

そう語るとマリアは立ち上がって、アキハの前から姿を消した。

唯、一人残されたアキハはマリアの言葉の意味を噛みしめていた。

(続)

序章 遭遇

同日の午後――。

アキハは技術士官として、配備されていたMSの点検作業とメンテナンスを整備士と一緒にしていた。

だが、整備士も不愛想なものだった。

必要な会話以外はアキハに近づきもしない。

アキハはこのオマーンの地で孤独になっていた。

でも、アキハには熱中するものがあつた。それが連邦軍のMSだった。

ジオンの作ったMSとは系統が全く異なる構造をしている。その上で砂漠、防塵仕様に変更されている連邦軍のMSは非常に魅力的な存在だった。

名前を「先行量産陸戦型ジム」と銘うたれていた。

メンテナンス性はザクと同様に優秀。

だが、防御面、武装面ではザクを一回り強化した性能を誇るこのMSをアキハは熱中して整備していた。

そんな中、警報が鳴り響く。

これは、第一種戦闘配備の命令が下された意味を指す。

オマーンの地にジオン軍が接近しているとアキハは瞬時に悟つた。

戦車や戦闘機、MSが格納されている格納庫にパイロットたちが駆けこんできた。

その中にはマリアの姿があつた。

マリアは先行量産陸戦型ジムに搭乗後、外部拡声器を使用して各部隊に命令を下した。

『前線はアタシとコフィンのジムで張る！ 全員が出撃する必要はないんだよ！ アタシが命令する奴だけについて来い！ ウイルとコムは六一式戦車で後方援護！ アキハの坊やはホバートラックで索敵！ 行けるな？』

アキハは自分の名前が呼ばれた現実を受け入れられないでいた。

「技術士官の自分が戦場に出るなんてあり得ない」

アキハはそう考えていた。

だが、現実は全力でアキハの予想を叩き壊してくる。

『ボサツとするな！ 坊や、動け！』

アキハはマリアの一喝で現実を受け止めた。

ホバートトラックに駆け込み、エンジンを始動させる。日々、整備員が整備を欠かさず行ってきたので機器の調子は良好だ。

運転と索敵を1人で行うのは難しい。

だから、アキハは即座の自身の胸ポケットに挿入してあった、ステイック型メモリーを取り出した。

接続端子に接続して内容をロードする。

ホバートトラックのOSとアキハが普段プログラミングに使用するOSの相性に問題はない。

上手くインストールが成功した。

「ハル、起きてくれ！ 今から索敵任務に出る！ 索敵補助を頼む！」

アキハが声をかけると二十歳の男性が返答した。

「音声認証完了。アキハと一致。セキュリティ解除。ハロー、ハロー。アキハ、任されました。1日と32分振りの再会ですね」

「細かい挨拶は抜きだ。出撃するぞ！」

「ミッシヨン・スタート。索敵補助は任せて下さい」

ハルと呼ばれたAIはアキハが連邦軍に手土産として持ってきた人工知能だ。アキハは

念のためにデータバックアップを採っており、暇な時間を見つけては再構築を進めていた。

結果、元通りとまでは行かないが、再構築に成功していた。

アキハは先行量産陸戦型ジムの後を追従するようにホバートトラックを進めた。

全てが全く新しい、死地へとアキハは進んで行った。

○

オマーンから北上して30キロ地点。

陽は傾き、廃墟を真っ赤に照らし出していた。かつては人々が生活

を営み、夜を越えるために肌を寄せ合った煉瓦造りの家は戦闘によって蹂躪され、跡を残すだけだった。そこには、焼け放たれた哀愁が残っていた。

そこへ第32技術試験隊の混戦メンバーは到達していた。

アキハはハルに声をかける。

「ハル、現地点で味方偵察機がジオン軍勢力を視認した。ミノフスキー粒子が濃く正確な数は不明だ。だが、1機な訳がない。相手は複数機いる可能性が非常に高い。索敵はエコーを使用。周囲に敵勢力があれば即、友軍に通達しろ」

ハルはアキハの言葉を受けて「イエス・サー」と話した。

アキハは違和感を覚えていた。

技術士官として培われた計算力が、ここまで来る際、敵機に出会わない意味を考えさせた。

自分がジオン軍技術士官なら、連邦軍の懐、目前でデータを採らない。何かしらの理由があつて、わざと自機を晒したと考えるのが妥当と考えた。

アキハはその考えから導き出される回答に行きつき、即座に部隊長のマリアに回線を繋いだ。

「隊長、これは罠だ！ 進行と見せかけた、誘き出し作戦！ 敵はここで俺たちとの戦闘データ回収が目的だ！」

アキハの焦った声を聞いてもマリアは動じなかった。

「陽動作戦かい。このアタシを騙そうなんざ、千年はやいのさ。坊やは索敵を継続。コフィン、周囲の警戒を怠るな。アタシとアンタが虎の子の二機だ。ウィルとコムは廃墟を盾に後退。坊やの考えが正しければ……。夕暮れ時が最良の時間だね」

先行量産陸戦型ジムの主兵装は180ミリ・マシンガン。連射性に優れ堅牢なため故障し難い。

当たれば並のMSなら蜂の巣になる。

「これは先に姿を見つけたほうが勝ちだ」とアキハは悟った。

耳を澄ませてエコー探知を行っても、引つかかる機体は友軍だけ――

18メートルもの巨人を浮かせて隠す場所など、この砂の大地にはない。

アキハはそう考えていた。

だが、アキハは一つ見落としていた。

ウイルが六一式戦車を廃墟まで後退させる。

その瞬間、エコーが駆動音を捉えた。

「下だ！ ウイルさん、危ない！」

アキハが叫んだ時には遅かった。

砂漠の下から六一式戦車を貫通する真つ赤に燃える炎の剣が姿を見せていた。

剣は六一式戦車をバターののように真つ二つに切り裂く。

大爆発と同時に砂漠の中から1機の巨人が姿を現した。

ザクツード（以降IIに統一）。だが、機体の色がオレンジ色に塗られていた。砂漠でも活動し易いようにと配慮された上だ。頭部にはアンテナがあり隊長機なのが解った。軽装で右手にヒートソード。左手にザク・マシンガンだけの装備だった。パイロットは余程自身の腕前に自信があるのだ。

「後続は見えない。射撃で制圧する！ コフィン、良いな！」

マリア機とコフィン機のマシンガンが咆哮する。

黄昏時の廃墟に金色色の葉莖がはじけ飛ぶ。

だが、ザクIIの動きは通常のMSの動きとは考えられない軌道を描いた。

バーニアを吹かせてのジグザグ運動回避。

同時に、遠距離からの砲撃を恐れて、まずはコムが乗る六一式戦車を串刺しにした。

ヒートソードで串刺しにされた六一式戦車はキュリキュリとキャタピラを鳴らしなが

ら、無機質な物体に姿を変えた。

ザクIIは無力化した六一式戦車を先行量産陸戦型ジム二機側に投げつける。

爆散して視界が封じられた瞬間を狙ったの突貫をザクIIは行っ

た。

「マーク五に敵機！ 射撃開始！」

唯一、エコーで目を塞いでいたアキハだけが爆発の光に動揺しなかった。

1人冷静な人間がいると、部隊は問題なく機能する。

マリア機とコフィン機は後退しながらも、180ミリマシンガンの掃射を止めなかった。

判断が良かった。

ヒートソードで一撃必殺を狙っていたザクIIがマシンガンの弾丸による雨で突貫を断念した。

アキハは冷静に、戦況を確認しながらホバートラックを運転する。

同時に、ハルにザクIIの動きを外部カメラで録画しろと命令していた。

技術士官だから解る内容がある。

相手のザクIIはリミッターが解除してある。

幼い時からテツハにザクIIの整備方法や操縦法は教わっていた。だから、アキハは機体スベックや人体への負荷も体感していた。

明らかに目の前にいるザクIIは人体への負荷を考慮していない。ジオン公国にはエースパイロットが多くいる。その中には機体スベックを三倍に引き出す者もいた。

だが、その比ではない。

並の人間だと即死する急旋回に、急加速。眼球運動では絶対に無理なロックオン行動等、ザクIIの機体を「人間以外の者」が乗るように調整してあるとしかアキハは考えられなかった。

『何だい、あの動きは！ 化け物か！』

マリアすら戦慄を覚えるザクIIの動きに一人冷静に対応する者がいた。

コフィンだ。

この男は射撃が威嚇にしかならないと考えるとアキハに通信を入れて来た。

『ジオン崩れ。君ならザクのスベックを熟知しているよね？ 今直

ぐ、こちらに奴の動きをトレースするナビを入れる。そうしないと、ここで狩られる』

「言動は気に喰わない。でも、やりますよ。ああ、やってみせます」アキハは素早く先程まで録画していたザクIIの動きと癖を確認する。すると、操縦しているのはハルのようなAIとは違う、癖が見受けられた。つまり、中身は人間が操縦している答えになった。

だが、機体スペックは人間が耐えられない数値を叩き出している。どうやって？

何がそうさせている？

疑問と謎は尽きない。

だが、答えを導き出すより、生き延びるのが先だ。

コフィン機にザクIIの解析したデータを転送する。

すると、コフィン機は一八〇ミリマシンガンを捨てて、ビームサーベルを引き抜いた。

アキハはコフィンの判断に戦慄した。

人間以上の存在に人間が挑む。

ある意味神殺しをコフィンは成そうとしていた。

「コフィンさん、死ぬ気か！」

『死ぬ気はない。唯、ジオン軍がのうのうと戦場を駆けている姿が気に喰わないのさ』

先行量産陸戦型ジムがブーストを最大にして突っ込む。

ザクIIが「その粹やよし」と語らんが如く、ヒートソードを振りかぶり突貫して来た。

幾度も交差する二機の剣戟。

廃墟を崩しながら、大立回りをするザクIIとコフィン機。

機体の動きとしてはザクIIが先行量産陸戦型ジムを圧倒的に凌駕していた。

だが、パイロットの差だ。

コフィンは天才だ。

反応速度で劣る点を第六感で補っている。

ザクIIが右下から振り上げられる斜めの斬撃を放つ。

コフィン機は寸差で後方に回避しては縦の斬撃で報復する。

ザクIIの卓越した動きに対して、戦闘を肌身で感じて対応するコフィン機はスペック以上の性能を叩き出していた。

だが、光景を見ていた、アキハは気付く。

「このままだとコフィンさんが殺される！」という未来が待っている。

アキハは無謀と解りながらも動かすにはいられなかった。

ホバートラックを前進させて、唯一の武装、マシンガンを放つ。

コフィンは確かに善戦していた。

だが、先行量産陸戦型ジムは試作機だ。

ザクIIみたいにくチューニングされた異常機とは違う。

あと1分もしない内に各関節のサーボモーターやアクチュエーターがイカれ、可動域から炎が上がる。

そうすれば搭乗者のコフィンは焼け死ぬか最悪、鉄の棺桶で潰され
圧死だ。

「ここで死んではいけない!! 生き残ってこそその命だろ!!」

ホバートラックの急襲をザクIIはコフィンとの戦いに夢中で反応が遅れた。

右足側面からの体当たりでホバートラックは爆散した。

アキハは当たるのを予測してハルのデータを回収して危機一髪のところ
で脱出していた。

右足に損傷を負ったザクIIは本来の異常な動きが出来なくなっ
ていた。

『ジオン崩れにジオン軍がやられたら様がないね』

コフィン機がトドメの横一閃のビームサーベルの斬撃を放つ。

だが、コフィン機が急に動きを止めた。

『どうした? クソ、各部位に負荷をかけ過ぎたか』

コフィンのモニターにはアクチュエーター破損、サーボモーター軸
ズレ等の様々な警告表示が現れていた。

コフィンは緊急脱出装置を躊躇なく引いた。

パイロットがいなくなった先行量産陸戦型ジムはザクIIに胴体

から真つ二つにされた。かろうじて核融合炉を叩き切られることはなかった。

残ったのはマリア機と右足を破損したザクIIだけだった。茜空が2機を真つ赤に染める。

場所は中東だが、立派な決闘の場に相応しい状況となっていた。

『残ったのはアタシー人……。相手は坊やの機転で手負い。コイツは負けていられないね』

2機が向き合って動かない。

流星の異常機もマリアの腕を感じ取っていた。

歴戦のMSパイロットに生半可な覚悟で挑むのは自殺行為だ。

だから、2機とも相応に歴戦の者だと証明していた。

最初に動いたのはザクIIだった。

バーニアを全力で吹かして威嚇しながら、左手に持ったザク・マシンガンで掃射し始めた。

マリア機も軽快な動きで弾丸の雨を回避しながら、盾を使って直撃をかわしていた。

唯、やられるだけがマリアという女性の性格を現していない。

マガジンを交換して、180ミリマシンガンを正確に叩きこむ。

マシンガンの打ち合いで不利なのはザクIIだ。

異常に速いといってもマシンガンの弾幕から逃げるのは難しい。

また、ザクIIの操縦者の気質だ。

「退く」概念がない。

「死ぬのが全く怖くない」と言いたげな行動でマシンガンを連射しながらマリア機との距離を詰める。

だが、人間は危機感があつてこそ強い生物だ。

マリアはその点、人間臭い女性だった。

唯、マシンガンを連射するだけではなかった。

自機とザクIIが半径五百メートルを切ると、腰に装着していたハンド・グレネードを放り投げ、マシンガンを掃射した。

マシンガンの掃射を受けたハンド・グレネードは大爆発を起こす。

ザクIIとマリア機の間を黒煙が漂い視界を封じる。

それこそがマリアの狙いだった。

『アタシは臆病者でね！ 確実に相手を倒せると考えるまで動かない質なのさ！』

黒煙を割ってマリア機がビームサーベルを振り上げてザクIIに襲い掛かる。

この行動にはザクIIも驚いた。

ヒートソードを構える前に左肩を叩き切られた。

ザクIIは左肩を斬り落とされ、ザク・マシンガンを失った。

『ちよいさー！』

返し刀でマリア機が横一閃を放つ。

普通なら、機体を破棄して脱出装置を起動させる。

だが、ザクIIのパイロットは機体と同じく異常なのだ。

ヒートソードを構えて、横一閃のビームサーベルを受け止めた。

まだ、戦うつもりだ。

マリアはザクIIのパイロットに向かって光信号で警告を促す。

『脱出しろ。勝負はついた』

だが、ザクIIのパイロットは反応すらしない。

まだ、戦意を失っていない。

「本当に異常だ」とマリアは感じた。

『それじゃあ、アンタの生きる道はここまでだね！』

マリア機の頭部めがけてザクIIはヒートソードを突き出す。

だが、マリア機は動きを読んでいた。

低くしゃがみ。左側からの横一閃を放つ。

コックピットの中まで鼻を突く鉄の焼ける臭いがした。

マリア機はザクIIの胸を切断した。

そこで決着はついた。

たった一機。

ジオン軍はザクII一機で連邦軍に六一式戦車を2両。ホバート

ラック1両。MS1機を失う痛手を被った。

優秀な人材も2名失った。

地上で動きが止まったザクIIを見上げていたアキハはどうして

こんなことになったのかを考えていた。

その時、コックピットハッチがビームサーベルの熱によって変形し剥がれ落ちた。

中からパイロットがズルリツと崩れ落ちて来た。

どうやら気を失っているみたいだ。

アキハが人間クツションになり受け止めたパイロットは、アキハと歳が同じ18歳の美少女だった。

「この子があのザクを動かしていた……？　嘘だろ？」

失意のアキハと謎の美少女の出会い。

これが1つの争乱の始まりだった。

(続)

第1章 連邦とジオン 秘事

アキハはマリア機のコックピットにジオン軍の美少女と一緒に乗せてもらいオマーンのキャンプ場へ帰還した。

帰還の際、マリアもジオン軍の美少女の顔を見て「何かの間違いだろ?」と言葉を零していた。

唯、美少女だからといって良い目で見てもらえるわけではなかった。

マリアと同じく、先行量産型陸戦型ジムで命のやり取りをしたコフィンは、美少女の前で一言も喋らなかつた。

終始、般若の形相で美少女を睨みつけては威嚇していた。

そんな状況でアキハは美少女についてなぜか、激しく興味を持つた。

「可愛らしいからだろ?」と言われたらそうかもしれない。

だが、何故か心の中でアキハは美少女に後ろ髪を引かれる想いがある自分に気付いていた。

4人が無事に帰還した時は陽も暮れて夜になっていた。

帰還した4名を待っていたのは、第32技術試験隊大隊長フォックス少佐だった。

フォックス少佐は陽に良く焼けた健康的な顔が特徴的な三十路後半の若い士官だった。人当たりも良く、特にマリアと一緒にいる姿が多い。だから、2人の関係について詮索する兵士が後を絶たない。

そんな善人のフォックスがマリアの帰還を見て、声を荒げた。

「大尉、どういう事だ! ウィル少尉とコム少尉がいない! まさか、戦死させたのか!」

マリアはジムをキャンプ入口に立膝で座らせると、面倒臭いといった様子でショートヘアの髪をグシャリと掻きまわした。

「ああ、そうさ。アタシの判断ミスで二人はお空に還っちゃったよ。罰なら受ける覚悟がある。だが、敵を確保してきた。アンタはソイツ

から情報を聞き出すのが先だろ?」

「ジオン軍兵士を捕らえてきたのか! また、無謀なことをしたもんだ! 両少尉のラックの整理はコフィン少尉に任せよう。それと、アキハ技術官。少し話がある。大尉と一緒に私の私室に来てくれないか?」

アキハは自身がなぜ、フォックスに呼ばれた理由が解らなかった。それより、美少女の容態と今後の処置が気になって、落ち着かなかった。

マリアが担架で運ばれて行く美少女の後を視るアキハに、面白い玩具を見つけた子供みたいに燥いで話しかけた。

「坊やはあんな子がタイプなんだ。アタシみたいないい女がすぐそばにいるのに、同じ歳でも少し幼い童顔が好みとは……。アンタは本当に坊やだねえ。キスは今までの人生でした経験はあるのかい?」

「何でそんな話になるんですか? 唯、俺はあの子がどうしても気になって——」

「好きなんだろう? 一目惚れなんだろう? 抱きたいんだろ?」

「煩い上官ですね。違いますよ。俺はやましい思いなくあの子を心配しているのです」

「なら、さっさと狐のところに行こうか。用件とやらを早く聞いて、アンタにジオン兵の尋問をお願いしようか」

「俺があの子を尋問する? 冗談言わないで下さい。俺は技術者として連邦に亡命してきたのです。尋問関係は黒服の得意分野だ」

「アンタ、このキャンプ場を甘く見ているね。最初に話をしたと思うが、このキャンプ場に集まり、勤続年数が長い連中は全員、ジオンを中心憎んでいる。勿論、アタシも含めてね。そんな場所の黒服とやらが、ジオン兵に対して真面な尋問をすると思うかい?」

マリアが碧眼を大きく見開いて真剣な眼でアキハを見据えてきた。

アキハはマリアの眼を見て気付いた。

「真面な尋問なんてここに絶対がない」

現実を知ったアキハは自身の胸が縄で縛りあげられるほど痛い感覚に見舞われた。

もし、あの美少女が傷を負う目に遭ったら……。

もし、あの美少女が女の子としての尊厳を失う行為に遭ったら……。

もし、あの美少女が二度と話せない状態になったら……。

考えれば考えるほど、アキハの胸は縛り上げられた。

マリアはそんなアキハの表情を視て、笑顔を浮かべた。

「アンタは優しい奴だな。この戦争で人類同士傷を負ってもまだ、憎み合っている。なのに、アンタは立場が違う相手の状況を考えて真つ青な顔をしている。その想いを『優しい』以外にアタシはどう呼ぶか知らないよ」

「でも、俺にこの感情を気付かせてくれたのは隊長です。俺、あの子と話をしてみたい」

「なら、こんな入口で立ち話をしていないで、狐野郎の部屋に行くよ。アタシは戦闘から生還したら一晩中酒をかつ喰らわないと生きた心地を実感できないんだ。用事が終わったらアンタにも晩酌を付き合ってもらおうからね！」

マリアは豪快に笑うとアキハの背中を豪快に右手で一回叩いた。

気分が晴れる清々しい音がキャンプ場に響き渡った。

アキハは「凄く痛い。だけど、心がスツキリした」と思い心中でマリアにお礼を述べた。

アキハとマリアは並んでキャンプ場の中心部にあるフォックスの私室に向かった。

(続)

その話は……。

「失礼しますー！」

マリアが木製のドアを二度ノックして大声を張り上げる。
アキハとマリアが来たのは煉瓦造りで急造されたに違いない、民家だった。

ドアの建付けは良くないし、窓は半分外れている。見た目だって良くない。でも、ここに居る兵士たちの生活からしたら、こんな小屋でも独り占めできたら優雅だ。

「入りましたまえ」と凜とした大人の声が、勢い任せのマリアの声に対して返される。

マリアは我が物顔でドアノブを力任せに回して開ける。

中に入ったアキハは中が外見とは違って綺麗に片付いているのに驚いた。

照明はシャンデリアでイギリスかイタリアか解らない。だが、その辺りの良い物を使って飾っていた。床には赤い絨毯が敷かれており、アキハは自分の靴が砂と泥だらけで踏んで大丈夫か戸惑った。部屋を中心にあった執務机も高級品で黒々とした立派な木製の椅子と机を使っていた。狭い部屋なので一番奥にあったベッドはシングルベッドだが、金色の飾りがついた豪華な仕様だった。

フォックスはマリアとアキハを交互に視て力強く喋った。

「今回の任務で二人の貴重な人材失った。MS、戦車も失った。だが、君たちという経験値は他の誰にもないじゅうぶんな糧になる。大尉に対しての処罰は一週間の朝食抜きにさせて頂くよ」

「アンタ、本当に意地が悪いね。女の子に対してのマナーがなっていないよ。こちらは、化け物相手に命を賭して戦って帰ってきたんだ。お咎め無しが当たり前だ。朝食を一週間も抜きになったら、アタシは兵隊を辞めて女優になるよ」

「夢があつて良い話だろ？ 僕が科した罰で君が女優になれたら是非、プロポーズさせてくれ」

フォックスはニヤリと二枚目な笑顔を浮かべた。

「マリアは「死にやがれ」と小声で呟いた。

フォックスはそんなマリアの悪態を受けてもどこ吹く風だ。

笑顔のまま、執務机に両肘を突いて、話を始めた。

「急遽決まった内容で適任者が君たち2人しかない。我が第32技術試験隊に性能評価実験用の機体が数機補充される方針に決まった。だが、コイツが厄介なことに軍事機密の塊でね。技術的な内容は最小限しか開示されない。『現地で調整されたし』と上層部から話が降りて来た」

「失礼ですが、大隊長。最小限の情報でどう整備するのです？ 開示されない技術を解読するのは不可能です」

「だから、君、アキハ技術官の出番だ。丁度、ジムも1機破壊されてしまったみたいだ。大尉が使っているジムのコフィン少尉に譲渡。大尉には新型機に乗ってもらおう」

「大盤振る舞いだな。壊しても大丈夫なんだろうね？」

「壊さないように使うのが大尉の仕事だ。戦闘データを採るのが当面の仕事になる。両名には大いに期待させてもらう。以上！」

ケジメは必要と言わんばかりにマリアは敬礼をアキハより早くして豪華な私室を出て行った。

後を追うようにアキハも敬礼をしてフォックスの私室を出た。

アキハはマリアの横まで駆け寄ると、不思議に感じていた想いを吐いた。

「隊長は大隊長と仲が良いのですね。恋仲ですか？」

マリアは右手親指で鼻頭を擦ると軽く笑った。

「そう見えたかい？ 残念だが、違うんだよ。アタシはインテリの坊やは好まない。もっとワイルドな男が好きなのさ」

「なら、俺は嫌いですか？」

「アンタはまだ解らないだろ。これからに期待させてもらうよ。さあ、はやく捕虜の所に行きな。アタシに代わって言われたと告げれば万事上手いくさ」

アキハはマリアに背中を突き飛ばされた。

危うくこけそうになったのを堪えて、マリアにお礼の敬礼をした。

マリアはニカツと白い歯を見せて最高の笑顔を見せると、バーのほうに向かって早足に去って行った。

残されたアキハは「急いであの美少女の元に行かないと」とキャンブ内を駆けた。

気持ちばかりが早くなって、身体が全く追いつかない。

どうしてこんな気持ちになるのか？

なぜ、こんなに胸が締め付けられるのか？

アキハには全く解らなかったが、あの美少女と話せば全部解決すると、考えていた。

その日は足元までハッキリ見渡せる満月の夜でとても神秘的な砂地の晩餐会の日だった。

(続)

密会（1）

アキハは赴任してきた最初の内、捕虜等は監獄に入れられると考えていた。

だが、ここオマーンのキャンプ地では岩場がほとんどない。

雨もほとんど降らない気候で、昔は閑静な住宅街だった街並みも戦場と化し、瓦礫の山と化していた。

そんな中、捕虜は裸で両手を縛って外に放置が連邦軍の捕虜の扱いだった。

捕虜の扱いについても協定がある。

だが、完全に人権を無視したこの光景こそが現地の実態で、ジオン軍に対する連邦軍の兵士の声だった。

アキハは唾然とした。

監視役もない。

拷問をするわけでもない。

唯、来ていたノーマルスーツを剥いで、下着も全部千切り、あられもない姿で両腕を拘束され、砂の大地に放り出されていた美少女の扱いに心を痛めた。

確か、アキハも亡命の際、亡命者にあらざる行為を受けた挙句、このオマーンの地へと飛ばされた。

だが、これは酷い――。

人間に対する扱いとは考えられない。

アキハは目の前で力なく横たわる美少女の四肢を見て怒りを覚えた。

同時に、「自分は見てはいけない光景を見ている」とも感じた。

オマーンの地は昼、暑いが夜は冷える。

裸のままだと確実に体調を崩す。

アキハは自分の上着を脱いで、美少女にかけようとした。

刹那――。

美少女の目がカツと見開いた。

褐色に焼けた健康的な足が「一瞬、見えなくなった」と感じた時、ア

キハの首に鉛玉が投げつけられたような感覚に襲われた。

アキハは俯せに倒れる。

そのアキハに対して、頭を踏みつける行為をする美少女。

アキハは砂の大地にキスをしながら必死に叫んだ。

「止める！ 俺は君の敵とは違う！」

だが、アキハの現実は厳しかった。

美少女は体温を感じない冷徹な声で話した。

「あなた、連邦軍。わたしはジオン公国に忠誠を誓っているの。だから、敵同士。あなたの言っている内容が解らない」

アキハは感じた。

「この美少女はまるで機械人形だ」と――。

抑揚のない平坦な声。

意志を感じない瞳。

「連邦軍人なら容赦なく殺せます」と語る行為。

全てがアキハの考えていた美少女像とは違っていた。

でも、アキハの胸を締め付ける縄は全く緩みはしなかった。

美少女が完全にジオン軍人だったから――。

「だからどうした！」とアキハは叫んだ。

胸の縄から解放されるため、全ての熱い感情を吐き出した。

「お前はジオン軍人だからとか言っているけど、その前に一人の女の子なんだぞ！ そんな姿をしていたら良くない！ それに俺はお前と話がしたいんだ！ 理由なんて解らない！ でも、気になって仕方がないだよ！ だから、足を退けてくれ！ 俺はお前を傷つけない、絶対にだ！」

アキハの絶叫に美少女はキョトンとして首を傾げた。

まるで、「アキハみたいな人間を初めて見た」と言いたそうな無垢な仕草だった。

アキハは美少女に頭を馬鹿みたいな力で踏みつけられた状態で、右手に持った上着を差し出した。

「上着を着ろ。そんなエロい姿をずっと見ていたら、俺の理性が持たない。頼む……」

美少女はアキハの渾身の願いを聞いて、おどおどと上着を受け取った。

アキハは美少女が上着を着てくれて助かったと感じた。だが、美少女はアキハを信用していなかった。

理由は簡単だ。

アキハの後頭部を踏みつけている足の怪力を抜いていない。

アキハは依然、地面にへばりついたままだった。

「頼む、俺を信じてくれ！ この感情が何か解らない！ だが、お前に対して危害を加える感情とは違う！ だから——」

「そう言って連邦軍は街を焼いた」

「違う——！」

「わたしのお姉さんも帰って来なかった。連邦軍は嘘を平気で吐く。その上、大切な人を沢山奪う」

「——ッ！ 俺は連邦軍とは違う！」

「でも、この上着は連邦軍士官の物」

「俺は亡命者だ！ 元ジオンだ！ この場所でも良い扱いはされていない！——」

「あなたが、ジオンの人？ スペースノイド？」

怪力が弱まった。

アキハは腕立て伏せの要領で、一気に顔を砂の大地から離す。

そのまま、真っ直ぐ射抜くように美少女の眼を視て言葉を紡いだ。

「俺はこの戦争の意味が解らない！ ジオンにいて、連邦に来て見た風景は悲しみと保身だけだった！ 俺はどうしたらいいんだ！ お前みたいに盲目的に軍を信じれない！ 正義が解らないんだ！ 教えてくれ！ 何でお前はそこまで戦える！ 何がお前を突き動かす！」

アキハが吐いたのは心を縛っていた縄だった。

亡命して、不当な扱いを受けてからの死地への矯正転勤。

そこで受ける、亡命者だからという不憫な眼差し。

アキハは無意識に想いを募らせていた。

ジオン本土にいた頃は何も考えず技術士ができた。

だが、テツハの意向で亡命を命じられた時から、アキハの正義への疑念は始まっていた。

そんなアキハが出会ったのは、命を賭してでもジオン軍に殉ずる兵士だった。

だから、アキハは美少女にその根底にある想いを是非、聞いて自分と比べたかった。

アキハの縄を真正面からぶつけられた美少女は無垢に首を傾げて答えた。

「初めての質問。わたし、解らない」

「お前は解らないモノに命を懸けるのか？」

「でも、わたしはその術しか解らないし、教えてもらっていない」

「お前、馬鹿だったんだな。凄い信念や理想を掲げているかと思っただけど……、馬鹿だったか」

「む、馬鹿馬鹿いうな。わたしだって戦う以外にできる内容が沢山あるんだぞ」

「なんだよ？ どうせロクでもない話だろ。とりあえず聞いてやるよ」

「わたし、お絵かきが上手い」

「乳児のできるできないの話とは違うぞ！ そんなの誰だってできる！ ゴリラみたいな力している癖に頭はチンパンジー以下かよ。失望した——」

アキハは本当にうな垂れた。

(続)

密会（2）

何だか解らないけど、目の前の美少女に心底、失望した。

その場に胡坐を搔いて、落ち込んでいると、申し訳ないと感じた美少女から話しかけてきた。

「あなた、名前はなに？」

「馬鹿に名乗る名前はない。どうせ三歩歩いたら忘れる癖に——」

「わたし、物覚えは家族の中で良いほう！ 九九が言える！」

「だから、そんなお前が嫌なの！ 俺は九九ができるって自慢してくる奴に命を賭して突貫したと考えるだけで涙が溢れてくるんだよ！

この気持ち解らないだろ！ いや、お前には一生解って欲しくない！」

「うう……、怒られた……。名前も教えてくれないケチンボに怒られた……。た……」

「何も泣くまで落ち込まなくても良いだろ……。悪かった。俺の名前はアキハだ。アキハ・アンドーだ」

「アキハ！ わたしの名前もお礼に教えてあげる。お父さんが『名前を簡単に教えたなら駄目だ』っていつも煩いけど、アキハはなんだかわっているからいいよ。わたしの名前はフタバ！ フタバ・バーキア」

アキハはフタバが自分の名前を覚えてくれた時に見せた、あどけない笑顔が最高に素敵だと感じた。

アキハはフタバが少し、ほんの少し心を開いただけなのに、自分の立場が揺らいでいるのに気付いた。

アキハは元ジオン軍側の人間とはいえ、亡命して連邦軍に受け入れてもらった身だ。

ここまでフタバと仲良くなつて、心に「フタバを救ってあげなければ！」などと考える使命感を抱いたら、連邦軍内での立場が危うくなる。

アキハは自分自身に言い聞かせた。

『なぜ、連邦軍にジオンを捨てて亡命した？』

『自身の安全を確保してもらい、アンドー家を断絶させないため』
アキハは中東最前線に飛ばされた時点で、連邦軍は信用ならないと
感じていた。

だが、このキャンプ場で信頼をなくすのは絶対に駄目だと理解して
いた。

アキハは「心の縄は解けた」と自身に言い聞かせて、立ち上がった。
そんなアキハをフタバは不思議そうに眼を大きく見開いて興味深
そうに見ていた。

「俺の用は済んだ。後は他の奴に任せる」

「アキハがわたしとお話をしてくれる訳ではないの？ 何で遠くに離
れていくの？ 名前を教えてあげたでしょ？」

「名前の件は感謝しているよ。でも、俺にも立場がある。お前と一緒
にいるとまた『ジオン崩れ』と言われるからな——」

「わたし、解るよ！ アキハ、本当は誰か側にいて欲しいのでしょ？
でも、いないから寂しいからわたしのところに来た？ 違う？」

「違う。俺はお前の正義のありかたを知りたかったんだ。馬鹿だった
お前に用はない。じゃあな——」

アキハは吐き捨てるのと断腸の想いでフタバの前から立ち去ろうと
した。

フタバはずっとアキハの名前を雛鳥みたいに呼び続ける。

その声が愛らしくて——。

その声が痛くて——。

その声が憎らしくて——。

アキハは下唇を強く、強く噛んで「なぜ、こんなモヤモヤした気分
になるのか解らない」と考えた。

その時、後ろで最低な声が聞こえた。

「おい、捕虜が技術士官様を呼んでるぜ？ あの士官様、なんだ、ジオ
ン崩れだからって捕虜を手駒にとって良いことしたのかよ？」

「ジオン崩れにはジオンの女がお似合いだよ。まあ、ここまで可愛
かったら別の話だけだな。この女が本当にコフィンのジムを撃破し
たのか？」

「違う違う！ どうせザクのコックピットの中で尻を振って誘惑したんだよ！ コフィンは堅物だからな。一発で操縦ミスしたんだぜ！ だから、こんな可愛い子でも撃破すんだよ」

連邦兵士2人が折合いが悪い時にフタバの声になびいて寄って来た。どうやら二人共酒を飲んでる。しかも、泥酔状態だ。

アキハは必死に我慢した。

「何が起こっても自分には関係ない」と自分自身に言い聞かせ、アキハはその場から立ち去ろうとした。

その時、事は起きた。

「おい、捕虜なら俺たち連邦軍人の慰めも役割だぞ。しっかり役割果たさねえと、頭、拳銃でぶち抜くからな」

「お前は本当に正直者だな。だが、女はジオンから取って来いって話だしな。一発やってやれよ」

連邦軍人の声を聞いて、アキハは踵を返していた。

自分は何をしようとしているんだ？

どうして仲間に対して殺意を覚えているんだ？

そんな考えをする前に身体が動く！

「止めろっ!! ソイツに手を出すな!!」

アキハは勢いがついて叫んだので、危機迫った絶叫を発してしまった。

連邦軍人2人は明らかに機嫌が悪い。

体格も筋肉のつきかたも明らかにアキハより2人が良い。

喧嘩をしても一方的に殴られるだけだ。

だが、アキハにはガッツがあった。

「技術士官殿？ あなた1人だけ良い思いして他の人間にはさせない気ですか？ それは余りにも……、目に余る行為だと感じますが？」
「積極的だった兵士が切れ目を更に吊り上げて迫る。

だが、アキハは譲らなかつた。

「その子の尋問担当は俺だ。マリア隊長からも一任されている。それ

にお前たちだといかがわしい内容しか頭がないだろ？ そんなの尋問でもなんでもない！ 唯の犯罪だ！」

「このジオン崩れ！ 仲間を庇う気だな！ 亡命してまた掌返す前に俺たちが動けなくしてやる！」

「技術士官だからっていい気になるなよ！ 機械に詳しい奴が偉いなんで現場じゃ通用しないのさ！」

「俺はジオン崩れとは違う！ でも、連邦に魂を売る気は一切ない！」
「生意気な！」

「典型的な敵前逃亡者の考えかただ。俺が叩き直してやる！」

アキハと連邦兵士2人は取っ組み合いになった。

だが、騒動自体は広がらずに終わった。

理由はアキハが喧嘩に激しく弱かったからだ。

散々掌底を叩きこまれ、膝打ち、蹴り、肘打ちと一方的な展開でア

キハは叩き伏せられた。

だが、アキハの抵抗は成功した。

フタバの純潔を守れたからだ。

フタバの前で完全に意識がなくなっているアキハを見てフタバの胸に少しの変化が現れた。

それは、感情が消えかかっていた少女の大きな一歩だった。

(続)

疑惑

「坊や、起きな。全く、何をどうしたら、こうなるのだか？」

アキハは耳に馴染みのある声が聞こえたのに気付いた。

少しずつだが意識が四肢に行きわたっていく。

アキハは考えた。

「何で俺は呆れられているのだろうか？」

そんな考えが脳裏に浮かんで消える。

アキハは自分がなぜ、こんなに寒いと感じる場所で寝ているのか、

一瞬だが考えた。

そうだ。

昨日の夜、ジオン軍の捕虜を助けて、喧嘩になった。

アキハは喧嘩に負けて、気絶させられた。

そこまで思考が追い付くと、アキハの行動は早かった。

瞼をしっかりと見開いて、上半身を素早く起こす。

視界に入ったのは、オマーンにある連邦軍、キャンプ地の隅で厄介

者を視るマリアとフォックスの呆れた姿だった。

マリアは「アンタも隅には置けない奴だったとは」と半分呆れていたが、もう半分は楽しんでる感情が染み出ていた。

フォックスは眉間にしわを寄せて、そんなマリアに小言を語った。

「大尉、こことは簡単ではない。アキハ技術官と捕虜がただならぬ関係

だと知れたらここにいる兵たちの濁流は全てアキハ技術官に向いて

しまう。これは、かん口令を敷く必要があると私は考える」

必死な形相で身振り手振りを着けて話すフォックスを見て、アキハ

は何が重大なのか理解できなかった。

だが、アキハが立ち上がるのと右手を大地に着こうとした行為が、

現実を知る意味に繋がった。

アキハが砂の大地に掌を当てたと思うと、柔らかく温かい小柄なも

のに触れた。

「おかしいな」とアキハは直ぐに考えなかった。

「鼠でも居たか？」と至極楽観的に考え、手元を視ようとしなかった

た。

だが、アキハが手を少し動かすと甘く甘美な声が直ぐ近くから聞こえた。

アキハはその声を聞いて背筋が凍った。

「まさか——」

と、眩いて、振り向くと半裸のフタバがアキハのすぐ横で丸まった姿で愛らしく寝息を立てていた。

アキハが触れていたのはフタバの左手だった。

アキハは自分自身の潔白を証明する手段を必死に——、必死に——考えた。

だが、アキハは昨日、喧嘩でボロボロに負けて意識がない。

真実を知るのは、目の前の美少女、フタバしかいなかった。

「少佐！ 大尉！ 俺は何もしていません！ 亡命した身でジオンに寝返る行為を犯すはずがない！ それに、俺は女性が苦手です！ こんな可愛らしい子、手が出せるはずがないです！」

アキハは必死に弁論した。

だが、アキハが必死になればなるほど、怪しきは増すばかりだ。

フォックスがアキハに「喋るな」と制して語り出した。

「アキハ技術官。私や大尉は君を信じている。だから、特に追及はしない。それに、君は非常に稀有な青年だ。こんな美人な大尉を見ても何も感じない唐変木な面が伺える。そんな君が一晩でジオン軍の捕虜を手玉にとったとは考えにくい」

フォックスの言葉を受けてマリアが豪快に彼の背中を一発叩いた。

アキハは「そんな男勝りな面さえなければ、本当に美人なお姉さんなのだが——」と心底ガツカリした。

マリアがニヤニヤしながらしゃがんで、アキハと視線を合わせて優しく語った。

「アタシとしては、アンタがこの子を気に入って一発かましたほうがラブ・ストーリーとして感動できるから好きだけだね。まあ、今が今だ。アンタがこの子に惚れないように見張るのが最善の策だよ。悪く思わないでよ」

フォックスもマリアの言葉に合わせて意見を述べた。

「ジオン軍が女性を使って私たちを揺らがそうと考えることもできる。だから、アキハ技術官にはしばらく、大尉の元で行動してもらおう。仲間内には私から口止めをしておく。頼むから私の信頼を裏切る行為は慎んでくれ」

「勿論です！ 俺は本当に潔白の身です！」

アキハは立ち上がると敬礼をした。

その意味は、「自分は連邦軍人であり、ジオン軍人とは全く相いれない」と態度で示した。

フォックスはそんなアキハの態度を見て、厳しい表情を和らげた。

マリアは少しつまらなそうに舌打ちをした。

そんな、スパイ容疑をかけられてもおかしくない状況から、アキハの一日は始まった。

その名は「ガンダム」

アキハは朝食を済ませ、自分の仕事、MSや戦闘車両の調整に格納庫へ向かった。

だが、格納庫前には連邦軍兵士の人ばかりと、見たこともない白いMSが三機片膝を突いて鎮座していた。

ジムとは違い、人の顔に近い造形をした頭は精密機械の固まりだと考えられた。胴体は先行量産型陸戦型ジムと共通部品が多く使用されていた。だが、胸部にマシンガンやミサイル等、攻撃面で更に強化を図られていた。脚は先行量産型陸戦型ジムと同等の部品を使用してメンテナンス性を向上させているなどアキハの視点から見たら直ぐに解った。

「コイツ、少佐が昨日言われていた最新鋭機か……。その割にはジムと共通点が多いな」

「やはり、君の眼は誤魔化せないか。そう、この機体こそジムの原型となったRX-78系の派生で生まれた機体。その名も『ガンダム』だよ」

ガンダムから少し離れた場所で、眺めていたアキハにフォックスが近づいて来ては、ゆっくり語った。

「だが、この機体は本家本元のガンダムとはまた違っていてね。地上戦専用パーツを急ごしらえで調整して作った『陸戦型ガンダム』と呼ばれる機体だ。連邦軍のV作戦で開発された本物は今頃、宇宙(そら)で最後の調整を受けているだろうさ」

「なるほど。本家のハイパフォーマンスさから限定的な力だけを余剰部品から引き抜いて作成した機体ってことですか？」

「そうだ。この機体がジオン軍に対する連邦軍の切り札だ。だが、情報が入っていてね。V作戦の主要な機体に乗せた戦艦がジオン軍の攻撃を受けたらしい。詳しい話はまだ入っていない」

「そんな……。起死回生の中で、最重要機密が破壊、奪取されでもしたら……」

「だから、この機体を扱う、君と大尉には他の人以上の信頼を置いてい

るのだよ。君にあの三機の運用方法は一任する。君のほうが技術者としての知見は広く、深い。だから、大尉の元で戦闘データをしっかりと取ってくれたまえ」

フォックスはそれだけ語ると、アキハの右肩を一回叩き、場を去った。

残されたアキハは目の前にそびえ立つ18メートルの巨人たちをどうしようかと考えた。

悩んでいると、1機の陸戦型ガンダムの胸部ハッチが上部に開いて、マリアが顔を出した。

マリアはアキハを見つけると大声で叫んだ。

「坊や、何、ボサツと突っ立っている！ こっちに来て機体の調整を手伝いな！ 機器の配置はジムに似ているが全く別物だ！ アンタの頭を今使わないでどうする！」

視線が一気にアキハに集まる。

アキハは一瞬だが、連邦兵士全員がアキハを敵として見ていると感じた。

だが、首を二回横に振って、邪念を祓う。

「俺は連邦軍の兵士なんだ。技術士官なんだぞ。しっかりして見せろ」

そう呟くと、アキハは駆けてマリア機の方に向かった。

蠱惑的な猫

同日の正午――。

連邦軍中尉のアルフレッド・エイミーにとって、自分に新型機が与えられなかったのは、理不尽の極みだと考えていた。

エイミーはマリアと同期で、戦績も張り合うほどの実力者だった。唯、彼は素行が悪い部分があった。

自分では「そんな面はない」と考えているが、第三者の目から視ると、女癖が悪く、悪酔いをする。部下虐めも日常茶飯事と問題児だった。

フォックスに呼び出された経験も何度もある。

その度にエイミーは「マリアとフォックスは下半身の付き合いがあるから出世した」と愚痴を零した。

今回も、新型機が自分に与えられず、ジムすら自分より戦歴の短いコフィンに持つて行かれ、腹が立っていた。

エイミーは昼食を平らげた後、自身の任務を放棄して、酒を飲んでいた。

他の仲間にも「酒に付き合え」と語ったが、エイミーの人間性は広く知れ渡っていた。

誰一人、エイミーに付き合う兵士はいなかった。

その現実が更にエイミーを不機嫌にさせた。

バーでは目立つので、エイミーは「俺は悪くない」と他人のせいにながら、キャンプ地内を飲み歩いていた。

そんなエイミーの目に留まったのは捕虜のフタバだった。

燦々と照りつける太陽を受けて煌めく健康的に焼けた肌は、エイミーの目を釘付けにした。歳以上に蠱惑魔的な身体は男を興奮させて止まなかった。何より、フタバがエイミーを見て少し大人びた表情で微笑んだ。その現実がエイミーの思考回路を狂わせた。

エイミーは瓶に入っている酒を全部飲み干してはユラリ、ユラリとフタバに魅入られたように歩み寄る。

「テメエ、いい女だな。しかも、俺を見て微笑むとは、誘っているとし

か考えられねえ。一回、幾らだ？ 俺にできる内容で手を打とう」

「うん。わたしはどんなことでも答えてみせるよ。勉強もいっぱいしたから、喜んでもらえると思う」

「殊勝なジオンの女だな。ならこの後に条件を聞こう。まずは、一発中で……、というか」

「解った」とフタバは無邪気に言い切ると、マリアに貸して貰った白色のブラウスのボタンを外し始めた。

ブラウスのボタンを外していくに連れて見え隠れする大人びた姿態が本当に男心を揺さぶる。エイミーは性格こそ最低の男だが、見た目は二枚目だ。寄って来る女は腐るほどいた。

寝た経験だって数えきれないほどあった。

だが、フタバほどのいい女と出会うのは初めてだった。

フタバは今、白色のブラウスと赤色のスカート姿だった。カサリツと布と肌が擦れる音がする度にエイミーの野生心は耐えるのに必死だった。

「殺してしまうほど、無茶苦茶にしてやりたい」とエイミーは心の底からフタバに対して情欲を燃やしていた。

ブラウスのボタンが全て外れた。

触れば極上の弾力感があるであろう、フタバの胸部と腹部が完全に陽の元に姿を現した。

「もう我慢ならねえ！」

エイミーは自分の服を脱ぐのも忘れてフタバに飛びついた。

まるで、一日絶食していた狼のようだった。

フタバの形の整った大きな双丘を捏ねまわしながら、エイミーは下品な笑みを浮かべ

語った。

「テメエ、本当に良い女だな！ もう、俺の女になれ！ どうせ、ここに捕まった時点

でテメエはジオンから見放されたも同然だ！ なら、一層の事、俺の夜の慰み者をしたほうが生活は安定するぜ！ この戦争だって、連邦軍が勝つに決まっているからな！ ヒヒヒ！」

身体を好きなように弄ばれながらも、フタバが発した声は冷ややかなものだった。

「あなた、アキハとは違う。骨の髄まで連邦軍だ」

短く、言い切った言葉に出て来た男の名前にエイミーが嫉妬の声で吠える。

「テメエ、本当にあのジオン崩れと先に寝たのかよ！ 止めておけ！

どうせ、奴の最後は使い捨ての駒だ。俺よりも良い待遇を受けるならんぎぶぎけてんだよ！ 殖粟だけで生きてる野生の猿だ！」

「……、そう」

「だから、テメエは俺の女だ！ 今、今日、この場で俺が決めた！ 逆らうなんざ許さねえ！ ジオン崩れに身体を許したなら俺にも許せよ、な、な！」

「あなた、カズハ姉さんを殺した連邦軍人と同じ——」

エイミーがフタバの唇を無理矢理奪う。

だが、エイミーにとってフタバとのキスが最後の快樂だった。

フタバは両腕が使えないと、演じていた。

フタバにとって両腕を使えないようにされる等、想定範囲内の出来事だった。

一瞬で両手の関節を外して空いた隙間からフタバは腕をエイミーの首に回す。

そのまま、デープ・キスをする様に首に腕を回して一気に締め上げた。

エイミーの唇はフタバとキスをしたままだ。

その上、鍛え上げているとはいえ細い首を万力の如く、フタバに締め上げられていた。

フタバの力は一八歳の女子の力を遥かに超えていた。

鈍い老木が踏み折られる音がキャンプ場の端に響き渡った。

エイミーの首は無残にへし折られていた。即死だった。

嘔吐と返り血を浴びたフタバは真っ赤に染まったブラウスを平然と着て笑顔を浮かべた。

「やっぱり、アキハだけだ！ わたしの心に響いた言葉をくれた人は

アキハだけだった！ 連邦軍なんて他は全員、殺すべき人間の集まりだ！」

自由になった猫は笑顔でじゃらしてくれる主人を探す。

そう、自由気ままに気分が向く方向に、連邦兵士の死体を積み上げながら――。

相棒

夕暮れ時――。

喧噪の中、アキハと MARIA は今後のガンダム運用法について調整を重ねながら話し合っていた。

MARIA が口笛を吹いて、ガンダムの頭部に拳骨を軽く叩きこんで、感心した声で話した。

「流石、連邦の切り札だけあるね。レーダー範囲、エネルギーゲイン、活動領域こそ限定的だが、ジムより優秀だよ。だが、アタシは機械器具に疎くてね。ロクにメーターを視ないからジムを壊してばかりだったよ。その点を見やすくしてもらいたいんだが――？」

「そこは大尉に機器に慣れてもらう以外の方法はありません。空調や、照準が解るならモーターの正常稼働、ガイドの位置確認もできると考えますが？」

「アンタ、アタシを馬鹿にしているのかい？ 言葉を選んで喋りな。アタシの前で機械関係の用語を今後使ったらある事ない事を言いふらすからね」

「それはあんまりですよ」とアキハは意気消沈した。

実際、三機支給された陸戦型ガンダムだが、全て実戦投入にはならなかった。

一機は MARIA 機。

残りの二機は予備部品扱いとなった。

だが、ジムよりもパワーがあり、活動範囲が広い陸戦型ガンダムに對して、MARIA の機械嫌いが大きく事態の後退を迫っていた。

ジムでは予備部品としてホバートラックや六一式戦車の部品を使いまわしていた。だから、戦車屋でも、ある程度の MS 知識があれば先行量産型陸戦型ジムを乗るのは可能だった。

だが、陸戦型ガンダムは使い勝手が大きく違った。

V 作戦で余った余剰パーツで構成された連邦軍初の MS の試作機だ。しつかり訓練を受けた熟練兵が乗るに相応しい機能に力を持った MS に仕上がっていた。

だから、きちんとした機械知識がないと、MS運用時の妨げとなるのも考えうる範囲内の問題だった。

今、戦場の主役はMSに替わっている。

ジオン軍は最先端の技術を使い圧倒的不利を覆して、地上まで支配権を及ぼしてきた。

連邦軍の巻き返し作戦がV作戦で、オデッサ戦線で苦戦する兵士たちへの鼓舞の意味を込めて、まだ試作機段階の量産型陸戦型ジムが回された。

本当なら最初にガンダムが来て欲しいものだとかアキハは考えた。

だが、上層部にも何等かの策があつて順番が入れ違いになつたと考えたら得心が行く。

戦場は常に激変し、予想だにしていけない出来事が起こる。

アキハは一回しか出撃した経験はない。

だが、MSで戦う怖さを実感したつもりだった。

だから、鉄の棺桶で人が死んでしまうのは理不尽だとも考えた。また、フタバのような美少女が戦場にいるのもおかしいとも考えた。

「全てが狂っている」

アキハは肌で狂乱を感じた。

だから、なにかと気を遣つてくれるマリヤには死んで欲しくないと思つて強く願つた。

そうだから、腹が座つたとも言えた。

アキハは片膝を突いている陸戦型ガンダムのコックピットにいるマリヤを真剣に視て提案した。

「大尉、このガンダムを複座型にしませんか？」

「誰が乗るんだよ？ 狐でも乗せるのかい？」

「俺が乗ります。索敵、機器のみかた、使いかたが解らないなら、俺が乗って調整、補助します」

「……、アンタ、本気で言つてんのかい？ アタシの操縦はこのキャンブで一番だ。その意味を考えた経験はあるんだろうね？」

「あります。だからこそ、提案しているのです。俺は戦場の怖さを知りました。大尉には死んで欲しくないのです。だからつて守れるわ

けではありませんが、一番、俺らしい戦いができると考えました」
「……、まあ、監視するには都合が良いか。アタシは戦闘に集中させてもらうよ。アンタはアタシが戦えるように全力でサポートする。ソイツが条件だ。後、コイツだけは譲れない条件がある」
「改まって、何ですか？ 俺、機械関係は得意ですよ？」
「絶対に死ぬな！」

格納庫に響き渡る大声でマリアが喝を入れた。

アキハは反射的に姿勢を正した。

そんなアキハを視てマリアは豪快に笑った。

「アタシの声でビビっているようじゃあ、戦場で生き抜けないな！
もっと、根性を付けな！」

「本当に参りますよ」とアキハは髪をクシヤリとかき上げた。

その瞬間から陸戦型ガンダムの改修作業が始まった。

静寂と喧噪

深夜――。

「技術屋に時間等関係ない」とは誰が語ったか？ ああ、そうだ。テツハの教えの中にあつた1つのフレーズだと考えたのはアキハが陸戦型ガンダムの改修作業がひと段落ついた時だった。

マリアは本当に使えない上官だった。

「レンチ」と「ペンチ」の区別がつかない。ドライバーを右側か左側、どちらに回したら締まるのかが解らない。

「本当にジムに乗っていたのか？」と疑いたくなる使えなさだった。

結果、アキハは「作業は1人で出来ます」とマリアに休むように勧めた。

だが、マリアはアキハがフタバとの仲をまだ疑っていた。

「格納庫内で寝る」と頑なに譲らず、今は予備の陸戦型ガンダムのコックピット内で大人しく寝ていた。

アキハが格納庫から出られないようにアキハの右手首には手錠がはめられていた。その先は、縄を伝ってマリアの左手首に繋がっていた。

「俺は余程、信頼がないのだ」と落ち込みそうになった。だが、ガンダムを任された自分の立場を考えると立ち直れた。

アキハの技術者としての腕は確かだった。

ほんの数時間で複座式の基礎工程を組み終わっていた。

作業がひと段落した際、アキハの心に悪戯心が湧いた。

陸戦型ガンダムのコックピット内に滑りこむと、ポケットにしまつてあつたメモリを取り出した。

陸戦型ガンダムのOSは連邦軍で標準化されたOSが使われていた。つまり、ジムと規格は同じだった。

アキハは一目で規格が同じ内容を見抜き、サポートAI「ハル」を導入しようと考えついた。

端末にメモリを差し込んで、インストールを開始する。

ほんの数秒でインストールは完了した。

アキハはコンソールパネルを手際よく弄って、ハルに声をかける。「ハル、調子はどうだい？ お前の新しい身体だ。感想を聞かせてくれ」

「ハロー、ハロー。セーフモードで起動しています。アキハ、こんばんは。声から疲労を確認しました。休息のために寝る行動をお勧めします」

「俺が考えたAIだから、もう少し乱暴で雑に作ったはずなんだが……。そんなに気遣いをするプログラミングはしていないぞ？」

「理解不能。わたくしはあなたの構成を再現しているだけです」

「困った奴だ。ところで、ハル。お前は自分自身を『何か』に定めた経験はあるかい？」

「わたくしは、『ハル』と名が着くプログラムです。それ以上でも以下でもありません。アキハがわたくしを作ってくれました。わたくしはそのプログラムを忠実に再現するのみです」

「お前はそう『定めて』いるんだな。本当に羨ましい。俺は亡命するまで本当に無知な小僧だったよ。自分自身がジオンの技術者で平和に暮らせていた。だから、平和がずっと続くと考えていた……」

「アキハ、あなたの脳波に異常が見られます。精神安定剤の服薬をお勧めします」

「そうだろうな。亡命してから、自身の立場が本当に揺らいでいる。俺は連邦軍技術士官だ。だが、フタバと出会って俺はジオン軍のアキハ・アンドーであろうとする自分を知ってしまった」

「理解不能。アキハ、あなたはアキハ・アンドーです」

「それは、簡単に考え過ぎだ。俺は本当に悩んでいるんだぞ？」

アキハは実直なハルの言葉を聞いて苦笑した。

製作者の自分とは似ても似つかない相棒の答えが嬉しくて、反応が楽しくてついつい無駄口が多くなってしまう。

アキハは「駄目だ、駄目だ」と心中で感じながら、頭の後ろに両手を添えてシートに身を委ねた。

格納庫の天井は煤(すす)が溜まっていて、全く綺麗とは感じない。でも、今の自分には丁度良いとアキハは感じた。テツハの野心に簡単

に従い、連邦軍に亡命した自分の汚らしさを考えたら、中東にある汚い格納庫の天井がお似合いだと思った。

だが、相棒のハルと簡単な話をしていると、そんな悩みも忘れてしまふ。

穏やかな夜だ――。

アキハは、中東の一時的な平和な夜を楽しんでいた。

だが、静寂は一瞬で叩き壊される。

耳を劈く奇声が格納庫の入口から聞こえた。

これには、アキハだけではなくマリヤも驚いて目を覚ました。

「何だい！ 何があった！」

「解りません！ でも、普通とは違うのは明らかだ！」

マリヤが左手首の手錠を外して、格納庫入口まで駆けて行った。

アキハも後に続く。

アキハたちがそこで見たのは、首の骨折り殺された連邦軍兵士の亡骸だった。

マリヤはしやがんで亡骸の確認を行った。

「コイツ、見回り中に背後からやられたみたいだね。綺麗に首の骨が碎てるよ。相手は余程の怪力の持ち主だ。こんな芸当ができるのは馬鹿力の男。このキャンプだとコフィンくらいだ。アイツがこんな馬鹿な真似をするとは考えられない。なら誰が……？」

「コフィンさんは先ほどまでジムの整備をされていました。この人といざこざになったと考えられないのですか？」

マリヤは立ち上がると顎に右人差し指を当てて思案した。

「アイツは寡黙だが、仲間を家族同様に大切に想っている。それに、殺された相手が相手だ。コイツとコフィンは飲み仲間だね。喧嘩をするとは考えられない。だから、コフィンが犯人の線は白だ」

ならば誰が連邦軍兵士を殺した？

犯人となりそうな人物が上がない。

アキハは唯一、犯人となり得る人物、フタバを思い出した。

「捕虜が逃げ出した可能性を考えたらほうが良いかもしれません。俺が捕虜の様子を見て来ます」

「駄目だ。坊やには悪いが、捕虜との関係をアタシはまだ疑っている。アタシも同行させてもらおうよ」

アキハは少し落胆した。

だが、「1人で行くよりは安全だ」と考えかたを変えて、マリアと一緒にキャンプ地の端を目指した。

月下の出会い (1)

キャンプ地の端にアキハとマリアが駆けて行くと、そこは血の海だった。

フタバの姿はなく、代わりに連邦軍兵士の死体が一人、転がっていた。

遺体は死んでから時間が経過していた。

血は渴いており、遺体も死後硬直が解け、俯せに倒れた状態で力なく横たわっていた。

マリアは死体を見て、腹立たしい感情を露わにした。

「エイミーの阿呆が……。色香に惑わされたね。こんな死にかた、アキハだって望んでいなかったら？ 本当に馬鹿なんだからさ！」

アキハはマリアの吐いた言葉で二人が旧知の間柄であることを察した。

エイミーと呼ばれた連邦軍兵士の死を弔うと同時に、アキハはフタバの行き先を案じた。

「どこに行ったのだろうか?」、「本当に、お前が殺人犯なのか?」

そんな感情がアキハの心を支配して焦らせた。

マリアがエイミーの死体を弔うと、提案してきた。

「アタシは狐のところに行つて捕虜が逃げた件と、殺人犯が同一の可能性が高いと伝えてくる。アキハは宿舎に戻つて鍵をかけて寝ていな。決して外に出るんじゃないよ」

「隊長は大丈夫なのですか?」

マリアはニカツと昼の太陽の様に笑つて力こぶを作つて見せた。

「アタシは、この男どもの中で誰よりも腕っぷしが強いんだ。心配するな!」

マリアはそう語るとアキハの背中をバシバシと叩いた。

かなり痛い。

「この調子なら大丈夫そうだ」とアキハは考え、マリアと別れた。

そのまま、宿舎に向かつて戻るアキハだが、頬を撫でる風は酷く冷たかった。

その風が死を運んでくる風に感じて激しく怖かった。

アキハはマリアに言われた通り、宿舎に帰ろうとしていた。

だが、ハルを起動させたままだと思い出した。

ハルはアキハにとって大切な相棒で半身だった。

だから、他人に弄られるのは嫌だった。それに、まだ調整も済んでいなかった。

アキハは「少し格納庫に行くだけだ」と考えて、宿舎に向かう足を格納庫に向けた。

その行動が裏目に出た。

格納庫に向かう途中、アキハは「何者かに視られている」と感じた。

周囲を見回せば廃墟とテントが立ち並ぶ集団ミーティング用の場所に来ていた。

隠れる場所ならいくらでもある。

アキハは少しの希望を託して恐る恐る声を出した。

「フタバ……、なのか？」

アキハの声だけが静寂の中、響く。

声をかけた相手、フタバの愛らしい返事はない。

だが、アキハには確信があった。

「フタバだろ？ お前、隠れてないで出て来いよ。逃げるとか良くな
いって俺がいうと変だけど……。俺だから、話を聞いてやる。だから、怖がらないで出て来い」

アキハが周囲を見回しながら喋る。

すると、廃墟の影で動く者がいた。

アキハは安堵した。

やはり、フタバなんだと――。

だが、現実は予想を裏切る。

月光に照らし出された人影はフタバとは違った。

姿はフタバに良く似た美少女だ。

だが、幼さの残る顔は15歳だと解った。フタバはショートヘアだったが、目の前にいる娘はサイド・ポニーテール。髪の色はフタバと同じ濡羽色。フタバと共通しているのは激しくいい女だという

点だ。発育も良く微笑んだ表情からは、艶やかな色香を感じた。グラマラスな身体は蠱惑的だった。

その娘が着ている服は見紛うことないジオン軍の制服だった。アキハは身構えた。この娘から異様な雰囲気を感じたからだ。

可愛らしい声で美少女はアキハに向かって問うた。

「あなた、フタバお姉様を知っているのですね。どこにおられますか？ わたくしは迎えに上がった者です」

表情は笑顔。

だが、張り付いた笑顔からは喜の感情は全く感じない。

感じるのは殺意のみだ。

「コイツは不味い……」とアキハは内心焦った。

相手はフタバと同じ、いや、以上の手練れだと戦った経験の少ないアキハでも解った。

圧倒的な武力の差。

逃げてでも無駄だと解る。

だが、ここは、生き延びないと本当に無駄死になる。

アキハは言葉を選んで話した。

「俺はアキハ・アンドー。フタバと話した経験がある。だが、今は俺もフタバを探している最中なんだ。だから他を当たってくれ」

美少女は目を大きく見開くと驚嘆した声を漏らした。

「あのフタバお姉様とお話をされた？ 連邦軍兵士如きが？ あり得ませんわ。あなた、何か特別な薬でもお姉様に使ったのではなくて？」

「馬鹿をいうな。俺は連邦軍技術士官だ。薬なんかを使ってたまるか。普通に話をしたただけだ」

美少女はアキハの言葉を聞いて両腕を組んで思案し始めた。

彼女にとつて、両腕を組む姿は思案し易い姿だと解った。

美少女は数秒考えた後、言葉を紡いだ。

「アンドーの名で気付かなかったわたくしが無知でしたわ。そう、あなた——。なら、尚の事、ここで死んで頂きますわ」

「待てよ！ どういう理屈なんだ!？」

アキハが叫ぶと同時に美少女は右手にサバイバルナイフを素早く持ち出した。

そのまま、身を屈めて、一足飛びにアキハの懐に飛び込んで来た。

アキハは気が動転して後ろに尻餅を搦いた。

それが良い方向に回った。

アキハが立っていた場所の喉元を鋭い剣閃が横一闪に走る。

尻餅を搦いていなかったら、動脈を綺麗に切り裂かれていた。

(続)

月下の出会い（2）

アキハは会議用に置いてあったパイプ椅子を掴んでは美少女に向かって投げた。

美少女はパイプ椅子を左腕で簡単に払うとアキハに向かって狼の如く飛びかかった。

アキハは右側に転がって避ける。

美少女はアキハの喉を突き刺すつもりでかかっていた。

砂の大地にサバイバルナイフが深く刺さる。

美少女の本気が垣間見れた。

アキハは「逃げなければ！」と脅迫的に感じ、その場から去ろうと立ち上がった。

だが、美少女は逃がさない。

アキハの右足を掴むと怪力で反対側に投げ飛ばす。

一瞬の無重力感。

その後に襲って来る大地に叩きつけられる激しい痛み。

「この娘も化け物だ」

アキハは背中に冷たい汗が流れるのを感じた。

ゆっくり立ち上がると、鼻から水が流れる感覚があった。

拭うと鼻血が流れていた。

アキハは目の前の美少女と対峙して「勝てない」と感じた。

だが、普通に背を向けて逃げるのは不可能だと解った。

逃げるなら何か手を打つ必要がある。

アキハは必死に考えた。

その果てに、考えついた行動は唯一つ。

「助けてくれ！ 殺人犯がミーティングポイントにいるぞ！」

「助けを呼ぶ」

それだけだった。

単身で敵のキャンプ地に入り込んだ美少女の技術と力は称賛に値

する。

だが、いかに馬鹿げた力を持つていようが、味方全員が気付けば、逃げる。アキハはそう考えた。

だが、相手の肝は据わっていた。

味方が集まる前に、アキハを亡き者にしようとする突貫してきた。

美少女はサバイバルナイフを逆手に構えると疾風の如き身のこなしでアキハに急接近した。

アキハは「心臓を突かれた終わりだ」と即座に考えた。

両腕で胸をカバーして防御姿勢を採りながら、左側に身を躍らせた。

美少女は左上に切り上げる一閃を放った。

アキハの両腕が綺麗に切り裂かれる。

鮮血が鮮やかに飛ぶ。

致命傷は避けられた。

アキハは大地に転がって直ぐに立ち上がった。

そのまま、格納庫のある東側へ全力で駆けた。

一瞬の隙を突かれて、アキハに突破された美少女は後を追って来る。

その速さはアキハより何倍も速かった。

走るアキハの息が切れ、肺が悲鳴をあげる。

だが、ここで立ち止まったら最後だ。

アキハはそう自分の身体に言い聞かせ駆ける。

格納庫前まで逃げきれた。

だが、そこまで逃げて、美少女の攻撃があった。

美少女はナイフを投げて、アキハの足を絡めた。

アキハは格納庫前で派手にこけた。

俯せにこけたアキハの上に美少女がマウントポジションを取った。

美少女はアキハの顎に両手を回して、海老反りの形でへし折ろうと馬鹿力をかけてきた。

アキハは苦悶の声をあげた。

その声を聞いて美少女はうっとりとした表情で語った。

「ここまで、わたくしをてこずらせたのはあなたが初めてですわ。最後のプレゼントです。わたくしの名前はミツハ・バーキア。天国に持って行って下さいまし」

「そんな冥土の土産は要らない！」とアキハは心の底から叫んだ。

だが、顎を固められているので、声が出ない、喋れない。

背骨が嫌な音を立て始めたと感じた際、意識が漆黒の闇に飲まれそうになる。

『駄目だ……』

アキハが諦めかけた時、天が救いの手を差し伸べた。

(続)

月下の出会い (3)

背中に乗り、最後の力をかけようとしたミツハの背後から強烈な右蹴りが叩きこまれた。

「ジオン崩れがジオンに殺されそうになる滑稽な姿が見られて、僕は満足だよ。特別に僕が助けてあげよう」

嘲笑も含めて、余裕の声を漏らしたのはコフィンだった。

コフィンは MARIA に次ぐ実力者だ。

特に近接戦なら MARIA も超える可能性を秘めた青年だ。

コフィンの蹴りを背中に受けたミツハは、コフィンを「忌々しい」という目で睨むと吐き捨てた。

「連邦軍の雑兵の癖に！ わたくしに一撃を加える等、愚かしいですわ！ その可愛らしい顔を叩き潰して差し上げましょう！」

「ジオンの女兵士……か。ねえ、ジオン崩れ。しっかり見ておくといい。これが僕の態度だ」

コフィンはゆっくり息を吸い込むと右半身を開いて構えた。

ミツハはコフィンめがけて今までで一番の速さで突貫する。

アキハからしたら速すぎて目で追えない。

一瞬の行動が命取りになる。

そんな刹那の時間でのやり取りで、コフィンは圧倒的な才能を見せつけた。

それは、ミツハの速さ以上の身のこなしで彼女の鳩尾に掌底を叩きこむことだ。

刹那の攻撃。

一撃必殺の重み。

全てが凝縮されミツハに叩きこまれていた。

ミツハはコフィンの強烈な一撃をもらい、後ろに大きく飛び、砂の大地に転がって止まった。

動かない、ミツハを見てコフィンは丹精な顔を左手でひと撫でして喋った。

「これが僕のジオンに対する答えだ。ジオン崩れ、君もこんな姿にな

りたくなかったら、大人しくしているのだね」

コフィンが冷徹に言い放つとミツハを捕らえようと近づいた。

だが、ミツハはまだ気を失っていなかった。

コフィンが近づくと、右手に持った砂を顔面に叩きつけた。

コフィンが怯んだ隙を見て、ミツハは素早くアキハに近づいた。

唇と唇が触れ合う距離でミツハはアキハに小声で喋った。

「わたくしと一緒に来て頂きますわ——」

「なんだって……?」

アキハはミツハが何を考えているのかさっぱり解らなかった。

だが、ミツハの起こした行動で全てを察した。

ミツハはアキハの右腕を捻り上げると、宣言した。

「そこまでですわ! わたくしを今以上に追い込むとこの男の身体を

一か所ずつ破壊していきますわ。黙ってわたくしを見逃さない!」

コフィンはミツハを鋭い目つきで睨みつけると吐き捨てた。

「ジオンらしい行動だね。僕としてはその男がどうなるうがしたことはない。だが、一応、大切な士官様だ。君の言葉を受けるとしよう」

コフィンはその場で万歳をした。

ミツハは細く微笑むと、アキハを捕らえたまま、格納庫の中に入った。

そのまま、起動状態にあつた陸戦型ガンダムのコックピットに滑り込むと拡声器をオンにして叫んだ。

『お姉様! お迎えに上がりましたわ! ポイント三で落ち合いましょう!』

そのまま、ミツハはスタン・バイ状態にあつた陸戦型ガンダムを動かそうとする。

だが、複座式に改修されていた陸戦型ガンダムの前側でコンソール・パネルを弄っていたミツハを見て、アキハは叫んだ。

「止めておけ! 今、この機体は上手く動かない! まだ、調整中なんだ!」

ミツハはアキハの腕を捻り上げて、喜々とした声で喋った。

「なら、あなたが操縦なさい。あなたは技術者でアンドーの性を持つ

者。この機体についてよくご存じだと見込みましたわ。わたくしとお姉様が無事に合流するまで、味方と殺し合いをして頂きましょう」「そんな真似ができるか！俺は連邦軍人だ！ジオンの言う通りに行動したら銃殺刑になってしまう！」

アキハが懸命にできないと語る。

だが、ミツハは聞く耳を持たなかった。

ミツハは後部座席に移動すると、アキハの首にサバイバルナイフをあてがった。

「わたくしの命令に逆らうなら、容赦なく動脈を切り裂きますわ。さあ、動かして見せて下さいな」

冷徹なミツハの声にアキハは震え上がった。

コンソールパネルを操作してハルを立ち上げる。

「ハル、スリープ・モード解除。実践だ。全サーボモーターの規定値をゼロに戻せ。アクチュエーターを確認。電気信号を送信後、一気に立ち上げる。音声認証、開始。メイン・パイロット、アキハ・アンドーで登録」

上側に開いていたハッチを閉じる。

そのまま、真つ暗だったコックピットの中に光が灯って行く。

ガンダムの頭部が検知した周囲の風景を画像処理してコックピット内に配置されたに前側・右側・左側のモニターに投影した。

收音機が上手く作動していない。外の音を拾えていなかった。

外には騒ぎを聞きつけたフォックスやマリアを先頭に連邦軍兵士たちが集まっていた。

アキハは必死に思案した。

アキハ側から言葉、要求を語るのは可能だ。

だが、機体調整が上手くいっていないので、あちこちでエラー表示が確認されていた。

何より一番の痛手は外の声が聞こえない点だ。

何度、收音機の回路を再作成しても「エラー」の表示が出る。

ここは後部座席にいるミツハの担当分野だ。

だが、ジオン軍の女兵士に機密の塊、ガンダムを触らせるのは気が

引けた。

アキハは「外で大騒ぎになっているだろう」と仮定して叫んだ。

「全員、下れ！ 今からガンダムが動くぞ！」

アキハはペダルを踏みこむと同時に右側のレバーを巧みに操作した。

コックピット内にも振動が伝わってきた。

陸戦型ガンダムの装備するランドセルに火が入った瞬間だった。

ガンダムは格納庫の天井を突き破ると闇夜の空へと飛び出した。

重力に抗う行為。

人間が作り出した、最も力強い存在。

その中でも至高の存在が今、産声を上げた。

(続)

逃亡（1）

後部座席にいたミツハが可愛らしい悲鳴をあげた。

「もつと、丁寧に操縦をして下さいまし！ この荒い操縦だとあなたの技量もしれていますわ！」

「無茶を言うな！ こんな突貫工事中の機体を動かさせて奴が馬鹿なんだよ！」

「馬鹿とはなんですか！ わたくしほどの才色兼備な女はフタバお姉様以外にいませんわ！」

「じゃあ、そのフタバの場所を教えろ！ こんな馬鹿げた操縦を早く終わらせて解放してくれ！」

「……、まあ、良いでしょう。まずはポイント三、オマーンの北西にあるオアシスに向かって下さいな」

「了解した。だが、連邦軍が簡単にジオン軍を放置すると思えるなよ」「あなた、何かしましたか！」

「いや、お前が乗り込んだ機体が最高にサバイバルな機体だった。それだけだ」

アキハが皮肉を語った瞬間、駆けるガンダムのコックピットが激しく振動した。

「何事ですよ！」

「オマーンキャンプ場からの連邦軍追撃部隊だ！ 隊長とコフィンさんも出てくるのは当たり前だ！ お前がこのガンダムで逃げようと考えたから連邦軍は俺たちを殺してでも、機密保持を優先させてきたんだ！」

ロック・オンのアラートがコックピット内に響く。

トリアーエズ部隊がアキハ機に対してミサイル射撃を行った。

アキハ機に対してIRH式のミサイルが降り注ぐ。

アキハは舌打ちをすると同時に陸戦型ガンダムの頭部を180度回転させて、右手グリップのトリガーを押し込んだ。

コックピット内のモニターまで残光が見える。頭部標準装備のバルカン砲がIRH式ミサイルを次々と着弾する前に撃破していく。

防音式のコックピット内でも振動は伝わる。

アキハは二度目の戦場で自身が味方に命を狙われる身になるとは考えもしなかった。

だが、「陥った人生に嘆いてはられない！」と強く前向きな心を持っていた。

その理由の一つに「もう一度フタバに会いたい」と心の底で願っていた。

「そのためなら、俺はこの逃走を神が仕組んだ試練だと思って乗り越えてみせる！」

アキハはコックピット内で叫んだ。

激しいバルカン砲の掃射を終えて、アキハ機はユラユラとおぼつかない足取りで北西を指して駆けていた。

後部座席から偉そうに指示していたミツハが、不思議そうにアキハに問うた。

「あなた、お姉様とどんな関係なのですか？ どうせ、見た目に惑わされた猿と同じ癖に……。そんなにお姉様を想う理由を教えてくださいまし」

「解らない！」

「何ですって！ あなた、理由も解らずにお姉様に会いたい一心なのですか！」

「そうだ、何が悪い！ ここまで来たら自身の心に素直でいたいと思う俺のどこが悪い！ お前だってそうだろう！ こんな鉄の棺桶の中で死にたくないだろう！ だから、俺が何とかしてやる！ 必ずフタバに会わせてやるからな！」

我武者羅に機体を調整しながら操作をするアキハの必死な表情を視て、ミツハは自然と喉に当っていたサバイバルナイフを退けた。

ミツハには伝わっていた。アキハの放つ「信頼できる男」の雰囲気

に心を許し始めていた。

「解らない！」

アキハはそう叫んでいたが、本当は答えが出ている。

ミツハはそう気付いていた。

だから、心にあつたフタバへの絶対的な信頼感と同時に黒い感情が生まれていたのに気付いた。

自分が「お姉様」と慕うフタバに、こんな男性が惹かれていると思うだけで、闇は深く心を浸食した。

ミツハは後部座席に身を委ねると深い濡羽色の髪を弄っては、戦場で戦う男の背中を見ては呟いた。

「こんなにも逞しいものなのですね——」

自分の感情とフタバへの想い。

両方とも大切な想い。

でも、ミツハの立場からしたら、フタバを最優先にすべき立ち位置だった。

叶わぬ初恋。

だけど、叶えたい——。

矛盾する想いが一瞬にして兵士を女へと変貌させた。

そんな苦しみを後ろでミツハが味わっているとも知らずに、アキハは必死に操縦桿とペダルを調整しながら北西に進む。

オアシスといえば、前回、フタバと出会った戦いの際、帰りに休憩で寄った記憶がアキハにはあつた。

「あの場所にフタバがいる——」と考えると気持ちが悪（はや）る。

だが、連邦軍は完全にアキハとミツハを敵として見ていた。

トリアーエズ部隊から逃げたと思うと、次は砲撃がアキハ機の前を塞いだ。

砂の大地で連邦軍が攻勢に出る準備を進められているのはMSの開発があつたからとは違う。

六一式戦車の数が揃っていたのが大きい。

その砲撃は強力で、後方から受ければ、いかに陸戦型ガンダムでも無傷とはいかない。

その六一式戦車部隊と、先行量産型陸戦型ジムが東側から迫っていた。

「何でこの距離で気付かなかった！」

アキハが絶叫した。

ミツハが冷静な声で説明した。

「地の利を活かした戦術ですわ。この大地は昔、雨も降った豊沃な地でもあったのです。でも、環境が変わってしまい、人間が汚した果てに河は干上がって跡しか残っていませんわ。その跡を辿れば、北西するわたくしたちに最短で迫れた……、という原理ですわ」

アキハは自身の地の利の無さに震えた。

同時に、違和感を覚えた。

マリア機がない。

こんな重要な時に、隊長を温存させるフオックスだとはアキハは考えなかつた。

最大限に活かしてくる。

アキハは考えて必死に逃げていた。

だが、姿を見せたのはコフィンの先行量産陸戦型ジムだった。

どこにいる？

アキハはハルに命令してガンダムの索敵機能を使えるだけ使った。

だが、こんな時にもエラー表示が出る。

この機体は動くのが精いっぱいの状態だった。

アキハはガンダムの望遠カメラを最大限に利用して周囲を確認した。

その時、4倍ズームさせた崖の上に陸戦型ガンダムが180ミリキャノンを構える姿を確認した。

アキハは確信した。

あれこそマリアの操縦する残った一機の陸戦型ガンダムだと――。

ロック・オンアラートがコックピット内に響く。

「ロック・オンされましたわ！ お姉様に会う前にこんな場所で殺されるのは御免です！ なんとかなさい！」

「言われなくても何とかするさー！」

アキハは機体を勘でしゃがませた。

アキハの勘は的中した。

丁度、しゃがんだ瞬間に砲撃の嵐がアキハ機に降り注いだ。

同時にマリア機からの180ミリキャノンの精密射撃が行われた。間一髪のところ直撃せずに済んだ。

アキハは荒い呼吸を整えるとミツハに提案した。

「ミツハ、お前だってフタバに会いたいよな？　ここは休戦しないか？　コフィンさんから光信号で降伏宣言が送られている。乗るならお前は連邦軍の捕虜だ。だが、俺の経験上、捕虜はお勧めできない。お前のためを思つて提案する。この場を二人で乗り切ろう」

「悪くない提案ですわね。わたくしも同じ内容をあなたに伝えようと考えていましたわ。わたくしの足手まといにならないようにしっかりと操縦なさいな」

後部座席のミツハが座り直す。手慣れた手つきで肘置き的位置にあったテンキーを操作して補助作業を開始した。

陸戦型ガンダムの中身に点滅していたエラー表示がドンドン消えてノーマルの文字に替わって行く。

收音機の破損だけは直らないみたいだった。

外で爆発する砲撃の音はコックピットの中まで届かなかった。

だが、收音機以外の項目はほとんどノーマル表示に切り替わっていた。

砲撃が幾つも炸裂する中、アキハは叫んだ。

「全員退け！　無駄な争いをする意味はない！」

アキハは攻撃する術があると示すために、ガンダムの脹脛からビームサーベルを抜き放った。

アキハ機の姿を見た六一式戦車部隊の砲撃が止んだ。

同時に光信号でコフィン機が点滅で意志を伝えてきた。

どうやらコフィンはアキハ機の通信機器が死んでいるのに気付いていた。

(続)

逃亡（2）

『ジオン崩れらしく、散れ』

点滅で示すと1000ミリマシンガンを捨てて、コフィン機もビームサーベルを抜き放った。

アキハ機とコフィン機の睨み合いが始まった。

どちらも連邦機。

だが、搭乗者は全く理想、理念が違う。

コフィンは強くジオンを恨んでいた。

アキハとミツハはフタバに会うために所属関係なく、生きようと共闘していた。

どちらが「正しい」、「間違っている」の問題ではなかった。

どちらも「正しい」かった。

初手を取ったのはアキハ機だった。

最新鋭機の長所を活かして、両手でビームサーベルを構えてコフィン機に突っ込む。

コフィン機はビームサーベルを左手に持ち一瞬、ブースターを右側に吹かせた。

たった一瞬、ブースターを吹かせるだけで、アキハ機の放った縦の斬撃を先読みしたかの如くコフィン機は避けた。

そのまま、串刺しにしようとコフィン機はビームサーベルを反転させて振り下ろす。

アキハ機がブースターを全開にして前に突っ込む姿勢を採る。

砂煙がコフィン機の周囲を舞い、センサーをかく乱させる。

砂がビームサーベルに当たってバチバチと弾ける。

コフィン機が突き刺した先に、アキハ機はいなかった。

ビームサーベルが大地を溶解させて、穴を作った。

アキハ機はコフィン機と距離を採ると胸部バルカンで威嚇射撃を放つ。

機体性能で圧倒的にアキハ機が有利なはずだ。

だが、コフィン機は胸部バルカンを怖がらず、バックパツクのブー

スターを吹かせて、突貫してきた。

アキハ機は避けようと右に機体を移動させようとした。

だが、コフィンの操縦センスは筆舌に巻くものがあった。

アキハが右によく避ける癖を見抜き、絶妙な角度でシールドの角をコックピットのあ

る胸部に叩きつけた。

激しい衝撃がコックピットを襲う。

アキハ機が反撃に出た際も、コフィンは簡単にビームサーベルの一撃を避けてみせた。

アキハ機は我武者羅にビームサーベルを振る、振る。

だが、コフィンには通用しなかった。

全て回避され、遊んでいるようにシールドを胸部に叩きつけられた。

アキハは心底、悔しかった。

自分はこんなにも必死なのに敵わない相手が直ぐ目の前にいる。

コフィンの壁はどこまで高いのか解らなかった。

コフィン機は「遊ぶのはここまでだ」と言わんが如く、精密な操作でアキハ機の右手首を斬り落とした。

ビームサーベルを持っていた手が本体から離れ、エネルギー供給がなくなったため、刃が消失した。

コフィンは一緒に過ごした時間も、愛着も何もかもないかの如く光信号でアキハに語った。

『サヨウナラ』と――。

その時、地面が激しく振動し始めた。

(続)

モビルアーマー（1）

コフィン機がアキハ機にトドメを刺すのを止めた。

アキハは繋がった命に安堵すると同時に、ミツハに声をかけた。

「外で何が起こっている？ この振動はなんだ？」

「少しお待ちになって。索敵範囲を広げて地面の中で何が起こっているかを確認してみましょう。もしかしたら……、いえ、そんなはずはありませんわ」

「一人で何を自問自答しているの？ そんな言葉だと解らない。しっかり話をしてくれよ！」

「わたくしだって、あなたとしつかり話をしたいと考えていますわ！でも、わたくしの予想以上の事が起きている可能性があると言いたいのです！」

アキハはミツハが感じている「予想以上の事」が全く解らなかった。だが、今いる砂漠地帯で事は起こっていた。

大地が鳴き、砂が跳ね上がる。突風が激しく吹き荒れ砂塵が舞う風景がメインモニターに映っていた。

コフィンがお肌の触れ合い回線で語りかけて来た。

『何事だい？ 君たち、増援を呼んだかい？』

「馬鹿を言うな！ 俺はジオン軍人とは違う！ 今が今だ！ 仕方なくガンダムを操縦しているに過ぎない！」

『その割には本気で斬りかかってきたね』

「お前だって殺そうとしただろう！ 同罪だ！ 今、周囲に何が起こっているか調べている！」

『地面の下だ。死にたくなければ着いて来い』

コフィンはそう語ると一気にその場からバツク・パツクを吹かせて離脱した。

残された、アキハとミツハは対応が遅れた。

地面の下から激しい振動が伝わって来た。

ミツハが戦慄した声で語った。

「まさか……、お姉様のプロトタイプが動いている？」

「フタバがこの事態を起こしているのか？」

「不味いですわ！ お逃げになつて！」

ミツハの言葉を受けて、アキハはバック・パックのブースターを全開にさせた。

入れ違いに、アキハ機の立っていた場所から、異形の存在が地中から姿を現した。

まず、目に付いたのは三〇メートルの巨体、同等に前へ突き出したドリルだった。両腕は無く、太く、がっしりとした二脚が存在感を放っていた。迷彩色に塗装された本体が圧倒的な威圧感を放っていた。頭部は一つ目で頭部の横には巨大で鋭利な掘削機の歯車が二枚備え付けられていた。

「ずんぐりむっくりした怪物だ」とアキハは感じた。

だが、怪物はその場に両足を強く踏み込むと背後に備え付けられた、大型冷却器を激しく振動させ始めた。

「不吉な何かが起こる」と、アキハは陸戦型ガンダムを怪物の右側に離して着地させながら思った。

怪物の真正面には六一式戦車部隊が展開されていた。

六一式戦車部隊は怪物をジオン軍モビルアーマー（以下、MAに統一）と認識し砲撃を開始した。

数多の砲弾がMAに向けて放たれる。

だが、MAは着弾する前に頭部横の掘削機を激しく回転させて、機体周囲に音波フィールドを形成し始めた。

弾丸は音波フィールドに触れると自壊して直撃する前に爆発した。

その音波フィールドの中でMAはドリルを中心部から二つに割った。

中央部から姿を現したのは大型メガ粒子砲の砲口だった。

甲高いエネルギーを収束させる音が響くと、MAは六一式戦車部隊に対して大型メガ粒子砲を放った。

その一撃は裁きの雷だった。

放たれた大型メガ粒子砲の一撃で、六一式戦車部隊は一瞬にして消し飛ばされた。

「おい、ミツハ！ 何だ、あの戦艦の主砲みたいな威力の砲撃は！」
「お姉様は正気を失っていますわ！ あなた、力を貸しなさい！
放っておけばお姉様はずっとあの『アツグバレット』でこの一帯を破
壊尽くします！」

アキハはミツハが語ったMAの名前「アツグバレット」を聞いて戦
慄を覚えた。

アツグバレットは大型メガ粒子砲の一撃で直線20キロを焦土に
変えていた。

連邦軍はアキハ機奪還よりも目の前に現れた悪魔に恐怖を覚えて、
攻撃を開始した。

トリアーエズ隊が上空からアツグバレットに対し、全IRH式ミサ
イルを撃ち込む。

だが、アツグバレットは音波フィールドを作り出し、ミサイルの一
発も直撃を受けなかった。

旋回する12機から成るトリアーエズ隊に対し、アツグバレットは
巨体を空に向けた。

太腿が大胆に開き、中から対空ミサイルが現れる。

崩落でも起きたかのような一斉射撃音が戦場に響き渡る。

アツグバレットに機動力は皆無だった。

だが、過剰なまでの防御力と攻撃力が備わっていた。

「数には数だ」と答えたアツグバレットの攻撃は精確にトリアーエズ
隊を補足していた。

トリアーエズは連邦軍が初期から使っていた空の覇者だ。

対空ミサイルに対しての対策も入念に装備されていた。

各トリアーエズは散開した後、空に飛行機雲を作りながら綺麗な火
花を散らす。

フレアを使ってアツグバレットの使った対空ミサイルを回避した。

だが、その先に待つ未来は良いとは言えなかった。

「駄目ですわー！ フレア如きでアツグバレットの攻撃をしのいだとお
考えにならないで！」

後部座席でミツハが絶叫した。

同時にアツグバレットの目に生気が宿った。
巨脚を再度開いた。

アキハは「また、対空ミサイルか？」と考えた。
だが、違っていた。

上空に放たれたのはたった一発のミサイルだった。
トリアーエズ隊を無視したミサイルは暗雲を裂き、空に打ちあがった。

その後、変化が現れた。

雨が少ない、砂漠地帯に黒雲が立ち込め始めた。雷が鳴り、雨が降り始めた。

「そんな……、まさか、この豪雨もフタバが起こしたのか？」

「そうですね！ 早く、お姉様を止めて！ このままだと、お姉様が唯の大量殺戮者に成り下がってしまいます！」

「お前だって、俺を殺そうとしただろう！」

「今はそんな小さい話しをしている場合ではありませんの！ あなた、お仲間が無残に殺される姿が見たいのですか！」

アキハはミツハからメインモニターに視線を戻す。

メインモニターには次々に変な動きをするトリアーエズの姿が映っていた。

一機は自ら大地に墜落していく。

また一機は他の一機と空中で衝突して爆散していた。

空中で見ても無残な地獄絵図が繰り広げられていた。

その様子を見たアキハがミツハに質問をした。

「おい！ 何であんな熟練パイロットが唯、雨が降っただけで、混乱する！ ジオンはまた毒ガスでも使ったのか！」

「違います！ アレは対空兵器ですわ！ 雨を故意に振らせて大地を急激に冷やす！ 地熱で出来上がった濃密な雲で操縦者を空間識失調に陥れる最悪の兵器ですわ！」

12機から成っていたトリアーエズの編隊は一瞬にした壊滅した。

この圧倒的な効果はジオン軍がとんでもない兵器を開発したとアキハに一瞬にして理解させた。

(続)

モビルアーマー（2）

業火の中、アツグバレットは巨脚でトリアーエズ、六一式戦車の残骸を踏みしめて一つ目を光らせた。

アキハはその眼が「自身を次の獲物に捉えた」と感じ、戦慄を覚えた。

そんなアキハを無視するようにコフィン機が動いた。

光信号でアキハへメッセージを送って来た。

『怖いなら、逃げていいよ。僕は、コイツを仕留める』

コフィン機は100ミリマシンガンを拾うとアツグバレットに対して精密な射撃戦を始めた。

「コイツ、仲間をよくも殺してくれたね。僕はジオンを許さない。絶対——」

コフィンは自身の信念に懸けて、仲間を殺したアツグバレットを心底、恨んでいた。

「君はやり過ぎた。僕を本気にさせたからね」

コフィンは巧みに操縦桿を操作して、機体を滑らかに動かせる。

コフィンは解っていた。

「止まれば、巨大なドリルの奥に隠されている、大型メガ粒子砲の的になる」と。

だが、音波フィールドの前に100ミリマシンガンの弾丸は無意味だった。

全て霧散され、本体に傷一つ与えられていなかった。

コフィンはその原理を一瞬にして理解した。

この男の戦闘センスは常識を逸していた。

コフィンは右ペダルを一気に踏み込む。

バック・パックから青い炎が吹き荒れる。

コフィン機は凄まじい勢いでアツグバレットに突貫していった。

「コフィンさん、止めろー！ ソイツに近づくなー！」

アキハが外部音声をオンにして叫ぶ。

だが、コフィンはアキハの言葉を無視した。

先行量産陸戦型ジムは連邦軍の中でも、まだ、性能評価の段階にある機体だ。スペックは陸戦型ガンダムに迫るものがあつた。部品には現地改修の劣悪な物を使用していた。だが、先行して量産体制に入った「RGM-79」系統の部品が使われていた。

「君はできる奴だと信じている。だから、ジム、飛べよ」

コフィンはその愛機に呟いて、大きくジムを跳躍させた。

そのまま、バック・バックの炎を吹かせて、滞空姿勢に入った。

コフィンが狙ったのは一つ目の横にあつた音波フィールドを形成する掘削機だつた。

「君、沈め」

コフィンは呟いて、100ミリマシンガンに至近距離で発砲した。

甲高い炸裂音と破砕音が戦場に響く。

コフィン機は音波フィールドを纏つたアッグバレットの体当たりを受けて大きく後方に吹き飛んだ。

だが、初めて、アッグバレットから炎が上がつた。左側の掘削機が至近距離からの発砲で破損した。

大地に勢い良く叩きつけられた、コフィン機は動きを停めた。

アキハはコフィンが気絶したと悟つた。

それまで啞然としていた、アキハは頭を振つて叫んだ！

「これ以上は駄目だ！」

残つた左手に左脛脛からビームサーベルを抜き放つとアッグバレットに向かってアキハ機は突貫した。

後部座席にいたミツハがアキハに必死に声をかける。

「アッグバレットはジオン軍拠点制圧試作機ですわ！ あなた一人で撃破は無理です！ 先にお姉様の説得を考えて下さいな！」

「解っている！ フタバの安全を考えて攻撃はするさ！ だから、俺に力を貸せ！」

「どう、力を貸せとおっしゃるのですか！」

「直接会って、あんな怖い方法は駄目だって伝えるんだ！ そのために方法を考えるのに力を貸せって言いたい！ 提案がないなら俺流で行くぞ！」

アキハは思い1つで操縦桿を押し込み、ペダルを踏み込んだ。そのまま機体を上昇させて、ビームサーベルの斬撃をアッグバレットに向かって放った。

コフィンの攻撃で音波フィールドは消えていた。

アキハの斬撃はアッグバレットの分厚い装甲を溶解させて斬り裂く。

「まだだー！」

アキハは陸戦型ガンダムを巧みに操作して、アッグバレットに張り付いた。

そのまま、胸部バルカンを掃射した。

「フタバ、俺だ！ アキハ・アンドーだ！ 俺の声が聞こえるならこんな怖い物から降りてくれ！」

激しい跳弾の音と火花がコックピットのモニターに映る。

アキハの声もフタバには届かない。

アッグバレットは巨体を激しく旋回させると、アキハ機を振り払った。

アキハ機は大地に仰向けに放り出された。

そのまま、アッグバレットは大型メガ粒子砲の一撃でアキハ機とコフィン機を焼き払おうと砲口を開く。

だが、そこに援軍が入る。

マリア機が180ミリキャノン砲で援護砲撃に入った。

共通の敵はアッグバレットだった。

マリアはアキハの行動を見て、奮い立った。

『坊や、早く、対策があるならやりな！ 援護ならアタシにまかせろ！』

この機体の癖は掴んである！ アンタはアンタの戦いをしろ！』

光信号でマリアの意志をアキハは知った。

マリア機の援護砲撃はアッグバレットの装甲を確実に崩壊させていた。

アキハはマリアの思いが本当に嬉しかった。

アキハは機体を立て直す。

ゆつくりと起き上がった陸戦型ガンダムはまるでアキハの意志を

そのまま表現したモノと化していた。

「まだ、終われない！」

アキハ機はビームサーベルを左手で構えると、再度、アツグバレットに向かつて飛んだ。

アキハの行動を援護する形でマリア機が砲撃支援を続ける。

2機の連携はとれていた。

アキハ機は近接戦を仕掛ける以外の手がなかった。

「アキハ、お姉様は背中の冷却装置上にあるハッチの中にいますわ！
攻撃するならそこ以外を狙って下さいまし！」

「マーカーを宜しく頼む！ こっちは攻撃で手一杯だ！」

「あなた、技術者が生業ですわね！ 操縦くらいしつかりなさい！」

「戦場はまだ2回目の素人だ！ お前みたいに鍛え上げていない！」

「なら、代わりますか？ わたくしならお姉様を確実に救い出しますわ！」

「断る！ 俺がフタバを救う！」

ミツハは心で「この人は本当に真つ直ぐで馬鹿だ」と思った。

同時にここまで異性に想われてみたいと強く感じた。

アキハ機は再度、跳躍して左腕を振り上げる。アツグバレットのずんぐりした身体に

一撃を振り下ろした。

だが、アツグバレットも唯、攻撃されるだけの身とは違った。身体中から砲身を覗かせると砲撃を始めた。まるで「誰も近づくな！」とフタバが拒んでいるとアキハは感じた。

アキハ機は近づき過ぎていた。

対地対空砲火の直撃を受けた。

陸戦型ガンダムは取り回しが良いが小型のシールドを装備していた。

咄嗟の判断でアキハはコックピットをシールドで守った。

だが、他の部分是对地対空砲撃を受けた。

激しい衝撃。

「ノーマル」の表示が「ダメージ」の赤色に次々代わって行く。

アキハは操縦桿が急に重くなる感覚で、陸戦型ガンダムが凄まじい損傷を受けたと解った。

「だけどー！」

アキハは左足のペダルを踏み込んだ。

操縦桿は前に押し込み、左手のスロットルも全開にした。

アキハ機はアッグバレットに突っ込むと、そのまま動く四肢全てを使って抱き着いた。

後部座席のミツハが叫ぶ。

「あなた、馬鹿ですよ！ もう、この機体は死んでいますわ！ 脱出しますわよ！」

「脱出するなら一人でしろ！ 俺はまだ諦めていない！ あがくなら最後の結果が出るまであがく！」

「……、本当にこの人は。わたくしもお付き合いさせて頂きましょうか。お姉様を放って1人生き延びるのも嫌ですし」

「駄目だ、危ない！ 危険な目に遭うのは俺だけでじゅうぶんだ！」
「わたくしを見くびらないで下さいまし。念のために教えておきますが、わたくし、あなたより身体は丈夫ですし、強い自信がありますわ」
「……、頼む」

「最初からそういえばいいのですわ。今、この機体はアッグバレットに引つかかっている状態ですわ。今後は運任せですわね」

「動く箇所は！」

「左足が動きますわ。以外は死んでいます」

「上等だ！」

アキハは全損状態の陸戦型ガンダムの左足を全力でアッグバレットの装甲に叩きつけて、固定した。

アッグバレットはアキハ機が身体に固定されたと解ると、身体の前突き出した巨大なドリルを回転させ始めた。

『坊や！ そいつから離れな！ 地中に潜る気だよ！』

マリア機から光信号が入った。

だが、時は遅かった。

アッグバレットが地中に潜ると同時に、シートに叩きつけられる衝

撃と地中熱でアキハの意識は一瞬で刈り取られた。
(続)

第2章 理想と現実

再会（1）

「おい、フタバ！ 意識があるなら返事をしてくれ！ 頼む、フタバ！」

アキハは明かりも届かない地中深くに存在する地底湖の側で沈黙を続けるアツグバレットの機体に這い上がってはフタバに訴えかけていた。

オマーンの戦場から地下に潜ったアツグバレットと、装甲にへばりついていた陸戦型ガンダムは動きを完全に止めていた。

アキハが意識を取り戻した時には、後方にいたはずのミツハの姿がなかった。ハッチが開いていたので、自分でハッチを開いて外に出たと考えられた。

残されたアキハは、勇気を振り絞って冷却装置上にあるコックピットハッチを必死に叩いて、訴えかけていた。

「いつ、アツグバレットが再起動を始めるか解らない。その前に、フタバをアツグバレットから解き放つ必要がある」とアキハは考えて必死の行動に出ていた。

「フタバ！ 俺だ、アキハ・アンドーだ！ 意識があるならハッチを開いてくれ！ お前だってこんな場所で死にたくないと思う！ だから、ハッチを開けてくれ！ 頼む！」

アキハは必死でハッチを両拳で叩く。

だが、ハッチはビクともしなかった。

普通なら諦めるところをアキハは諦めなかった。

フタバの名前を叫びながらハッチを五分間叩き続けた。

すると、駆動音と一緒に、アツグバレットが再始動を始めた。

アキハは「フタバが生きていた！」と思うと安心した。

だが、こんな危険な兵器にずっとフタバを乗せておくのは我慢できなかった。

アキハは前方にある一つ目の前に立って訴えかけた。

「フタバ！ 俺だ、アキハだ！ 解るならハッチを開けて出て来てくれ！ 話がしたいんだ！」

すると、後方でハッチの開く油圧式ポンプの押しあがる音が聞こえた。

アキハは「思いが通じた！」と考え、嬉しくて仕方がなかった。

後方のハッチに回り込み、ハッチの中を覗き込もうとした。

すると、拳銃が額に付きつけられた。

アキハはドキツとした。

中からオレンジを基調としたパイロットスーツを身に付けて小柄な女性が姿を現した。表情はヘルメットから確認出来ない。だが、アキハは両手を挙げてフタバだと確信して話をした。

「フタバ……、なんだよな？ こんな、危ない物はお前には似合わないよ。退けてくれないか」

パイロットはアキハの声を聞くとヘルメットを外した。

アツグバレットのパイロットはフタバで間違いがなかった。

笑顔を見せたフタバは拳銃を捨てると、アキハに抱き着いた。

「アキハ！ アキハだ！ また、会えた！」

「お前は……、心配したんだぞ！ こんな馬鹿げたMAに乗って大暴れるなんてフタバらしくないよ。少し下で話をしないか？」

フタバはアキハの提案に二つ返事で「うん！」と答えた。

地底湖の側でアキハはフタバと並んで座って、ゆっくりとした時間の流れを感じていた。

アキハは疑問に思った内容をフタバに聞いた。

「フタバ、何でお前があんな化け物に乗っていたんだ？ お前、連邦のキャンプで捕まっていたとばかり考えていたんだよ」

フタバは地底湖に足を浸けて無邪気にはしやぎながら、元気に話を始めた。

「あんなの捕まった内に入らない！ 私の力で抜け出した！ アキハに会いに行こうと考えたけど、お父さんに帰って来いって言われたから帰ったの。そうしたら、『この子で遊んでやれ』ってお父さんがいうから遊んだ！」

アキハはフタバの「遊ぶ」感覚が心底怖いと感じた。

大量の戦死者を出して暴れ回ったこのMAを扱った理由が「言われたから」と簡単に片づけられたらたまったものではない。

アキハはフタバの眼をしっかりと見て、叱る口調で話をした。

「フタバ、お前のした遊びのせいで多くの人間が『死んだ』……、そうだ、死んだんだ。戦死したんだよ。名誉ある死と称えられても鉄の棺桶で死んだんだ。俺も一歩間違えれば——、死んでいた。フタバに殺されていたんだぞ」

「私が、アキハを殺す？ 私は連邦を倒す戦争をしたただけだよ？」

アキハが真面目に話をしても、フタバにはあまり通じていなかった。

アキハはアツグバレットにへばりついてほとんどの機器が死んでいる陸戦型ガンダムを見てしんみりと話を続けた。

「俺だって一歩間違えたら、フタバを殺していた。戦場は余裕がなく、命をやり取りする本当に怖い場所だと心底感じたよ。でも、連邦とジオン……、違いがどこにあるんだろうか？」

アキハは地底湖に映った自身の顔を見て真剣に考えた。

自分の所属は連邦軍だ。だが、元はジオンの技術者。話をしている相手もジオン軍の女パイロット。これじゃあ「ジオン崩れ」と言われなくても仕方がないとアキハは強く感じていた。

そんな落ち込むアキハにフタバが元気に声をかけた。

「アキハ、戦いたくないなら、私と一緒にジオンにすれば良い！ 私がアキハを守ってあげる！ ジオンは仲良しだよ！ ミツハもヨツハもいてお父さんもいる！ 寂しくない！」

「別に寂しいから悩んでいるのとは違うよ。俺は連邦軍に亡命した身なんだ。今以上に事をややこしくしたら本当に軍法会議モノになってしまう。だから、フタバの気持ちは嬉しいけど、ジオンには戻れない」

アキハの言葉を受けてフタバは頬を膨らませて不満を漏らした。

だが、アキハには一つの感情があった。その感情が事態をよりややこしくしていた。

アキハはフタバに真剣な表情で一つの案を提案した。

「フタバ、こんな地面の底で俺たちは終わる訳にはいかない。お前を無事にお父さんの所に帰らせるためにも、ここは協力して地上に戻る方法を考えよう」

「アキハの考えかた前向きで私は大好き！ アキハがいてくれたら怖い物はないよ！」

二人は結束して地上に戻る方法を考えることにした。

再会（2）

「バッテリーが全部駄目だ。こんな状態になってよく熱核融合炉が爆発しなかったんだ。配線板も弾け飛んでいるし、これは苦しいな……。フタバ、そっちの状況はどうだい？」

「起動はするよ。でも、出力が上がらない。もう、攻撃は出来ないし、何より動けない。私が技術の知識がないから、直しようがないよお！」

「なら、俺がいう部品を分けてくれ。共通品だから、そっちのコックピット内にも必ずある。探すのはゆっくりで大丈夫だよ。焦らないでゆっくり探して。解らなかつたら特徴を言うから似た部品から手当たり次第に渡してくれ」

アキハは陸戦型ガンダムのコックピット内を確認しながら駄目になった共通部品名をフタバに伝える。フタバは何とか部品を探し出してはアキハいるコックピットに持って来た。

お互い、乗っているのは軍の最高機密機。容易に触って良いものはなかった。

だが、アキハは元ジオンの技術官だ。フタバからアッグバレットの話を少し聞いただけで配線がどうなっていて、中身がどう組上がっているのか考えられた。

フタバは技術の知識がほとんどなかった。

だが、アッグバレットにはYMS-07Bグフのラジエーターと熱核融合炉が三機分使われており、その強力な主砲はムサイ級戦艦の武装を改造して作られていたのがフタバの言葉から解った。開発コンセプトが「地下からの戦術兵器」ならミツハが語った「プロトタイプ」にしてはこれほど完成したMAは珍しかった。

相当、技術に長けた者たちが開発に係わっているとアキハは考えた。

色々と考えながら陸戦型ガンダムの通信機回復を進めるアキハに対して、フタバは思わぬ行動に出た。

「アキハ、見て！」とあっかんべーと顔を自分で歪ませて来た。

この極限状態で気楽なフタバを見て、アキハは啞然とした。

「お前、何やってんの？」

「だって、アキハが思い詰めた表情でずっと黙っているから、怖かったんだもん！ アキハは私を守ってくれた！ だから、私はアキハが好き！」

「どうせ、おままごとの好きなんだ。お前の相手は楽しいけど、本気に出来ない」

「アキハの馬鹿！ 嫌いになるよ！」

「それは悲しいな。だが、今はお互いが生き残る道を考えるんだ。ミツハがどこにもいないのが気になる。フタバはミツハがどこに行つたか見当がつかないかい？」

「ミツハがいたの！ あの娘は私を慕ってくれている本当に良い娘だよ！ 私を置いてどこかに行くような娘とは違うよ！」

フタバの言葉を受けてアキハは考えた。

気付けばミツハの姿が消えていた。

「この地底湖に見覚えでもあったのか？」とアキハは考えを巡らす。だが、ミツハがこの地底湖に見覚えがあるならフタバだって見覚えがあると考えたほうが自然だ。

アキハは色々と考えてるが、結局は答えが見つからないまま、堂々巡りをするだけだった。

なので、アキハはミツハのことは柵の上に置いておいて、フタバとこの地底湖から脱出するのだけを考えて。

アキハが作業を始めて何時間が経過したか――。

地底湖の脅威が二人に襲い掛かって来た。

「アキハア……、何だか眠いよ……」

「絶対に寝ては駄目だよ。地底湖は温度が急激に下がる。もう直ぐ夜が明ける。それまでに何とかこんな寒い場所から脱出しなくては……」

「喉渴いたあ！ お水汲んで飲んで良い？」

「地底湖の水は真水だ。どんな雑菌が入っているか解らない。蟻虫に腹を差し出したいなら引き留めないが……、フタバなら止めてくれる

と信じている」

「なら、補助食品もない今って絶体絶命だよ！」

「気付くのが遅いよ。だからこうして通信機の回復を頑張っているんだ。フタバ、ボルトでA―BX番のボルトが操縦桿に付いていないかい？ 共通部品だから解ると思う。こう、小さくて金色の小指の大きさのマイナスインドライバーで回すボルトなんだけど……」

「アキハって凄い。こんな状況でも冷静なんだ。私は凄く怖いよ」

「俺も怖いよ。でも、フタバが側にいてくれる。こんなに心強いことはない。一人より二人のほうが断然、心は温かいよ」

「アキハの表現、私、好きだな」

「ありがとう」と感謝の言葉をアキハは述べるとフタバからボルトをもらい、基盤にはめ込んだ。

アキハは技術士官として確かな腕を持っていた。

陸戦型ガンダムの通信機系統が共通部品で多く構成されているのを見抜き、補完できる部分を素早く直し、配線を組み替えることで通信機を回復させた。

再会 (3)

「よし、通信機が生き返ったぞ。これで救難信号が出せる。でも、この地底湖がどこでどの深さか解らないな。深過ぎたら電波が地上に出ないぞ」

「それなら、アッグバレットの通信機とそっちの角突きの通信機、合わせる?」

「! ナイスアイディアだ! 地底はそっちの機体が一番得意とするところだ! フタバ、流石だよ!」

フタバはアキハに褒められたことを照れながら「もっと褒めて!」とおねだりして来た。

そんなフタバを見てアキハは「可愛いな」と心から思ってしまった。アキハは非常用通信ケーブルを伸ばして、フタバに手渡した。

フタバは通信ケーブルの先を端末に繋ぐと、アッグバレットを仮起動させた。

アッグバレットの頭部の右横に付いていたアンテナの先端はドリルになっており、伸

ばせば地底湖の硬い岩盤も掘りながら地面を目指した。

「地上まであと、十メートル、九、八、七——」

アキハは「無事に出てくれよ」と心から祈った。だが、アキハは何に対して祈れば良いのか全く解らなかった。

「アンテナ、地表に到達したよ!」

「救難信号を発信させる。フタバ、今後どうする? 俺と連邦のキャンプに戻ろうなんて……、駄目だよな。あんな酷い仕打ちをされて連邦軍を信じる奴なんていない。俺だって……」

そんな時、フタバがアキハに明るい声で話しかけた。

「アキハ、夢ってある?」

「俺の夢か……。技術士官になることだったな。でも、今は夢に裏切られたかたちだよ」

「私の夢はね、お嫁さんになることなんだ! 純白のウエディングドレスを着て、教会で好きな人とキスして牧師さんの前で指輪交換し

て、幸せになる！」

「いい夢だね。俺の夢なんかより目指しがいがある」

「今、できた夢なの！ 凄く素敵な夢だと思わないかな！」

「俺も夢を考えたほうがいいかな？ 除隊して何かを始めようか」

「アキハは良い電気屋さんになりそう！」

「そうだな……、それも良い夢だ」

アキハが自嘲気味に笑った。

その時、洞窟の奥から駆動音が聞こえて来た。

アキハはコックピット内に装備してあった拳銃を引き抜くとフタバを庇うように立った。

駆動音は徐々に近づいて来る。

アキハは嫌な予感がした。

こんな大型な地底湖を闊歩するなんて一つしか存在を知らない。

それはMSだ。

連邦か？ ジオンか？

どちらかが救難信号を受けて位置を特定して来たと考えたほうが自然だ。

アキハはどちらが来てもしばらの道だと感じた。

姿を見せたのはスカート付きだった。MS-09ドム。最新鋭のモビルスーツだった。

アキハは自身がサイド3にいた時に実験をしていた「熱核ホバー推進装置」が陽の目をみたのを見て感動を覚えた。

アキハたちに近づいて来たドムは砂漠用に調整されていた。色は肌色の迷彩に塗装されており、武装はザク・マシンガンを装備していた。先行量産型と見えてまだ調整が上手く行っていないのか速度がアキハの想定よりも出ていなかった。

ドムはアキハたちの前で片膝を突くとコックピットの前に左手を持っていった。左掌に姿を現したのはピンク色を基調にしたパイロットだった。パイロットはヘルメットを取った。地底湖でも煌めくその美貌はミツハだった。

フタバはミツハの姿を見ると満面の笑みを浮かべて駆け寄った。

「ミツハ、来てくれたんだ！ お姉さんは嬉しい！」

「お姉様、遅れて申し訳ありませんわ。意識はアキハより早く戻ったのですが、地底湖のマーキングを忘れ位置特定に時間がかかりました。それに最新鋭機の試運転も兼ねての出撃だったので……、お姉様に辛い想いをさせてしまいました」

「そんなに思い詰めないで！ アキハがいてくれたから、私、怖くなかった！ 色々教えてもらえたよ！」

ミツハはアキハの姿を見ると右手を差し伸べた。

「アキハ、一緒に行きましょう。わたくしがお父様に進言させてもらいますわ。だから——」

アキハはフタバとミツハの想いが心から嬉しかった。

だが、アキハには踏ん切りがつかなかった。

「裏切りに裏切りを重ねるなど……、俺には無理だよ……。ごめん」

「アキハ、ここにいても連邦が来るかどうか解らないよ！ だから——」

「お姉様、アキハの気持ちを大切にすることもまた、想う形だとおもいますわ。アキハ、お姉様を守ってくれたことに感謝いたしますわ。プロトタイプを破棄させて頂きます。救難信号もわたくしが受信できるぐらいです。連邦が間抜け揃いでも大丈夫ですわ」

アキハは陸戦型ガンダムから降りて、ドムのスカートの裏に退避した。

ミツハはアッグバレットの自爆プログラムを20秒に指定すると、叫んだ。

「20秒で爆発しますわ。ショックウェーブに注意してくださいな！」

ミツハは華麗な身のこなしでドムのコックピット内に懸け込むと左腕でアキハを庇った。

陸戦型ガンダムを含めて四機の熱核融合路が誘爆に次ぐ誘爆で凄まじい衝撃波を発生させた。

地底湖の波は荒波に変わり、全てを飲み込む勢いで岸に覆いかぶさる。

地上までかなり硬い岩盤があったが、それすら貫通するすさまじい

爆発は核で動くMSとMAの戦いの悲惨な結末の一つを体現していた。

ショックウェーブが収まり、崩落の危険性もないと判断したミツハはコックピット内にいたフタバに優しく声をかけた。

「アキハは無事ですわ。お姉様、思い残すことはありませんか？」

「……、うん。大丈夫」

「では、帰投いたしますー！」

ドムが動き出したのを確認してアキハはスカートの側から離れた。

アキハの頭の中はこの戦いについて「無益だ」としか考えられなくなっていた。

アキハはドムが去った後を呆けて見守っていた。すると、暁が見えた。

同時に聞きなれた声が聞こえた。

『あの爆発は坊やだったのかい！ 生きているとは悪運が強いね！

迎えに来たよ！』

マリアが皮肉交じりに陸戦型ガンダムから声をかけて来た。

だが、アキハは敬礼をする気分になれなかった。

暁を背に悠然と立つ雄々しい陸戦型ガンダムに対して、「お前の存在意義はなんだ……？」とアキハは問いかけた。

陸戦型ガンダムからの返事はある筈もなく、唯、機械の駆動音が聞こえるだけだった。

疑惑（1）

「これより、アキハ・アンドー中尉の軍法会議を始める！ 議題はスパイ容疑だ！」

オマーンの地に戻ったアキハを待っていたのは自身のスパイ容疑だった。

大隊長のフォックス少佐は目の前に参列し、アキハの顔をじっくりと眺めていた。

アキハは自身にかけられた容疑について、弁解する元気すらなかった。

「アキハ・アンドー中尉、君は亡命した身でありながらまだ、ジオン軍と繋がっている。それは本当かい？」

前面右側液晶モニターに映し出されたジャブローにいる大佐が直球の質問を投げかけて来た。大佐は「少しアキハの回答に興味があり、突（つつ）いた」と言わんばかりに薄ら笑いを浮かべていた。

アキハは大佐の質問にゆっくりと言葉を選びながら口を開いた。

「自分は連邦軍の技術士官です。亡命した身でありジオン軍との結びつきは……ありません」

アキハは自分が口にした言葉の後にフタバとミツハの顔が浮かんだ。

たった数時間。されど数時間。

共有した時間は濃密でアキハの心の中に、しっかりと残っていた。

アキハはその繋がりを自身で断つように言葉を発した。

前方左側液晶モニターに映し出されていたもう一人の査問員、中佐が書類に目を通しながら質問をして来た。

「だが、君が乗っていたMSは複座型。ジオン軍スパイが乗っていた情報が回って来ている。君を発見した際には敵MAは木っ端微塵。こちら側のMSも粉々になっていた。敵のパロットを君はどうした」「逃がしました」

「君がした行為は完全に軍務を逸脱している。敵兵がいるなら捕縛するか殺すのが戦争だ。君はどう考えているのかい？」

大佐が品定めをするような質問をして来た。

アキハはどう返せば良いのか解らなかった。

フタバもミツハもジオン軍の兵士だ。だが、悪い奴ではない。殺す意味があるのか？

いや、無い。

アキハの心はそう答えていた。

「自分は元ジオン軍技術者でした。だから、ジオン軍も良い人はいると解っていました。連邦軍に亡命したのも、家の問題からでした。自身の甘さからなのは解っています。でも！ 良い人はいるのです！

なぜ、殺し合うのですか！ 和解の道だってあるはずですよ！」

アキハは内心を叫んだ。

アキハが叫んだ後、軍法会議室に沈黙が訪れた。

その沈黙を破ったのは大佐と中佐の笑い声だった。

中佐は笑い声を噛み殺しながら、アキハに「これは愉快だ」と質問した。

「君の回答は前回の軍法会議でも聞いた覚えがあるよ。その少尉も君と同じ発想で、ジオンと解り合おうと考えていてね。愚劣な戦いの救いでもあると言いつきおったわ。君も同じクチかい？」

アキハは自身と同じ境遇の人間が連邦軍にいるのに驚いた。

アキハにはそれが救いだった。

「自分の道は間違っていない」、「その少尉もきつと苦しみながら前に進んでいる」

考えただけで勇気がもたらえた。

疑惑（2）

大佐は含み笑いをして、フォックスに声をかけた。

「少佐、君はどう考えているかい？ 君の部隊からこんな半端者が現れたんだ。相応の覚悟はしてもらおうよ」

「はい。でも、自分は罰を背負おうがこの少尉は前に進むと思いますよ」

「それは、ジオン側に内通するということかい？」

中佐がフォックスをギロリツと睨んで話をした。

フォックスは首を横に振って確信に満ちた声で話をした。

「違います。『自分で答えを見つけろ』と私は言いたいのです。きっと良き、連邦軍の戦士になってくれると自分は信じています」

フォックスの言葉を聞いて、大佐と中佐が嘆息した声で話をした。

「中佐、近々オデッサに対して一大侵攻作戦が開始される。この少尉の反抗で無駄にしたくはないものだ」

「そうですね。この少尉にも存分に働いてもらうことにしましょうか」

フォックスの一言で大佐と中佐のアキハに対する心象が変わった。

アキハはフォックスに対して「申し訳ありません」と心から思った。

「アキハ・アンドー中尉に対する軍法会議はこれにて閉廷とする！

中尉は正式な通達が降りるまで、謹慎処分とする！ 以上！」

こうして、アキハに対する軍法会議は幕を降ろした。

○

アキハが謹慎処分を受けている際、オマーンのキャンプ地は大騒ぎになっていた。

オデッサの一大作戦が開始される前に、姿を見せた「敵巨大MA開発を阻止せよ」とジャブロー本部から通達が降りたのだ。

オマーンの地には多くの補給部隊が送り込まれ、賑やかになっていた。

そんな中、謹慎処分中のアキハの部屋にフォックスが顔を出していた。

「今日も暑いね。なに、気に病むことはないよ。君の気持ちは良く解る。敵もスペースノイドといえど人間だ。情が湧く時だつてあるさ。それより、君はあのMAについて何か知っている内容はないかい？僕は君をこう見えて高く買っている。相応の情報を持っていると考えているよ」

フォックスが「どうだい？」と紙コップに水を入れてアキハに差し出して来た。

アキハはフォックスにお礼を言うと紙コップを受け取り、ゆっくり話しを始めた。

「自分はこのMAについて何も知りません。相手がどんな手に出るかも解らないのです」

「君は嘘が下手だよ。でも、そういうことにしておこうか。そのほうが今の君の心には優しいと考える。もし、暇なら格納庫に行くといいよ、マリアが荒れているから、話し相手にでもなつてあげれば助かる」

「隊長が荒れたら、それは凄まじく面倒ですね」

「そうなんだ。マリアとの付き合いは長い。あの娘の性格はよく知っているつもりさ。本当は素直で優しい娘なんだが、外の皮が厚すぎる。君がなんとか鞘になってくれ」

「無茶をいいます」とアキハは返答した。

フォックスは水を一口飲んで、唇を湿らすとアキハに真剣な声で話をした。

「僕は君がジオン軍と内通しているとは考えていない。そんな器用な男には見えないからね。だから、ここからが君の本当の戦いの始まりだ。疑いを深めるも、晴らすも君次第だ」

アキハはフォックスに話しをされて少し心が軽くなった。

水を一気に飲んで、座っていたベッドから立ち上がった。

「少し、格納庫に行つてきます。隊長が荒れていたらコフィンさんたちが困ると思うので――。ありがとうございました」

アキハはフォックスに一礼すると私室を出た。

フォックスはアキハの後ろ姿を見て、「大丈夫そうだね」と呟いた。

小隊（1）

アキハが格納庫に向かう途中、補給部隊が数多くのトリアーエズと陸戦型ジム、陸戦型ガンダムを搬入する姿が見られた。

「コイツは本気でジオン軍のMA製造工場を叩くつもりだな」

アキハは独り言を語っては格納庫に向かった。

格納庫では整備士たちが慌ただしく、搬入と各機の整備を行っていた。

その中でも新たな編成で第〇四小隊に割り振られたマリアの元にアキハは駆け寄った。

マリアはスパナを持っては、コフィンに怒鳴りながら陸戦型ガンダムの整備をしていた。

コフィンはマリアの怒鳴り声を受けても素知らぬ顔で、陸戦型ジムの整備を黙々を続けていた。

コフィンが最初のアキハの姿を見つけては声をかけて来た。

「ジオン崩れがこんな場所にいていいの？ 謹慎処分中と聞いたけど？」

「今は少しでも身体を動かしておかないと、気が晴れないので、来たんです。コフィンさん、手伝えるなら言ってお下さい。俺も第04小隊に配属となりました」

「なら、煩い隊長殿の相手をしてやってくれ。さつきからずっと喚いているんだ。どうやら、隊長殿は君がいないのが心配で、心配で気が落ち着かないと見える」

コフィンは皮肉交じりの言葉を吐くとマリアを見上げた。

マリアはコフィンに「馬鹿野郎が！」と短く怒鳴るとアキハに声をかけて来た。

「坊や、そんなに働きたいならアタシの手伝いをしておくれ！ アタシはどうにも機械って奴が苦手なんだよ！」

「その割にはMSの操縦は手慣れたものですね。整備と操縦は別と言いたいのですか？」

「そうだ！ アタシは操縦を担当しているのさ！ 細かい機械知識は

坊やに任せた！」

マリアはそう言い切るとコックピット内に滑り込んだ。手慣れた操作で機体の運転を開始すると、アキハに言ってきた。

「坊や！ 右腕部と、左脚部に砂が詰まっている！ 除去を頼むよ！ アタシは照準の誤差修正と、今後アンタが乗る複座機材の確保に向かう！」

アキハはマリアの言葉を聞いてハッとした。

マリアがまだ、アキハの案を大切に考えてくれていたのが嬉しかった。

アキハは、マリアの言葉を受けて元気良く「はい！」と答えた。

マリアはアキハの返事を聞いて「元気だね。いい事だ」と呟くと作業に移った。

アキハは自分の出来る精一杯のことをしようと考えていた。

フタバとミツハは気になる。

でも、きつとこの先頑張っていれば良い形で再会する機会が訪れると強く信じた。

だから、落ち込むのは止めよう。前を見よう。

アキハはそう考えた。

アキハは陸戦型ガンダムの砂除去作業に入った。

黙々と作業に集中していると、汗が滲(にじ)み出た。今日もオマーの地は暑かった。

そんな中、様々な情報が格納庫内は錯綜していた。

アキハたち04小隊は現在三名。

本なら4名で運営される小隊だ。一人足りない状態だった。

そんなアキハたちに暴言を吐く小隊もいた。

「4小隊はいいよな！ 人不足とスパイのお陰で昼間から格納庫で機械を弄っていれば良いんだからよ！」

「俺たちはこれから偵察任務だ。スパイが敵を逃がしたからこんな面倒な役回りを任されるハメになったんだぜ？ 本当に勘弁願いたいぜ」

「あんまり事情を話すなよ。スパイがジオンに密告するからな！」

06小隊のメンバーがアキハの気持ちを無視して下品な笑い声をあげた。

前のアキハなら容赦なく突っかかっていた。

だが、今のアキハは違った。

「彼等の言う事も一理あるよ。言われても仕方がない行動を俺はとつた」と冷静に自分を顧みれていた。

小隊（2）

そんなアキハにコフィンが近くまで歩いて来て話しかけた。

「いやに冷静だね。昔の坊やみたいな所がなくなった。どうしたんだい？ 心境の変化って奴が起こったのかい？」

「そんなところですよ。俺だって2回、戦場に出れば嫌でも成長します。それも、敵味方関係なくいる戦場で色々経験すれば……解ります」

「今のジオン崩れは迷いが無い真っ直ぐな顔をしている。だから、僕も安心はしているよ。でもね、君にジオン軍を撃つ覚悟はあるかい？」

アキハは関節の砂詰まりを除去して、一息吐くと、立ち上がってコフィンを視た。その上で言葉を返した。

「撃ちます。でも、命を取ろうとは思いません。相応の勧告をした後に、覚悟が相手にあるなら、俺は迷いなく撃ちます」

「甘い所はあるが、及第点といったところかな。その覚悟を忘れないでね。君の覚悟が僕たち小隊の命を握っているんだ」

「二つ、聞いても良いですか？ コフィンさんはどうして、軍に志願したのですか？」

コフィンは「仕方がない」と微笑むと軍服の右側の長袖を捲った。コフィンの右腕は人間本来の右腕とは違った。機械で神経を繋ぎ合わせた模造品「義手」だった。

アキハは気軽に聞いては駄目な事情だったと、自身の発言を恥じた。

コフィンはアキハの心中を察して、言葉をゆっくり話し始めた。

「僕はシドニー出身だ。一六歳だけど、許嫁がいた。お互い心を許し合い、惹かれあっていた。でも、ジオン軍のコロニー落としで許嫁を失った。助けられなかった——。俺は自身の戒めとして右腕を斬り落として誓った。ジオンを根絶やしするってね……」

アキハは思い出を語るコフィンの言葉の内容と表情の険しきから、事の重大さを知った。

「ごめんなさい。気軽に聞くべき内容ではありませんでした——」

「別に……。僕の覚悟を君が聞いて、その上でどう行動をするか、見させてもらうよ」

コフィンが服装を整えると、陸戦型ジムのほうに歩いて行った。

アキハはコフィンの後ろ姿を見ながら「人にはそれぞれ覚悟がある」と改めて思い知らされた。

○

アキハの軍法会議での判決が届いたのは一週間後だった。

その間、アキハは自分が出来る精一杯の整備と改良に力を入れた。

謹慎処分を受けていながら部屋で休んでいると、「気が滅入りそうだ」と思い、行動していた。

アキハの処分は「オデツサ作戦までに、敵MA製造工場を破壊するか、銃殺刑」という二択だった。

要はアキハを最前線に送り出したい軍上層部からの企みが見える結果だった。

これにはフォックスが抗議の通達を出したそうだが、却下をされていた。

アキハたち04小隊は10月下旬に補充員を含めて、初出撃の日を迎えていた。

補充員の名前はマーフィー・スナイプと言った。「歴戦の猛者で、歳は二十歳後半だ」と本人は軽い調子で語っていた。「特技は女性を撃墜させることだ」と豪語していたマーフィーだが、速攻でマリアに拳骨を叩きこまれていた。

そんな軽い男が合流した04小隊は他小隊が派遣されていない、ゾンオン占領地帯に侵攻する任務を得た。

初陣（1）

その日も朝一番から気温が三〇度を越える暑い日だった。

異常気象で、10月に入ってもオマーンの地は熱帯特有の暑さに見舞われていた。

そんな日の朝一番からアキハたち04小隊は格納庫に集まり、マリアのミーティングを受けていた。

「今回の作戦はルーマニアのプカレストまでの索敵と機体運用データ収集の意味を込めた実験的側面が強い作戦だ。カルパチア山脈をミデアで越えた後、降下作戦に入る。バラガン平野に降下後、索敵をしながら進軍。プカレストの友軍と合流して帰投と……、はあ、我ながら滅茶苦茶な任務だと思うよ」

隊長のマリアが髪をクシャリとかき上げては「困った」といった感じで話をした。

話を陸戦型ジムの右足に身を預けながら聞いていたコフィンが皮肉交じりに話した。

「これも、ジオン崩れが立派な活躍をするから与えられた作戦です。つまりは『三機で敵勢力の中を行進して来い』って言われた。コイツはおかしいですね」

コフィンの言葉を受けて新参者のマーフィーが口を開いた。

「この小隊で死神は中尉殿ってわけですか。ソイツは面白れえ。俺にもそんな戦場が回って来るとは本当に最前線送りは嫌だ、嫌だ——」

マーフィーは弾薬箱にどっかりと腰を降ろしたまま、肩をあげて竦めるジャスチャーをした。

アキハは自身のせいで04小隊全員が最前線送りになったのを「申し訳ない」と感じた。

アキハは歯を食いしばって、「全員に何を言われようが絶えよう」と腹を括っていた。

だが、全員の反応は意外と薄かった。

マリアは「続きのブリーフィングはミデアの中で行おう！ 全員、機

体搬入を急げ！」と命令を下した。

すると、コフィンもマーフィーも敬礼をすると反抗することなく、自身の機体に向かって行つた。

アキハは全員が自分を責めないのが「おかしい」と感じた。

「待つて下さい！ 何で、俺を責めないのです！ 本当は、『ジオンと繋がっている』とか考えている人もいておかしくない！ 何でそう淡泊でいられるのですか！」

アキハが誰よりも一番取り乱していた。

そんなアキハにマリアが指令書のファイルで頭にチョップを叩きこんだ。

「アンタは全員に嫌われたいのかい？ 皆、アンタの頑張りを認めているから、『アンタはジオン軍と繋がっていない』と確信して行動している。なのに、本人が認めていないのであれば、アタシたちが迷惑なんだよ！」

マリアの一喝にアキハは自分が自意識過剰になっていたのに気付いた。

アキハが謝罪をすると、マリアはニツコリと優しく微笑んで、アキハの胸を右拳で二度、叩いた。

「アンタはアタシたちの仲間だ。何よりアタシはそう信じている。だから、早く行くよ。アンタの信念はそこにある。だから、そこに従つて動きや問題ない」

アキハはマリアの言葉を受けて、前を向き首肯した。

アキハとマリアが搭乗する機体は陸戦型ガンダムを現地の部品で改造した機体だ。

操縦席が複座型になったのはアキハが操縦していた陸戦型ガンダムの知識を活かして、再度構築された形になっていた。また、アキハが壊した陸戦型ガンダムの部品を回収して各部分に強化装甲としてアーマーを取り付けていた。

二本角はそのままだが、塗装は砂漠迷彩色に塗り別けており、装甲

(E・)強化型(X)陸戦型(・)ガンダム(G)と呼べた。

コフィンの陸戦型ジムもアキハが調整と改造を施していた。

コフィンの反応速度が通常の陸戦型ジムだと追いつかないと解り、各関節の滑らかさを強化、また、移動をアキハが研究していた熱核ホバーを採用してバックパックと脚部にブースターを増設ホバー走行が可能となっていた。配色も砂漠用に塗り替えられてデザート・強化型ジムとなっていた。

マーフィーの機体はジム・スナイパーの改良機だった。

本来なら冷却装置が必要なジム・スナイパーだが、アキハはアツグバレットの機体を視た際、バックパックの肥大化の代わりに大型冷却装置を兼ね備えた当機を参考にして、腰にジェネレーターを増設。バックパックの上から冷却装置を被せる形で一機に破格の火力を持たせることに成功していた。

名称を付けるならジム・スナイパー・カスタム（マーフィー専用機）とすべきだ。

マーフィーは狙撃を特技としており、その狙撃成功率は百パーセントを誇っていた。

アキハの案を受けてマーフィーは「中尉殿は天才であります！」と称賛していた。

三機をミデアに載せた後、四人はブリーフィングルームに集まっていた。

マリアがミデアの操縦士に「頼む」と声をかけた。

すると、ミデアの操縦士は明るい声で「地獄への直行便、出発しますよ！」と本当に嫌な台詞を吐いて来た。

アキハはそんな操縦士に「本当に口が悪い」と考えては離陸の再発生する浮遊感を今は唯、受動的に受け止めるしかなかった。

初陣（2）

オマーンの地から三時間かけて飛空して目的ポイントまで残り数十分となった。

だが、「アキハが本当に死神になったのでは？」と考えるくらい、事態是最悪の結果に転んでいた。

ジオンの制空権に入ったところで偶然にも、ジオン軍偵察部隊と接敵した。

相手はドップ三機の編成だった。

だが、こちらは輸送艇だ。

攻撃の手段は機銃が申し訳ない程度にあるくらいだ。

当然、戦闘では圧倒的不利に陥る。

機内では警報機が鳴り響いていた。

機長からMSパイロットに「即座に降下作戦開始」の命令が下された。

アキハはヘルメットを装着して、EXGに乗り込む。主に操縦するのはマリアだ。マリアが来た時点でEXGのハッチを閉めた。

「何だってこんな時に接敵するんだい！　ここで降りたら狙い撃ちだよ！」

焦るマリアにアキハが冷静に返答した。

「大丈夫です。この機体は重装甲がとり得です。機関銃の直撃を受けなくても落ちませんよ」

「そんなことは知っているよ！　アタシが言っているのは仲間の心配だ！」

「マーフィーさんが心配ですね……。あの機体は後方支援が目的ですから……」

「当然、アタシたちがカバーに入るよ！　全機、準備は出来たかい！」

『コフィン機出来ました』

『マーフィー様、心の準備が出来ませんっ』

「それじゃあ、マーフィー機からひと思いに行きな！　続いてEXG、最後にコフィンだ！」

『新人に対して温情がない部隊だことで……。マーフィー機、降下、行くぜ！』

マーフィーの声と同時にロックが解除された。

マーフィー機が空中に投げ出される。

「続いてアキハ、マリア機、お願いしますー！」

アキハが機長にロック解除をお願いした際、機長から途切れ途切れだが、無線が入った。

『小隊長、当機はここまでみたいだ……。後は自力でたのむ——』

「脱出しな！ 後は小隊内でやる！ アンタたちも命を無駄にするな！」

マリアが無線に向かって感情を吐く。

だが、マリアの言葉を受けた機長の言葉は真摯的なものだった。

『機長として、この機を放置できない。後は任せ——』

「機長！」

E x Gのロック解除と同時にコフィン機のロックも解除された。

アキハの身体は重力内に放り出された。

アキハのモニターに映し出されたのはミデアがドップ三機の集中攻撃を受けて爆散する光景だった。

「畜生！」

マリアがモニターに拳を突き立てた。

アキハも悲しみと憤りを強く感じていた。

だが、アキハは「今、生き延びる必要がある」と感じて、機器を操作し始めた。

「隊長、今は目の前の事態に意識を集中して下さい！ 高度六千から降下しています！ 周囲の索敵開始！ 友軍、ポイント七にマーフィー機、ポイント二にコフィン機を確認！ 敵機視認距離、ドップです！ さっきの奴等、こちらも落とす気です！」

「やってやろうか！ このアタシたちに喧嘩を売ろうなんざ一億年早いのかー！」

マリアが空中で機体を立て直しに入る。

だが、空の王者はまだ、MSではなく戦闘機だった。

ドップのほうが旋回性能、攻撃性能共に高かった。

ジオン軍偵察部隊はミデアを撃墜して破竹の勢いで迫っていた。

「前から潰してやる！」

マリア機がビームライフルを構えた。

だが、アキハはその行為を制した。

「前の機体は駄目です！ 囿です！ 本命は後方から来る二機！ 狙

いは……、マーファイ

ー機です！」

マリアはアキハの言葉を聞いて震撼した。「敵はこちら側の弱い奴から確実に潰しにかかる狼の集団だ」と解った。

アキハは目の前にキーボードを用意しては機器に空中制御プログラムを入力開始した。

こんな時に作っていたハルの復旧が完了していれば勝手にしてくれた。なのに、肝心な時に完成していないのが悔やまれた。

「バーニア規定値調整……、完了。OSへ滞空時の制御バーニアの自動プログラム……、設定。空気による摩擦と重力の影響による照準補正……、再設定完了。隊長、マーファイ機を守って下さい！」

「言われなくても！」

E x Gは姿勢を急激に安定させると、目の前を通過するドップを無視して下に向かうドップ二機に対して強襲を仕掛けた。

「落ちな！」

マリアは後部から正面に狙撃スコープを伸ばすと躊躇なくトリガーを押し込んだ。

高出力のエネルギーが銃口から放出され、空中を斬り裂く。斬り裂かれた先にいたドップの右翼をかすめたビームの威力は強力でかすめた右翼を熱で溶かしてしまった。

「よし、一機、撃墜！ 次はどこだ！」

「……、マーファイ機後方ポイント三！ 来ます！」

「間に合わない！」

マリアが操縦桿を操作してビームライフルを構える。

だが、マーファイ機の後方に回ったドップはマーファイ機を盾にす

る形で攻撃態勢に入った。

「クソッ！ 嫌な攻撃のしかたをするね！」

「残一機、真上から来ます！」

「何だつて！」

マリアがE x Gのモニターを切り替える。

だが、真上は太陽があり、眩しくて攻撃が出来なかった。逆にジオン兵からしたら太陽を背にした形になる。攻撃するにはうつつけの形になっていた。

「ロックオンされました！」

「そんなこと、解っているよ！」

このままでは攻撃を一方的にされて撃破される。

アキハは自分の「死」を直感で予想してしまった。汚名を晴らせず終わる短い人生。戦争の終わりを見ずに、フタバとミツハにも再会出来ずに終わる――。

「こ、コナクソおお！」

アキハは自然と補助用に自身が操作する武器の一つ、胸部バルカンを掃射していた。

「ここで終わってたまるか！ まだ、見たい未来（先）があるんだ！」

アキハの必死さにマリアが応えた。

「坊やが諦めなかったらアタシも諦められないね！」

『隊長らしい言葉がやっと聞けた。ここは僕に任せてもらうよ』

ミノフスキー粒子が散布されている中で響く少し、皮肉った美声。

コフィン機からの通信だった。

コフィン機が華麗に空中で姿勢制御をこなして、ドップに右蹴りを叩きこんで華麗に撃破した。

隙をぬってコフィン機から100ミリマシンガンの掃射が始まった。

マーフィー機を執拗に狙うドップ一機を確実に捉えた弾丸の雨は機体を穴だらけにて撃墜した。

マリアはコフィン機に通信でお礼を述べた。

コフィン機は「どうってことありません」と簡単に済ませるとマー

ファイアーに通信を入れた。

『地獄からの生還はどんな気分だい？ 死神は君かもしれないね』

『貴様、友達いねえだろ……。本当に手厚い歓迎は沢山だぜ』

『全機生存を確認。パラシュート展開高度に達します！』

「よし、4小隊、全員地上で再会しようか！ ミスしたら帰投後、バーで全員に奢りだからね！」

「マリアの提案は全員の士気を高めた。」

「この後、04小隊は地上に全機無事に着地する。」

だが、そこは山脈地帯の山頂で、ジオン勢力下のど真ん中だった。

苦悩

※東カルパチア山脈内内ジオン軍試作機開発拠点 研究室 午後三時

テツハは頭を悩ませていた。

自分はジオン軍に残りアンドー家の存続を考えて尽くす決意を固めて、マ・クベ指令の下に付き、オデッサの地で水爆とジャブローを地底から攻撃する拠点戦略兵器の開発を進めていた。

だが、地上の情勢は連邦軍側へと傾き始めていた。

九月下旬に機体調整用に改造していたバーキアシリーズの試作二号機が連邦軍に捕まるとんでもない事件を犯した。

同時に、三号機が感情に流れられ暴走。同時に姿を消す行動に出た。だが、物事はバランス良く出来ていた。

二号機と通信が回復し、帰投命令を下すと自力で還って来た。

テツハは、帰還した二号機の様子を見て調整が必要だったプロトタイプを任せ、戦場をかき乱す運転にどれほどの効果が機体できるかのテスト運転を兼ねて、出撃させた。

結果はプロトタイプを失う事態が起きたが概ね大成功だった。

だが、問題はそこから起きていた。

バーキアシリーズに感情は無用。必要最低限の感情以外は発育しないように徹底調整をしていた――、筈だった。

だが、二号機と三号機共に「思慕」と「女」という感情に目覚めて帰投してくる始末。

その元が「アキハ・アンドー」と名乗る青年のせいだと知って更に悔やまれた。

テツハはアキハ（息子）に戦場に出ろとは一言も命令をしていなかった。

「いち、技術官として連邦軍に亡命さえすれば良い」と考えていた。

だが、どこで運命は狂ったのか？

テツハとアキハの運命が交差する日が来るとは考えもしなかった。

だが、テツハからしたら絶好の機会とも考えられた。

テツハの研究でアキハが死んでも構わない。逆に感情を利用して殺し、自身の立場を不動の物にさえすれば良いと考えた。

だが、バーキアシリーズの感情除去が上手く行かないのにテツハはずっと頭を悩ませていた。

研究室でマ・クベ指令と話をした後、自身の研究用椅子に深く腰を降ろした。

テツハはフタバをこの場に呼び出した。

バーキアシリーズ二号機を呼んでから五分と待たない内にフタバが姿を見せた。フタバはジオン軍服に身を包んで、敬礼をしてテツハの前に駆け寄って来た。

「お父さん、どうしたの？ 私、訓練をしつかりこなしているよ？」

この少し無垢で人懐っこいところが二号機の特徴であり、感情が表に出た時の症状だった。

テツハは額にしわを寄せては語りかけた。

「お主の敵は何だ？ 答えてみせよ」

「連邦軍！」

「では問う。お主にとってアキハはどんな存在だ？」

「アキハは好き！ 初めて色々お話をしてくれまし、私を大切にしてくれた大切な人！」

「違う！ アキハは敵だ！ 殺す相手だと何度言えば解る！」

「お父さん、なんで怒るの？ アキハ、悪い事、何もしていないよ？」

「まだ、こんな調子か……。下れ。代わりに三号機を——。ミツハを呼んで来い」

「解った！」とニパツと笑ったフタバは敬礼を適当にすると研究室から出て行った。

テツハはあんな調子の二号機をどう修正すれば良いか試行錯誤していた。

薬品投与、記憶操作、人の道を踏み外したと言われればそうだ。

だが、テツハはこの「人造人間」を育て、兵器にする分野を任せられたからには遂行する義務があった。

プロトタイプを踏まえた新型の作成も順調に進んでいた。

後は、適正なパイロット（人造人間）さえ完成すれば問題はない。だが、そこで躓いていた。

思った以上に二号機と三号機の状態が悪い。

「これは……、切るしかないかのお……」

テツハは内心を吐露した。

その時、三号機、ミツハが姿を現した。

ミツハもジオン軍服を着ており、フタバより規律を重んじる性格か、キビキビとした動きでテツハの前に近寄った。

「お父様、呼び出しに従い出頭しましたわ。何かありましたか？」

「お主も……、アキハを殺せぬクチか？」

「お父様……、わたくしは、その、アキハを……」

「もうよい。下れ」

「……、ごめんなさい」と呟くとミツハもテツハの前から姿を消した。

ミツハの場合は思慕に対して「申し訳がない」と背徳感情があるだけまだマシだとテツハは考えていた。

だが、アキハを慕う感情があるのはフタバと同じで、どんな手段をとっても消えない

感情だった。

テツハは断腸の想いで決断をした。

まだ、バーキアシリーズには四号機が残っている。

一号機と同じ理由で消せば良い。

テツハの顔はこれ以上ない悪魔の表情に歪んでいた。

「フタバとミツハを……、消すぞ」

接敵（1）

※西カルパチア山脈山頂ジオン軍勢力下内 午後一時
アキハたち04小隊は全員無事に着地に成功した。

だが、場所が非常に悪かった。

西カルパチア山脈はジオン軍勢力下で、連邦軍と小競り合いが続く最前線だった。

引き返すわけにもいかず、マリアは進軍を決行した。

E×Gを先頭にコフィン機、マーフイー機と続いていた。

アキハは状況が最悪なだけに索敵を常に続けていた。

音波照合をしたいが、複雑に入り組んだ地形では音波が跳ね返ってしまい上手く照合が出来ない。

アキハはマリアに声をかけて、一旦、進軍を止めてもらおうように進言した。

「何でだい？ こんな場所に敵はいないと思うけど？」

「迂闊な行動は死に繋がると思っています。俺だって伊達に戦場に出いてません。ソナーを使わせて下さい」

「そこはアンタの領分だ、アタシがとやかく言うつもりはないよ。全員、音を立てるな！ 土官殿の索敵を邪魔したらアタシの拳骨が落ちると思いな！」

アキハはマリアの全員への釘の刺しかたが独特で面白いと感じた。

アキハは機器を操作してE×Gの腰からソナーを地面に落として耳を澄ませた。

すると、聞きなれた音がアキハの耳に聞こえた。

「隊長、止まってもらえて正解だったみたいですよ……。声紋確認……、ザクIIが3機うろついています。何かを探している？ 少し待って下さい。ザクIII3機とドムI機が戦闘を行っています！」

マリアがアキハの言葉に疑問を投げかけた。

「何だいそりゃ！ ジオンも遂に頭が狂ったかい！ その情報は確かなんだろうね！」

「確かです！ 前方で行われています！ もう直ぐ視界で捉えられま

す！ どうしますか？」

アキハの疑問にマーフィーが応えた。

『ここは新人の俺の出番だ。こんな時のスナイプだ。場所を確保してくる。隊長さんよ、単独行動の許可をもらえないかい？ こんな岩肌だらけだと砂漠用の塗装でも丸見えだ。場所を確保さえすれば、ザクだろうがドムだろうが一撃で仕留めてみせるぜ』

その時、コフィンが話に割って入った。

『この場合、殲滅しますか？ 僕は殲滅したら気分が良いけど、ジオンが仲間割れをしているなら放っておけば良いんじゃない？』

アキハは考えた。何故、こんな味方の勢力下で仲間割れをする必要があるのか？

コフィンの考えが一番、王道に考えられた。

敵が仲間割れをしているなら放っておいて問題はない。勝手に潰し合ってくれたらそれで良い。

だが、アキハは違和感を覚えてしまっていた。

それは、追われている機体が「ドム」だということだった。

地底湖でフタバを迎えに来たミツハが乗っていた機体もドムだった。

この場合、簡単に考えたら、ドムに乗っているのはミツハだと推測出来た。

だが、アキハはそんな妄想を振り払って、現実を見た。

模擬戦か何かをしている可能性も捨てきれない。

だから、まずは、自身の目で確認する必要があると考えた。

「隊長、ここは自分が目になります。ジオンが罠を仕掛けていて可能性も捨てきれません。なので、目視で敵が何なのか、確認したいと考えます」

「アンタ、気は確かなんだろうね？ ここは山頂だよ。空気は薄いし、普段通りの行動は難しい。それでも行くと言うのかい？」

「是非、やらせて下さい」

「……、よし！ これから坊やが敵情視察に出る！ コフィン、後方のガードをしてやれ！ マーフィーは狙撃位置で待機。合図があれば

何時でも撃てる準備をしな！ アタシは前面を確保する！」
アキハはマリアにお礼を言うと、コックピットハッチを開いて、外に出た。

接敵（2）

カルパチア山脈山頂はゴロゴロとした岩が多く、人の身を隠すには絶好の場所だった。アキハは薄い空気の中、無線機を耳に当てながら中継地点を確保しつつ前進した。

アキハは戦いによって変わってしまったカルパチア山脈の自然環境を嘆きつつも、前進し、スコープで敵機を確認出来る距離まで近づいた。

中継地点を経由して敵機の無線を傍受出来るように局地を立ててスコープとEXGのカメラを接続した。

アキハはスコープで敵の動きを捉えると「酷い——」と呟いた。

ドムは機体が中破していた。右腕は無く、機械が露出しているあたりから、攻撃された跡が窺えた。胸部も破損しており、火花が散っていた。だが、流石は最新鋭機だけはある。脚部のホバー駆動が順調なだけザクII三機からの攻撃をなんとか回避出来ていた。

「これはなぶり殺しだ……」とアキハは考えて敵の無線を傍受できるか機器を操作し始めた。

上手く傍受できたと思うと、アキハは自身の耳を疑いたくなった。

『お姉様、しつかり掴まって下さいまし！　ここから絶対に逃げ切りますわ！　この山さえ越えれば連邦軍の勢力下です！　アキハに事情を話しさえすれば、わたくしたちは連邦に逃げられますわ！』

『ミツハを信じている！　絶対に二人でアキハの元に行こう！　きつと、アキハも私たちを待っていてくれるから！』

声と話の内容から二人がフタバとミツハなのは即座に解った。

アキハは追われていたドムにアキハとミツハが乗っているのを知ると、自分でもどうしたら良いか解らなくなっていた。

ここで、ドムを支援するように友軍をお願いをすれば、スパイ疑惑は確定になり、銃殺刑は実行される。

かといって二人を無視する訳にもいかない。

アキハは自分の立場を「こんなに悲しいとは……」と歯をガリツと食いしばって呪った。

その時、事情を聞いていたマリアがアキハに声をかけた。その声は優しさに満ちていた。

『坊や、アンタの気持ちは痛いほど解るよ。だから、安心しな。最初に話しをした通りだ。アンタはアタシたちの仲間だ。仲間の知り合いもアタシたちの仲間だよ』

「でも、ここで隊長が動けば、部隊全員が処罰の対象になります。だから、俺一人で何とかしよう」と――

『馬鹿だねえ。あんな乱戦に一人で突っ込んで死にたいのかい？ 背負う物を半分、アタシたちに分けな。そうすれば、アンタだって冷静に物事を判断できるようになるさ』

アキハはマリアの言葉が心底嬉しかった。だから、正直に内面を話した。

「隊長、俺はあのスカート付きを助けてあげたい！ コフィンさんもマーフィーさんも迷惑だと思う。でも、どうしても助けてあげたいんです！」

アキハの声を聞いてマリアは「良く吐いた！」と威勢よく叫んだ。『全機、敵をザク三機と断定！ スカート付きは今後の情報を提供してくれる友軍機と判断！ さて、初の戦闘だ、撃たれるなよ！』

「隊長、待って下さい！ 策なしで突っ込むのは危険です！」

『何だい、坊や！ こっちは盛り上がっているのに！』

「ここはジオン軍勢力下だと忘れていませんか？ 迂闊に姿を見せると、後々、行動がしづらくなります！ ここは、狙撃での一撃必殺を狙う必要があります！」

『アンタ、無茶を言うね！ 相手は常に動いているんだよ！ どんな狙撃の天才でも、動局的に当てるなんて神技を達成した奴を聞いた覚えはないよ！』

「そこは俺がなんとかします！ 敵の一機は俺が仕留めます！ 動きの止まった二機を隊長のビームライフルとマーフィーさんの高出力ビームライフルで仕留めて下さい！」

『僕は無用かい？ なら、見学をさせてもらおうかな？』

「コフィンさんは後続がないか素敵をお願いします！ 後ろを取ら

れてしまったらこの作戦は全て終わります！」

コフィンがアキハの提案を受けて「隊長、どうします？」とマリアに問う。

マリアはアキハの立てた即席の作戦に全てを懸けた。

『こうなったら坊やに懸けるよ！ マーフィー機は狙撃ポイントに着け！ アタシも狙撃ポイントを探す！ コフィンは敵さんが来ないか確認しな！』

『初任務で即席作戦。こりや、面白い任務になりそうだぜ』

『マーフィー、ぼやくな！ 上手くやりや昇進だつて考えてもらえるさ！ アタシが進言してやっても良い！ 先ずは目の前の敵をやるよ！』

部隊が行動を開始した。

アキハは自身が今回の作戦の鍵だと強く考えて巨人が闊歩する戦場に身を躍らせた。

まず、アキハが採った行動はドムとの接触だった。

中破したドムは必死に逃走劇を続けていた。

アキハはドムの足下まで駆け足で移動すると、走りながらワイヤー・ガンを左腕部に向かって射出した。

ワイヤー・ガンは上手く左上腕部に引っかけアキハを宙に浮かせた。

アキハはワイヤーを回収しながらコックピットまで昇る。

その際、ザクイーが攻撃をしかけて来た。マシンガンの掃射だ。

嵐のような弾幕の中をドムは器用に回避する。

だが、ドムの回避運動は外にぶら下がっている人間からしたら拷問だ。

派手に振り回されたアキハは機体に身体を打ち付けて、意識が彼我に飛びそうになった。

だが、責任感と強い想いで、吹き飛びそうになった意識を繋ぎとめると、再度、またワイヤーを回収し始めた。

コックピット部分まで回収して上がると、アキハは腹の底から声をあげた。

「フタバ、ミツハ！ 俺だ、アキハだ！ 俺が解るならコツクピットに入れてくれ！」

アキハの声は虚しく響くだけだった。

接敵（3）

ドムの急旋回にアキハの身体は簡単に吹き飛ばされそうになる。だが、アキハは必死にワイヤー・ガンにしがみついで、「手を放さまい」と必死になっていた。

その時、ドムが左手に持っていたマシンガンを掃射した。

アキハは耳をつんざく爆音に鼓膜が破かれないうち抑えながら必死に耐えた。

巨人たちの戦場にアキハは振り回されていた。

「このままでは、こちら側の作戦が機能しなくなる……」

アキハは考えて、必死に二人の名前を叫んだ。

アキハは他の作戦に移ろうと考えたその時、戦場で、ドムのコックピットが開いた。

「ミツハ、アキハがいるよ！ 見てみて！ 本当だよ！」

「アキハ！ どうしてこんな場所にいるのです！ しかも、腕に絡まっていてエラーが出るから確認しようとしたら……、あなたでしたか！」

「よ、よう。久しぶりだな。少し訳ありな身だから、そっちのコックピットに入れてくれたら助かる」

ミツハは「解りましたわ」と答えると、アキハをコックピット内に招き入れた。

ドムのコックピット内は回線がほとんど壊れ焼けて煙が立ち上がっていた。

「これは酷いな……。ミツハはこの状態で戦いを続けていたのか……。よく持ったね」

「これも執念って奴ですわ。でも、流石に三対一は苦しいです。早く逃げないと……」

「待ってくれ、今、俺の仲間が二機を仕留める用意をしてくれている。一機だけ、倒せないかい？」

「援軍まで連れて来てくれたの！ アキハ、優しい！」

フタバが無邪気にアキハの左腕に抱き着く。

アキハはそんなフタバの頭をクシャリと撫でると「頑張ったね」と優しく声をかけた。

「お二人、和んでいる場合にはありませんわ！ 追ってが来ましてよ！」

「逃げる方向を四の方向に頼む！ 奴等は陣形を採っているようである！ ミツハ、お前なら出来る！」

「当たり前ですよ！ アキハに言われたら出来る姿を見せる以外ありませんわ！」

ドムは轟音を立てながら半円を描くように高速で移動を開始した。アキハはドムの奏でる駆動音に耳を澄ませる。

アキハからしたらドムは自身の技術が採用された子供と同じだった。

「この音は異常だ！」とアキハの耳は少しの異変に気付く。

「ゴメン！」とミツハに謝るとアキハはドムの設定を確認し始めた。

「アキハ、どうかしたの？ この子は私たちが整備しているから問題ないよ！」

「フタバを疑っているのとは違うよ。唯、異音が聞こえるんだ。きつと激しい酷使で機体にガタが来ているのだと思う」

アキハはドムの機体設定を手慣れた動作で再設定を開始した。それは空中戦で見せた異常な再設定の速さの元が、この技術に秀でる男の才能を間違いないと裏付けている証拠だった。

「やはり、熱核ホバーにガタが来ている！ ミツハ、動きを再設定し直す！ 一〇秒耐えてくれ！」

「長いですわ！ 五秒で再設定し直して下さいさらない！」

ミツハは焦った声でアキハに声をかけた。

アキハは「言ってくれ！」と吐いて機器を触り始めた。

ドムの直ぐ近くで着弾があった。コックピット内が激しく揺れる。切迫した状況の中で、アキハは再設定を完了させた。

「ミツハ、行けるよ！ 一機を倒してくれ！」

「簡単におっしやる！ この機体で何機撃破したと思われていますか！」

「九機！ ミツハは成長した！」

フタバの無邪気な声にミツハが「お姉様は黙って下さい！」と釘を刺した。

アキハは残されたドムの兵装を確認しながら、提案した。

「……よし、この機体で出来る最大限の行動をしよう。俺が地上に降りてザク一機の足を止める。ミツハは足が止まったザクにとどめを刺してくれ」

「そんな、無茶ですわ！ MSに対人兵器で挑むなんて馬鹿もいいところですよ！」

「私も着いて行こうか？ アキハ、一人だと難しそう……」

「フタバはコックピット内に居てくれ。どんな危険が待っているか解らない。それに俺だって伊達に戦場を経験していない。やりようはあるさ！」

アキハの言葉を受けて、ミツハがコックピットハッチを開いた。

「ここで言い合っても仕方がありません。アキハ、お願いしますわ。その代わり、必ず、生きて帰って下さい」

アキハは「約束する！」と言い切るとドムのコックピットから出た。

フタバはアキハの後ろ姿を見ながら、ミツハに質問をした。

「アキハ、あんなに強気な性格だったかな？ 少し変わったね」

「きつと、戦場は大人に変えたのですわ。お姉様とわたくしを女に変えたように……。お姉様、アキハの動きを見て下さいいな！ わたくしは操縦に徹しますよ！」

フタバはアキハが少し成長したのを肌身で感じ、「もつとアキハを知りたい」と強く願った。

それぞれの戦いかた（1）

アキハは岩に身を隠しながら、ザクII一体に接近していた。

ミツハはアキハが動き易いように三機を分断させる威嚇射撃を行ってくれた。

結果、ザクIIの一機が編隊から離れた。アキハはそのザクIIに近寄っていた。

ザクIIは一週間戦争からルムウ戦役まで幅広く投入され、重力戦線でも地上に多く配備されているジオン軍主力MSだ。連邦軍が一番相手にするべき敵でもあった。その分、相手に対する研究は進んでいた。また、ジオン軍内でもザクに対して様々なバリエーションを開発し、多目的な戦局に対応すべく現地改修が行われていた。

アキハは元ジオン軍技術者で連邦軍技術士官だ。技術関係なら誰にも負けない自信があった。

アキハはザクIIの足に飛び乗るとすねに耳を当てて駆動音を確認し始めた。

「一・二・三・四……、三秒開けて規定値に戻る。これは旧ザクの部品を流用しているな。なら、拳銃で叩き割れば足の柔軟性を硬化させることが可能だ！」

アキハは拳銃の弾丸を排出すると、狙いを済ませて、ザクIIのすねの装甲内に拳銃を放り込んだ。

ザクの足は整備し易いように様々な同一規格部品から構成されていた。また、機械の構成は簡略化されていて、整備性が極端に良いのも広く普及した理由だった。

アキハが採った作戦は、そんな汎用機の弱点ともいえた、「異物混入の際に発生する機械の動作不良」を意図的に引き起こす作戦だった。

単純な構造をしている機械ほど少しの異物混入で停まり易い。複雑な機構だと更に停まり易い。「機械は異物に非常に弱い」とアキハは知っていた。

甲高い歯車同士が噛み合う音と同時にザクIIの動きがガクリツと止まった。

アキハはザクIIから駆けて離れながら無線機のチャンネルを変えてミツハに連絡を入れた。

「今だ、四時の方向にいるザクを討つてくれ！」

『任されましたわ！』

ドムがマシンガンを放り捨てて、背後に背負っていたヒートソードを引き抜いた。

再設定した効果が表れた。ドムは急激に速度を上げると、足が止まって立ち往生していたザクIIを腹から真つ二つにした。コックピットを焼き切られ、パイロットは即死だった。

アキハは無線機のチャンネルを変えて叫んだ。

「目標達成！ お願いします！」

アキハの絶叫と同時に空を高出力のレーザーが走った。これで空気摩擦で威力が減衰しているのだから驚きだ。

一撃でザクのどてっばらを撃ち抜いたビームとコックピットを貫通し、そのまま左腕まで切り裂く高出力のレーザーがザク二機を襲った。

勝負は一瞬で終わった。

ザクII三機は一機が隙を見せたことで全てが瓦解した。

アキハは戦場の恐ろしさを改めて知った。

ドムがアキハに近づいて来て、コックピットハッチを開放した。

フタバとミツハは憑き物が落ちた表情でアキハへ駆け寄って来た。

アキハは「今は三人、生きている実感を確かめたい」と思い、二人と言葉を交わした。

それぞれの戦いかた（2）

アキハはマリアたちと合流すると、フタバとミツハを改めて紹介した。

その上でマリアが、なぜ、ジオン軍同士が殺し合っていたのか理由を聞いた。

フタバが暗い表情をしては、ミツハに代わって理由を小声でゆっくり話した。

「お父さんに呼ばれて、今後の話をしたの。そうしたら『お前等は用済みだ』って言われて……。その場で射殺されることを保育者に助けてもらってここまで逃げて来たの。もう、お父さんの元には戻れない。だから、私たちを保護して下さい！」

「話が見えないね……。アンタたちはいったい何をしていたんだい？ 何の用済みだ？」

「オデッサに迫る連邦軍を殲滅して、ジャブローまで一気に殲滅する兵器の開発とパイロットの育成……。私たちは人工の魂。バーキアシリーズの二号機と三号機なんです……」

「俺は女を落とすのが趣味だが、こんなクソみたいな話を聞いた後、可愛い娘ちゃんたちに手は出せませんぜ。隊長さん、その『お父さん』を俺は死ぬほど殺してやりたい気分ですよ。撃って良いですか？」

「同意見だね。僕もジオンは腐っていると考えていたけど、ここまで下衆だとは考えていなかった。隊長、是非、本拠地を叩きに行きましよう」

マーフィーとコフィンがフタバの話聞いて憤慨していた。

マリアは冷静に話しを聞いていて、アキハに質問した。

「坊や、もしその『殲滅する兵器』が前に現れた化け物MAならアタシたちの目標になるわけだ。この娘たちを保護して場所を聞けば、その本拠地が解る……。コイツは大きな収穫だよな？」

「そうなります。でも、この娘たちを軍上層部に預けるのには反対です。俺は相当本部で痛い目を見ました。この娘たちが同じ目に遭うと考えると……。心が痛みます」

マリアはアキハの深刻な表情を見て、軽く微笑むと提案した。

「なら、この娘たちはアンタが面倒をみな。尋問とは違う方法で相手の工場を聞き出しておくれ。アタシはガサツでね。どうにも同じ女の相手は苦手なんだよ」

「隊長らしい判断です。なら今晩はここでキャンプですか？」

「コフィン、文句あるのかい？ マーフィーも笑うんじゃないよ！

さっさとMSを隠して来な！ 明日から忙しくなるよ！」

マリアにどやされた二人は渋々、自身のMSに戻って行った。

アキハはフタバとミツハに「話しをしよう」と冷える高山地で焚き木を囲んで座った。

「それで、お前たちの『お父さん』は誰になるの？ 俺が知っている人？」

「良くご存知の人ですわ。名をテツハ・アンドーと言います。きつとアキハのお父様だと思いますわ」

「！ 父さん！ 何で、父さんがそんな酷いことを！」

「アキハの父さん、私たちのお父さんでもあるんだ。だから、最初に気付いたけど、隠していた。ゴメンね。でも、今は正直に話しをしたほうが良いから——」

フタバが申し訳なさそうに話しをした。

ミツハがフタバを庇うように話しをアキハにした。

「お姉様に罪はありませんわ。責めるならわたくしを責めて下さい。アキハになら何をされても恨みはしません」

「俺は人に罰を与えられる人間とは違う。唯のいち技術士官だ。だから、連邦軍の立場からいうと、父さんを——、テツハ・アンドーを屠る必要があるね」

「アキハはお父さんを殺せるの？」

「解らない。でも、今の心境を素直に語れば、父さんのしている研究や開発は『悪』だ。実際、フタバとミツハを殺そうとした理由は解らない。でも、命を粗末に扱ったら駄目なんだ」

アキハは空を見上げた。

夕闇に染まる空はこれからの激動の戦火を連想させるように赤々

と燃えていた。

アキハは自身の親が背徳行為に手を染めている現実を知った。息子としてどうあるべきか突き付けられた瞬間だった。

「気高くあれ」なんて考えない。唯、悲しい想いをする子を一人でも減らす。

アキハはそう考えると腹が座った。アキハはふとした疑問を感じたのでフタバに質問した。

「フタバたちは何で連邦軍に逃げようとしたんだい？ 民間でも逃げればお前たちなら逃げられる可能性はあつたと思うけど？」

「アキハに逢いたかった！ ミツハと話をして、アキハならきつと私たちに手荒な真似をしないし、何より優しいってミツハが——」

「お姉様も言ったではありませんか！ 全てをわたくしに擦り付けないで下さいまし！」

ミツハがフタバの口を無理矢理塞いでは顔を真っ赤にして猛抗議していた。

そんな二人は「本当に仲の良い姉妹なんだ」とアキハは強く想った。同時に「この姉妹は守り切ろう」と心に決めた。

アキハは冷える山頂でフタバとミツハ、三人で色々な言葉を交わした。

父親の事、戦場の事、試作機の事、怖かった事、楽しかった事——。

三人の仲は深まっていった。

夜が更ける早さと同じくらい心が近づくのを感じていた。

今後、控えている激闘を前のひと時の休息だった。

それぞれの進む道 最後の戦場

※宇宙西暦〇〇79年10月4日 東カルパチア山脈 市街 午前9時

マリアが通信機を使い、アキハから聞いた内容を大隊長のフォックスに伝えた。

フォックスは作戦を考え発案した。

方面軍司令ノフィカと蜜に連絡を取りながら、フォックスも前線に出ると話しは纏まった。

オデッサの激戦を控えての一大掃討作戦。

アキハはことの大切さを噛みしめていた。

アキハたち04小隊はブカレストまで索敵とデータを採取しながら進軍してそのまま帰投する任務だった。だが、運悪いことに脱走兵を匿っている現状を上層部に知られてしまい、帰投はなくなった。拳句、そのまま最前線送りという酷い扱いになってしまった。

アキハはマリアたちに謝罪をした。

だが、マリアたちは嫌な顔をひとつもせず、「そう何度も頭を下げるにあんたの価値がなくなるから止めな」と逆にアキハの身を案る始末だった。

アキハは04小隊を絶対に生き残らせる覚悟を固めていた。

同時に脱走してきたフタバとミツハを、この上なく愛おしく思う気持ちが芽生えていた。

二人から自身の出生やこれまで受けてきた、悲惨な「訓練」内容について知らされた。

その訓練を行っているのが父親のテツハ。アンドーと知った時は衝撃があった。

だが、アキハは自分の家を守る為に息子を亡命させる父親ならやりかねないと考えた。

アキハは自身が実の親と殺し合いをする境遇になるのをなんとなく

く察していた。

最初は地球に行くだけで何も変わらないと考えていたアキハだ。だが、「戦場」がアキハを変えた。

戦場の殺伐とした空気と人を簡単に無に帰してしまう呆気なさが、アキハの心を強くさせた。

何より、フタバとミツハとの出会いが、アキハに「覚悟」の概念を教えた。

「どうしようもない時だってある。でも、痛みを伴っても進む必要がある」

アキハの胸には、そんな感情が渦巻いていた。

それは覚悟と呼べる気持ちであると同時に、「悟った」とも言った。前に進むためには痛みを伴う「覚悟」と「悟り」をアキハは抱いていた。

そんな中、アキハはジオン軍が秘密工場を建造していた、カルパチア山脈のふもとにある市街を占拠していた。

フタバとミツハはフォックスの作戦指揮陣営で保護してもらっていた。

E×G内でアキハはマリアに不安そうに声をかけた。

「フタバたちは大丈夫ですよ？　大隊長が非人道的な行動に出るとは考えられません」

「アンタ、肝が座っているのかいないのかハッキリしな。あの狐は真正銘のお人好しだよ。アタシが保証する。アイツに限って変な行動に出るとは考えられない。長い付き合いだが、アイツほど人間臭い奴を見た経験はないよ。なあ、コフィン」

『作戦行動中に女の心配かい？　ジオン崩れは余裕だね。この作戦でまた、あの化け物が出てくる可能性を考えると普通は怯えるけど……。技術士官殿からしたらあんな奴も鉄屑と一緒にしろいね』

コフィンが捻くれた言葉を嘲弄しながらアキハに吐いた。

だが、アキハは自然とコフィンが悪態を吐くのがリラックスしている証拠だと感じられた。

『中尉殿はあんな綺麗な王女様を二人も持つてしまい、羨ましい限り

ですよ。俺なんか昨日晩からずっと鉄の棺桶でお山と睨めっこだ。ほんつと、色気もクソもない職場だ。隊長が美人なのが唯一の救いだぜ』

「マーフィー、アンタ、寝言は寝て言いな。褒めてくれるのはありがたいがアタシの拳が恋しいみたいだね」

『滅相ありません！ サー！』

緊張感の欠片もない04小隊の無線会話を聞いて、アキハの孤独感や心配な気持ちはなくなっていた。

その時、E x Gの無線機に後衛から通信が入った。

アキハが通信機を操作してヘルツを合わせ、応答の確認をした。

「こちら、4小隊隊長機。無線を受理しました。何事ですか？」

無線の相手はフォックスだった。

フォックスは最前線まで出て来たというのに、非常に朗らかな口調でアキハに命令を語り出した。

『中尉、全員に伝えて欲しい内容があるんだ。フタバ嬢とミツハ嬢からアドバイスを頂いた。敵の主力はザクタイプとグフタイプ、ドムタイプも配備されているようだ。挙句、相手は自己学習プログラムの開発を行っている。君の持って来たAIと同じタイプだ。敵は無人機を投入してくる可能性がある』

「なら、大問題ですね。相手はMSを失うだけで、人の手を汚さない最悪の悪魔を生んだ結果になります。そんな殺戮兵器を放っておけません」

『最前線にいる君たち4小隊が一番危険に晒される。注意してくれ』
「連絡、ありがとうございます」とアキハは無線を切り替えると04小隊全員に聞こえる声で話をした。

「大隊長から連絡です。相手は無人機を投入してくる可能性があります。注意して下さい」

『コイツは参った！ 敵は殺戮の天使かと思えば、悪魔かよ！ でも、手加減無用って事だよねえ！』

マーフィーが明るい口調で話した。

『そんな簡単に話しが進む相手とは最初から考えていないよ。僕は

どんな奴が現れようがジオンを叩き潰すだけさ』

コフィンが淡々と冷徹な声で意志を示した。

「アタシは生き残るために、この場を乗り越えるだけだ。どうせ、帰投しても次の戦場が待っているだけさ。だが、アタシは戦い続ける。自分という存在をこの地球から消さないためにね」

マリアは意志の籠った強い口調で話をした。

アキハは「04小隊の士気は高い」と感じられた。

晴天だった空が曇り、曇天に替わる。

気付けば深々と小雨が降り出していた。

アキハは雨で阻害されないエコー探知で周囲の索敵をずっと行っていた。

その時、アキハの耳に小雨が大地を打つ音とは違う、機械音が聞こえた。

アキハは周囲の機器を操作してボリュームを調整した。

低くギアが噛み合う駆動音と高出力のポンプ・ユニットの音が確かに聞こえた。

アキハは身を跳ね起こしたマイクに叫んだ。

「敵がエレベーターを駆動させました！何かをこちら側に搬出しています！全機、警戒をして下さい！」

狂気

※同時刻 カルパチア山脈内 研究施設

テツハは自身が連邦軍に追い詰められているとは全く考えていなかった。

それ以上に「自分の研究成果を披露する最低限の場所と人形が勝手に集まって来た」と考えていた。

テツハは熱狂的な技術者だった。

自分の開発した兵器が例え息子を殺す結果になっても、有用性を示せば、将来のアンドー家の安泰は確実にとなると確信していた。

その為には結果を残さなくてはならない。

まずは、ふもとの市街地を占拠している連邦軍に対し、ジオンの科学力を見せつける必要があると考え、アキハが研究に研究を重ねていたA Iを改造して埋め込んだMS部隊を投入する算段だった。

テツハは今、格納庫に来ていた。

そこには、30機からのMSが隊列を成し、直立不動で立っていた。本当ならパイロットと整備兵、研究員たちがこのカルパチア山脈内には200人からいた。バーキアシリーズの素体を合わせると四百人からの大規模な基地だった。

だが、今の基地内は閑散としており、人の姿は見えなかった。

テツハは格納庫を見渡せる橋の中央部まで歩いて来ると、盛大に両手を広げて叫んだ。

「ジオン公国にアンドー家あり！ この数カ月諸君と共に寝食を共にしながら、考えた結果、行きついた答えの元に行った処置は大成功に終わった！ 諸君等は今、ジオン公国の代表者、体現者、または、そのものになった！」

閑散とした格納庫にテツハの野太い声が響き渡る。

すると、無人だったMSたちが始動し始めた。

勝手にシステムが立ち上がり、初期プロセスを完了させていった。

テツハはその様子を全く不思議とも感じない様子で叫び続けた。

「貴公らの尊い、犠牲なくして、アンドー家は守れなかった！ 同時

に、この戦いに重力戦線でジオン軍に勝利をもたらすのは不可能だった！　だが、安心してくれ！　貴公等のデータは既にフラナガン機関に送信済みだ！　後は残った連邦軍を叩き伏せるのみ！」

テツハは言葉を紡ぐ途中に「ヨツハよ、こちらにおいて……」と優しい口調で手招きした。

ヨツハと呼ばれた少女は六歳の女の子だった。まだ、幼さが残る顔。ウサギのぬいぐるみを持って放せない幼さは無邪気の象徴だった。髪は銀髪でサイド。ポニーテールにまとめていた。だが、ヨツハの瞳には意志がなかった。

「はい、お父様」と無感情な言葉を吐いて、ヨツハはテツハの元にゆっくり歩いて来た。

テツハは右膝を突いてヨツハに語った。

「貴様は連邦軍だろうが、アキハだろうが、問題ないな？」

「はい。壊せば良いのですね？」

「そうだ。二号機と三号機で動かす予定だった。完成品を急遽、貴様が動かせるようにコックピットユニットから入れ替えた。問題は何かもない。全て、壊せ」

ヨツハは「はい」と簡単に応えると、ヨツハ専用のパイロットスーツ姿のまま、テツハの後ろにあつたコックピット内に入って行った。

テツハはその姿を見て歓喜に満ちた声をあげた。

「これこそが僕の夢見た機体！　アツグバレットだ！　完成したアツグバレットの前に敵はいない！　さあ、全員で協力して連邦軍を駆逐し、自分たちの有用性を示そう！」

テツハの狂気じみた言葉の後に、ジオン軍のMS部隊のモノアイが不気味に点灯した。

テツハの視線の先には全長60メートルの鉄で出来た魔人がうなりをあげていた。その姿は初期のアツグバレットとはかけ離れた存在へと変貌していた。

それはテツハの本当はアンドー家を守りたい一心でアキハを連邦軍に亡命させた想いと今の狂気じみた想いとの違いを体現していた。

市街地戦（1）

※カルパチア山脈 市街 数分後

アキハがエレベーター音を確認して数分が経過した。

ジオン軍がどこから姿を現すのか解らない戦場で、04小隊は警戒態勢に入っていた。

索敵を常に続けていたアキハは音の源を特定する作業を必死に続けていた。

その時、山脈の裾から砂煙が上がり始めた。

アキハは自身の索敵が遅れたことに気づき、口元にあったマイクに叫んだ。

「相手のほうが上手で動きが早い！ 熱源多数！ 来ます！」

「さあて！ 全員、尻の穴を絞めてかかりな！ 死んだら承知しないからね！」

『無茶を言う隊長だ。ま、絶対に死にたくないけどね！ マーフィー機、了解！』

『いつものことさ。多く来いよ……。一機でも多く地獄に叩き落とすてやる。コフィン機、了解』

砂煙を切り裂いて、姿を見せたのはジオン軍のMS部隊だった。

その数は市街だけで10機。

ザクII・高山用カスタム5機、グフ・フライトタイプ3機、ドム・高出力カスタム2機の編成だった。

『まずは1機！ 落ちろよ！』

マーフィー機がビルの屋上に陣取っての狙撃を開始した。

一射でザクII・高山用カスタムの胸部を貫いて、一撃で沈黙させたかに見えた。だが、コックピットを撃ち抜かれたザクはまだ動こうとしていた。

『奴等、本気で無人機を投入しやがったな！ 気味が悪いぜ！』

『こんな奴等はこうすれば問題ない』

倒れたザクに対して、コフィン機がコックピット部分を踏みつけて、100ミリマシンガンで核融合炉を外し掃射した。機器をズタズ

々にされたザクは動きを止めた。

「本当に面倒な相手だね！ 坊や、何とかならないのかい！」

「ハル、起きてくれ。お前と同じ型の人工知能ならハツキング出来ないかい？」

『ハロー、ハロー、アキハ。音声確認。答えはイエス。機体に配線を接続して下さいば可能です』

「そんな暇が戦闘中にあるはずがない！ もっと有益な対応方法の提案は！」

『人工知能なら基盤をショートさせる対応をお勧めします』

「そんなの可能か？ 解らない。でも、隊長なら即座に敵を沈黙させられると信じます！」

「結局、無策か！ アタシも信じられたもんだ！」

「最初から隊長のMS操縦は最高です！ 敵機、来ます！ マーク3の方向！」

「早いッ！ スカート付きか！」

E x Gが頭部バルカンを掃射した。

薬莖が排出され、廃墟のビルに当たり、金属音を奏でる。

ドムはフタバたちが乗っていたドムとは形状が異なっていた。山岳地帯用にペイントカラーが施されているのは勿論、特徴的な脚部のスカートが肥大化していた。空気の薄い、高山地帯でも高機動性を保つために、出力を高く調整した結果だった。武装も実弾系を主軸に考えており、目くらまし用の武装は排除。胸部にロケットランチャーが装備されていた。また背部にはシュツルムファウストを2本装備。腰には投擲用のグレネードが装備されていた。近接武器はヒートホーク2本。主軸の武装はジャイアントバズーカと各距離に対して応戦可能になっていた。

ドム・カスタムの1機がE x Gに標準を定める。

コックピット内にロックオン・アラートが鳴り響く。

だが、アキハとマリアは冷静だった。

以前のアキハなら慌てて、マリアに声をかけていた。だが、幾多の戦場を乗り越えて、冷静に判断を下せる心を持つまでに成長してい

た。

「坊や！」

「右肩に当たります！」

アキハの鋭い判断でドム・カスタムがどの部位を狙って攻撃してくるか判断が可能だった。

マリアはアキハの意見を聞いて鋭く、また、精確に機体を動かし、機体を左側に開けさせた。

ドム・カスタムの放った砲弾は確かにE x Gの右肩があった部分を通過した。

「お返しだよ！」

「設定は確かです！ 後は、隊長の腕次第！」

マリアは迷わず右親のトリガーを押し込んだ。

高出力のエネルギーが銃身から放たれる。

放たれたビームはドム・カスタムのメイン・カメラの一つ目を正確に撃ち抜いた。

だが、ドム・カスタムの動きは止まらない。

ジャイアントバズーカを投げ捨てて、腰に装備していたヒートホーク2本を引き抜いた。

「そんな武器、怖くはないんでね！」

マリアは待つどころかE x Gを操作して前に出た。

E x Gとヒートホークを2本装備したドム・カスタムの近接格闘戦が始まった。

右腕部から縦の振り下ろしが放たれる。

マリアはE x Gを軽快に操ってかわす。同時に左腕部装甲に取り付けてあった小型シールドを展開して打突武器として使った。

破損している顔面に向かって容赦のない打撃が3回、叩きこまれた。

ドム・カスタムの顔面は完全にへしやげて、メインカメラ以外のサブカメラも死んだ。

だが、ドム・カスタムはまだ、E x Gを捉えていた。

戦場は市街だ。

ドム・カスタムの自慢、高速戦闘がとり難い戦場だった。だが、ドム・カスタムは退く気配はない。

ヒートホークを2本、振り上げては果敢にE×Gに迫る。

アキハは後部座席で戦いを観ている、補助に入った。

副兵装の胸部ミサイルのトリガーを右親指で押し込んで、ドム・カスタムに向かって放った。

ミサイルは弧を描いてドム・カスタムの脚部に命中した。

つんのめった形で俯せに倒れたドム・カスタムに対して、マリアがロックオンをした。

勝負はあった。

両脚部が破損したドム・カスタムにE×Gが負ける要素はなかった。

マリアが一息吐いて、アキハに話しかけた。

「コイツ、どうするかね？放っておいたら悪さすると思うかい？」

「……、完全撃破が望ましいです。現状だと心がざわつくのです。『何かある……』と——」

「じゃあ、技術士官殿の命令だ。完全に逝ってもらおうよ！」

マリアが右親指を押し込む瞬間、左側のビルから弾丸の雨が降り注いだ。

咄嗟の判断でコックピットを守ったマリアだが、他の部位で損傷があった。

アラートが鳴り響く。

「左脚部被弾！ 損壊率50パーセント！ 右肩被弾！」

「ッ！ このアタシが隙を突かれた！ 坊や、索敵はどうなっていた！」

「レーダー機器に影響があります！ 強力なジャミングです！」

「どこのどいつだ！ そんな悪さをした馬鹿は！」

マリアが射撃のあったビルの方向にビームライフルを一射を放つ。熱で融解した隙間から都市迷彩を施したザクの姿が見えた。

ザクII・高山用カスタムだ

市街地戦（2）

普通のザクIIより索敵や戦闘補助に主眼を置いたザクIIで、ランドセルに索敵やジャミング等の電子戦用機材が搭載されていた。また、高出力用のブースターも脚部に増設されており、戦闘においても遅れを取らない機体に仕上がっていた。基本兵器はザクマシンガンと変わりはない。だが、クラッカーや、ヒートホークを廃し、グフの装備、ヒートソードと三連マシンガンをオプション装備で追加したところがフタバの乗っていたデザートザクIIカスタムから引き継がれた装備だった。

ザク・高山用カスタムがマシンガンを掃射してE×Gを追い詰める。

被弾したE×Gの機動力は歩く分には低下したが、ブースター関係は無傷だった。

結果、ブースターを使って距離をとるので、マシンガンの嵐から逃げるのに成功した。

マリアは陸戦型ガンダム用ビームライフルを構えて廃ビルを背にして最悪の敵を待っていた。

「電子戦で坊やを負かせる相手がいたとは……。どうする？」

「ジャミングの波長を今解析しています。相手に4小隊の姿を見られ過ぎていました。完全に連邦軍の通信用回線の波長を特定されているとは思いませんでした。でも、俺を舐めてもらっては困ります。ハル」

『ハロー、ハロー。アキハ、解析、完了。データ転送、完了』

アキハは横からキーボードを取り出した。その上で、タイピングを始めた。

マリアがアキハのタイピングの音を聞いて、嬉しそうに答えた。

「本当に、坊やと複座で良かったと感謝しているよ。アタシ1人だとザクに狩られるところだった」

「言いっこなしです。俺1人だとスカート付きにすら勝てません。お互い協力して生き延びる。これが最重要任務です」

「違くないね……。達成率は？」

「完了しました。今、この機体は3つの波長で解析を行えるようにしています。1つは連邦軍用の波長。これはジオン側にも知られています。もう1つは4小隊用の波長。特に俺がソナー、音波解析に使う波長です。これもジオン側に洩れている可能性が高いと考えました。なので、もう1つ、この機体のみで使うプライベートの波長を構成しました。これならきつとレーダーにザクが映ります」

「なら、アタシたちならきつとやれる！ 索敵！」

「……。マーク4！ レーダーに表示出来ました！」

「お返しだよッ！」

マリアが的確にアキハの指示した方向にビームライフルで射撃を行った。

轟音と同時にビルを何棟も貫き、ザクII・高山用カスタムの右肩を撃ち抜いた。

だが、機械で作られた無人機を右腕だけ破損させたのでは止められない。

マリアはビームライフルを捨てて、右太腿のビームサーベル・ラックからビームサーベルを抜き放つと、ザクII・高山用カスタムに向かって突貫を仕掛けた。

ザクII・高山用カスタムは左手に持った三連マシンガンを掃射する。だが、右腕がないので、重心がズレてバランスが取れない。結果、照準が合わない結果になっていた。

マリアは小型シールドで万が一のコックピット直撃から機体を守りながら、ブースターを吹かせて一気に突進をかけた。

マリアの操縦は的確でズレがない。

一刀の元、核融合炉を避けて、動体からザクII・高山用カスタムを真っ二つに斬り裂いた。

「坊や、残敵は幾つだい！」

「残存敵影、3です！ 1機真上を指示しています！」

「フライトタイプ！」

マリアはE×Gの脚に被弾した結果を激しく憎く感じた。

一番必要な機動性を持つ敵に機動性を失ったE x Gで戦いを挑む必要があった。

小雨から本降りに替わった雨の中、空中と地上を自在に動き回る、グフ・フライトタイプを前にE x Gは成す術もなかった。

グフ・フライトタイプの主兵装はガトリンググシールドだった。空中から雨かと錯覚するほどの弾幕を浴びて、マリアが舌打ちをした。

「坊や！ 策はないのかい！ このままだと蜂の巣だ！」

「装甲が分厚いのがとり得です！ 少しは陣取って構えられます！」

現在残っている兵装は頭部バルカン。ビームサーベル、胸部バルカン、胸部ミサイル……。以上でこの状況を乗り切る必要があります！

「機体のガタを何とかしてくれたら、パーティーができる装備だよ！」

アキハは冷静に考えた。

三次元の動きをする相手に対して、三次元で挑まず、面で挑むのは愚策だ。

なら、こちらも三次元の動きをすれば問題ない。

だが、肝心の右脚部があと1回ジャンプをしたら使い物にならなくなる。

陣取つての砲台作戦よりもっと利口な戦いかたがあるはずだ。

アキハは考えに考えを重ねた。

結果、1つの答えに辿り着いた。

「やられてしまいましたよう！」

「馬鹿！ こんな状況だからって冗談を言うな！」

「本気です！ 正確にはやられたフリをしましょう！ フライトタイプには厄介なガトリング砲がありますが、機体の軽量化を図るため、近接武器以外での決め手はありません！ 懸けです！ 砲台をして負けるよりは勝率はありますよ！」

「……、殺されたら、来世まで坊やを恨むからな！」

「自由だ！」

マリアはE x Gをガトリング砲の弾幕に上手く合わせて、仰向けに倒れさせた。

そのまま、熱源で悟られないように、メインスイッチをオフにした。瞬時にメインカメラの視界が消えて、真つ暗な状態になる。

コックピット内は静寂だけが支配していた。

軽快なフィンの音が徐々の大きくなるのが聞こえて来た。

そんな一か八かの大勝負の時にマリアが口を開いた。

「アタシさ。生まれ変わるなら、町娘がいい。こんな血生臭い戦場で男勝りに育つちまった今より断然、可愛くて、お洒落して、女の子らしく生きたい」

「俺は自身の家の束縛がない人生がいいですね。こんなクソみたいな人生はこりごりです」

「でもね！ クソみたいな人生は——」

マリアの威勢の良い声と同時にメインスイッチがオンになる。

各機器に命が宿り、点灯していく。

「まだまだ、楽しいことだって残っている筈なんだよ！」

メインカメラがついた。

そこは灰色を基調としたグフ・フライトタイプがヒートソードを振り下ろすその瞬間だった。

「パーティータイムッ！」

「了解！」

マリアとアキハは持てる全武装をグフ・フライトタイプに向かって叩きこんだ。

グフ・フライトタイプは真正面から直撃を受けてよろけるとその場で沈黙した。

マリアは機体を立て直すと、アキハに振りむいて微笑んだ。

「ナイス懸けだよ、坊や。これなら、他の奴等だって——」

マリアが話を続けようとした時、フォックスから通信が入った。

『四小隊の全員、聞こえますか？ 市街戦、見事でした。でも、相手も本気で我々を潰すつもりみたいです！ 中尉なら解りますね？ 敵が本気を見せたことを——』

アキハはフォックスの言葉を聞いてソナー探知を開始した。

そこで聞いた音は異常な大きさの駆動音だった。一か所から何十

機もの機体が蠢くまるで闇の塊のような機体の存在にアキハは戦慄した。

地底から姿を現したのは形状こそ全く異なるが、化け物と呼べばそうだった。

「アツグバレット——」

アキハは直感で名前を呼んだ。

そう、その化け物の名前はアツグバレット。

正式名称は「ネオ・アツグバレット」だった。

悪魔再臨（1）

カルパチア山脈の市街にその化け物は姿を現した。

全長60メートルの巨体。支える巨脚は2本あり関節各部には防塵対策がなされていた。本体は中央に巨大な砲口があり、一つ目。砲口の横には小さい砲口が横並びに365度並んでおり全方向に対して砲撃が可能だった。頭にはカッター状の装置が6基装備されており、プロトタイプに比べると巨大かし、退化したかのように見えた。

だが、産声ともいえる砲撃でそんな楽観視は一撃で吹き飛ばされる。

アキハは姿を見せた化け物に対して、啞然としていた。

だが、04小隊の誰よりもマリアが冷静だった。

「全員、対シヨック体勢に入れ！ 相手はデカいのを放つつもりだよ！ フオックス、アンタは逃げる！」

ネオ・アツグバレットは砲口にエネルギーを充填させると後方で待機していた陣地めがけて砲撃を放った。その威力は地上から離れた市街にいた04小隊にも及んでいた。

足元にいた、EXGは小型シールドを盾にしてしゃがんだ状態で対シヨック体勢に入った。

だが、小型シールドは溶解し、使い物にならなくなった。

衝撃で市街のビルは瓦礫と化し、カルパチア山脈ふもとの街一つが地図から消えた。

カルパチア山脈を穿った閃光は山を貫通して本陣へと爪痕を残していた。

余りの破壊力に、アキハは騒然としていたが、マリアの一声で我に返った。

「坊や、しっかりしな！ アンタが全員の安否を確認しない限りアタシが落ち着かないだろうが！」

アキハは謝罪をすると、口元のマイクに向かって安否を確認した。

全員無事だった。

だが、アキハは納得できない部分があった。

相手の射撃精度は格段に上がり、不意を突いて出現した時点で勝ち
は確定していた。

だが、本部まで無事なのが納得できなかった。

「わざと外した」としか納得の行く考えが出来なかった。

アキハはモニターに映し出されたネオ・アッグバレットを睨みつけ
ると、回線を操作した。

「ハル、化け物の回線に割り込むぞ！ 手を貸してくれ！」

『アキハ、了解！ 回線にハッキングを開始します！』

「坊や、何を始める気だい！ 今、変な行動を起こしたらアタシたちで
もアンタを守れなくなる！」

「隊長、あの機体に俺の父さんが乗っている可能性があるんです。も
し、乗っているなら無駄な争いを避けられる可能性があります」

「でも、アンタの採ろうとする行動は流石に目に余る！ アタシたち
士官は上からの命令を忠実にこなしておけばいいんだよ！ 英雄に
なる必要はない！」

「……、ごめんなさい」

『ハッキング完了。チャンネル、接続しますか？』

「開いてくれ」

ノイズのあと、野太い声が連邦軍全員の耳に入った。

『やはり、アキハか。貴様ならこのような愚策を行うと簡単に考えら
れたわ。儂に何か用か？』

「父さん……。何で、1発目をわざと外したのですか？」

『貴様なら解るだろう？ 連邦軍に儂の技術力を見せてやる機会を与
えた。それだけだ』

「父さんは何で、こんな化け物を作ったり、俺の開発品で人の道を外れ
た行為をするんですか！ 技術者は神とは違います！ そんなの業
が深過ぎます！」

『アキハ、貴様は相応に優秀だが、考えかたが阿呆の類だな。技術者は
神だ。この戦いでも技術力に秀でた軍勢が勝つ。それはどちらだろ
うが構わないと考えていたが、儂は思い至った！ このアッグバレッ
トが完成した時、ジャブローを一瞬で廃に出来ると確信した！ そ

う、ジオンが勝つのだ——』

「暴力で勝つても、また暴力を生むだけです！　父さんはフタバとミツハを何だと考えているのですか！」

『貴様と同じ不良品だ。物は良かった。だが、駄目な部分があったから処分した』

簡単に吐き捨てたテツハにアキハは苛立ちを覚えた。同時に、強い憎しみを覚えてしまった。

その時、アキハは直感で察した。

「テツハは変わったのだ」と——。

アキハは泣きそうな自分の声を抑えて、テツハに向かって想いの全てを吐いた。

「テツハ・アンドー！　連邦もジオンも関係ない！　お前は危険だ！」

『だから何だ？　儂を殺すか？　愚息よ』

「隊長、E x Gは行けますか！」

アキハが通信を終えて、マリアに問うた。

マリアは髪をかきむしってはアキハの問いに答えた。

「アンタは本当に馬鹿だよ！　色んなしながらみが誰にだってあるが、アンタはそれを真正面から蹴散らすんだからね！」

アキハはマリアに「申し訳ない」と謝罪をした。

だが、マリアは微笑んでアキハに返した。

「アンタがジオン側の人間とは違うと解っただけでじゆうぶんだよ！」

04小隊、全員、聞こえるね！　これから化け物に対して攻撃行動を採る！　問題のある奴は！」

『本当に死神中尉はどれくらいものに喧嘩を売るねえ。だが、コイツを仕留めれば昇進間違いなしって感じだね』

マーフィーが気楽な感じで声をあげた。

『機体の問題があるけど、ここまでの脅威を見せつけられたら、放置できないうね。やってやるさ』

冷静に殺意の籠った口調でコフィンが無線を入れて来た。

04小隊の敵は、ネオ・アッグバレットと決まった。

「全機、攻撃開始！」

マリアの声で04小隊が攻撃を開始した。

だが、ネオ・アツグバレットに攻撃を開始した直後、異変が起こった。

ネオ・アツグバレットの頭部に6基搭載してあった、機器が振動を開始すると04小隊の射撃武器が機体に届く前に無力化されてしまった。

「何でだ!」とアキハは思い、解析を開始した。

アキハが必死に解析をしている間にも、04小隊の面々は攻撃を続けていた。

だが、無駄な攻撃に終わっていた。

なぜ、ビーム兵器が無力化されるのか?

実弾兵器まで無力化されるのか?

アキハは鉄壁のネオ・アツグバレットの防御方法について考えた。

結果、解析と同時に1つの答えに行きついた。

「隊長、奴は音波フィールドと同時に立方格式状の不可視フィールドを形成しています!」

「解らない! 専門用語を使わずに簡単に喋りな!」

「つまり、実弾兵器もビーム兵器も効かないと言いたいのです!」

「本当の意味で化け物だね……。さて、どう出るか——」

04小隊以外の部隊も集結してネオ・アツグバレットに対して攻撃を仕掛け始めた。

だが、ネオ・アツグバレットの鉄壁を破る糸口にはならなかった。

悪魔再臨（2）

攻撃手段がない連邦軍に対して、テツハは余裕の声をあげた。

『雑兵如きが何機集まろうが、この完成機にかてぬ！ ヨツハ、地面をうろつく馬鹿共に鉄槌を下せ！』

メインパイロットを務めていたヨツハが無言で冷淡に機器を操作した。

ネオ・アツグバレットの巨脚から砲身が姿を見せる。右側側面に6つ。左側側面にも6つ。計12個の砲身が姿を現した。

「 MARIAが即座に無線機に叫んだ。

「来るよ！ 各機、回避運動！」

MARIAの言葉が終わった瞬間、12個の砲身から閃光が走った。

広範囲に及ぶ対地拡散メガ粒子砲だった。

E x Gも回避運動を採った。

だが、機体にガタが来ていたE x Gだ。

直撃は免れた。

でも、右腕を破損し、派手に転んだ。

アキハは大地に叩きつけられる振動で意識が飛びかけた。

機体も右腕を焼き切られ、コックピットの直ぐ近くまで、損害が及んでいた。

「隊長……。大丈夫ですか？ 隊長！」

アキハはMARIAに必死に声をかけた。

だが、MARIAは先程の一撃で激しく頭を強打して意識を失っていた。

アキハは操縦機能を後部座席に移して、E x Gを起動させた。

「使える武装は頭部バルカンと左ビームサーベルのみ……。こんな状態で化け物に勝てるのか？」

アキハの疑問は全連邦軍の疑問だった。

「こんな化け物に勝てるわけがない」

全部隊の士気が劇的に削がれ始めた時、フォックスからアキハに通信が入った。

『こんな時に君に任せるのは酷だと思えます。でも、彼女たちが君を選んだ。その意味をしっかりと受け止めて欲しい。今から、救護用の機体をそちらに送ります。マリアが気を失っているなら、君たちでこの戦いに終止符を打って欲しい。これは私、個人からの願いです』

アキハはフォックスの通信を受け、「何事か？」と感じた。

だが、救護用の機体を見て、直ぐに納得した。

救護用に来た機体は中破したドムを連邦軍用に塗装と修理を施した機体だった。

アキハはE x Gに片膝を突かせてマリアをコックピットから運び出した。

ドムのコックピットから姿を見せたのはフタバとミツハだった。

ミツハがマリアをドムのコックピットに設置された担架に座らせて身体を固定させた。

フタバが無邪気な普段とは違った表情でアキハに語りかけた。

「あの機体には妹のヨツハが乗っているの。お父さん、最後にはあの娘を使って来た。私、お父さんからヨツハを取り戻したい。アキハが私とミツハに気持ちと優しさをくれたように私もヨツハをお父さんから解き放って、しっかりとした道を歩ませてあげたい」

ミツハがフタバの話聞いた後、付け加えて話を切り出した。

「お姉様が語った言葉の重みはわたくしたち、バーキアシリーズなら本当に大切なのです。アキハはわたくしにとって希望です。かけがえの無い大切な存在なのです。この気持ちを言葉で表したら『恋』と呼ぶに相応しい感情です」

アキハは、ミツハの言葉を聞いて、ハツとした。ミツハは今、自身の内面をアキハに教えてくれているのだと鈍感なアキハでも解った。

フタバもアキハの右手を取って、優しい笑みを浮かべては語った。「私、こんな感情を持ってて本当に幸せだよ。前は戦うことしか考えていなかった。でも、アキハと出会って、時間を一緒にする度に淡い気持ちが強くなる。だから——、この気持ちをヨツハにも伝えてあげたい！」

アキハは優しい微笑みを浮かべたフタバを心から愛おしいと感じ

てしまった。

愛おしいと感じた相手が人工的に作られた存在でも、命は等しく尊い。

アキハはフタバとミツハを見比べたあと、フタバに向かって「行く」と微笑んだ。

それは、ミツハではなく、フタバを選んだ証拠だった。

ミツハは「やはりそうですか……」と小声で短く語ると、アキハに向かつて話した。

「隊長さんはわたくしが責任を持って介護させて頂きますわ！ アキハとお姉様はヨツハをお願いします！」

ドムのコックピットに消える際、アキハは確かに視た。

ミツハの瞳から流れる感情の証。

それは「涙」という止められない悲しみの感情だった。

○

アキハはフタバをメインパイロットとしてEXGを再起動させた。

フタバは「久しぶりの操縦だあ！」と無邪気にはしゃいだのは一瞬だった。

操縦桿に両腕を伸ばし、ペダルに両足をそえた時には表情は真剣そのものに替わっていた。

アキハはフタバにネオ・アツグバレットについて質問をした。

「コックピットはどこになるの？ そこを外して攻撃しないとヨツハを殺したら意味がない」

「コックピットは大きな砲口がある直ぐ上にあるの。でも、アツグバレットはまだ、本当の姿を見せていないよ。あの機体は『地下からの一撃必殺』を目的で作られている。操縦も二人で行うのが前提なんだ。本当は私とミツハが乗る予定だったの……」

「あんな鉄壁で地下から攻撃されたらジャブローどころかこの辺り一帯が炎上してしまう！ 何とか攻撃をする術はないかい？」

「この機体でできること……。超近接格闘でフィールド形成機を破壊するしかないよ」

「その形成機はどこにあるの？」

「アツグバレットの頭にある6基の振動機。そこからフィールドが形成されている」

「なら、行くしかないな」

フタバは戸惑うことなくアキハの言葉に同意した。

右脚が破損して上手く歩けないE x Gをアキハが微調整してガタガタだが歩ける形まで立て直した。

フタバは連邦の機体に初めて乗るのに慣れた操縦テクニックでE x Gを操っていた。

「行け、フタバ！」

アキハの言葉に同意するようにフタバはE x Gのバックパックを最大出力で吹かした。

激しい加重がアキハとフタバの身体を押しさえつける。

だが、二人とも弱音を吐かずに急激に接近する化け物に挑んだ。

フタバは絶妙なタイミングで左太腿に装備してあったビームサーベルを引き抜いた。

横薙ぎの一刀で六基の内、3基のフィールド形成機を破壊した。

「マーフィさん、お願いします！」

アキハが口に当てた無線機に全力で声をあげた。

『ビームが効く相手なら俺のスナイプで一撃だぜ！』

遠距離からの高出力ビームがネオ・アツグバレットに襲い掛かる。

巨脚を焼き切って右足を完全に使えないように切断した。

これには連邦軍の士気が上がった。

狂気の先に

だが、狂気のテツハがこのままで終わる訳がなかった。

「軍務だけしか能がない、烏合の衆が！ 儂の作品に傷をつけたな！

ヨツハ！」

テツハの声掛けにヨツハは冷徹に行動を開始した。

機器を操作してネオ・アツグバレットの形態変形を行った。

本体砲門左右がせり上がり合体して巨大ドリルとなった。巨脚は膝から折れてすねの部分からホバー走行する仕組みになっていた。

全長三十メートルの掘削機に姿を変えた、ネオ・アツグバレットは轟音を立てて地下に潜った。

アキハはソナーをE×Gの腰から落としてネオ・アツグバレットの出現位置を特定しようと必死になっていた。だが、ネオ・アツグバレットの動きは思った以上に素早く、気付いた時には遅かった。

後方のキャンプ陣営の場所が地下から砲撃にあった。

「大隊長！」とアキハは無線に何度も応答を確認した。

だが、ノイズだけが無慈悲に聞こえるだけだった。

アキハは奇襲に遭った後方陣営に出現したネオ・アツグバレットに對して激しい憎悪を覚えた。

自分のスパイ容疑を違うと信じ続けてくれた心優しく、寛大な大隊長はもういない。

その立派な男を一瞬にして屠った相手は実の父親だ。

だが、アキハの中ではテツハという男をもう、実の父親と考えるてはいなかった。

本部が焼き払われただけで、各部隊は混乱していた。

そんな中、アキハとフタバだけは気持ちが変わった。

「テツハの元にヨツハを置いておいたら駄目だ」という確固たる気持ちと共に、ネオ・アツグバレットに強襲した。

潜地型から拠点殲滅型に姿を戻した怪物にE×Gは果敢に攻めた。

ビームサーベルを投げ捨てて、前面から張り付き、コックピットハッチをこじ開けた。

そこには小柄な少女と恰幅の良い男性の二人が複座式に並んで座っていた。

アキハとフタバは頷き合って、コックピットハッチを開いた。戦場の熱風がアキハたちの頬を撫でる。

その視線の先では実の父親が不敵な笑みを浮かべて座っていた。

「ここまで来たか——。愚息よ」

「父さん。違う、テツハ・アンドー。もう終わりだ。これ以上、破壊をするなら俺はお前を殺す覚悟がある」

「軟弱者の貴様が実の父親を撃てるか？ 儂は貴様を簡単に撃てるぞ」

アキハはテツハに銃口を向けて躊躇なく引き金を引いた。

発砲した弾丸はコックピットの側面モニターを砕いた。

「俺だって覚悟は出来ている。家を継ぐ目的で俺を連邦軍に亡命させただけでなく、多くの人としてしてはならない領域に足を踏み込んだ罰。俺はお前を止める」

アキハがテツハと話をしている最中にフタバがヨツハに声をかけた。

「ヨツハ、お姉ちゃんだよ！ こっちにおいで！ また一緒にお人形を使っておままごとをしよう！ アキハも一緒にしてくれる！ だから、そんな怖い物に乗っけては駄目だよ！」

ヨツハはヘルメットを取って、フタバの言葉を復唱し始めた。

その行動を見たテツハが激怒した。

「失敗作め！ 儂の希望を惑わすか！」

「ヨツハはお父さんの希望とは違う！ この娘の人生はこの娘の物だ！」

「黙れ！」とテツハはアキハに向けていた銃口をフタバに向けた。

発砲された弾丸はフタバを庇った、アキハの左肩に当たった。

アキハは反射的に撃ち返し、テツハの右脚に弾丸を叩きこんだ。

その間にアキハは痛みを耐えながら、ヨツハに声をかけた。

「ヨツハちゃん、こっちにおいで——。怖くないよ。お姉さんも二人待っている。だから、そんな狭い鉄籠から出て来て一緒に遊ぼう。お

前はこれから沢山笑う必要がある。悲しみを覚えたら——駄目だ」

ヨツハが意志の籠っていなかった瞳に徐々に自身に「感情」という大切なモノを取り戻していくのがアキハとフタバには解った。

だが、テツハが阻止しようとヨツハに拳銃を向けた。

「貴様等のような失敗作に僕の夢と作品を取られてたまるか！ 貴様等のどつちかが動いたら即、この作品を射殺する！ 貴様等は本当に厄介な存在だ！ 愚息、まずは貴様だ！」

テツハの拳銃が咆哮をあげた。

アキハは咄嗟の判断で心臓に当たるのは避けた。

だが、腹に弾丸を叩きこまれた。

フタバがアキハの名前を叫ぶ。

「次は失敗作、貴様だ。本当に手間をかけさせおつて……」

フタバが「自分が撃たれる！」と覚悟を決めた時、ヨツハが動いた。

ヨツハが自分の意志でネオ・アツグバレットの主砲のトリガーを押し込んだ。ネオ・アツグバレットの主砲は二人でバランスを制御しながら発射するのが前提の兵器だ。

唯、発射するだけだったら、体勢が後方に大きく崩れる。姿勢制御を担当していたテツハの意表を突いた行動に本人以外、全員が驚いた。

山を抉り取りながら大きく仰向けに倒れる化け物を見て、連邦軍全員が「何事だ！」と感じた。

E x Gも下半身が完全に吹き飛び、動作出来ない状況になった。

咄嗟の出来事にアキハが残った命を燃やした。

激しい速度で倒れるネオ・アツグバレットのコックピット内に素早く手を突っ込むとヨツハの手を取った。そのまま引き寄せて、フタバを抱いたまま三人でE x Gのコックピット内に逃げ込んだ。

E x Gは起動したままだが、下半身がないせいもあつてアラートが鳴り続けていた。破損箇所を知らせる警報が出たまま稼働時間も長くなかった。

アキハはフタバとヨツハを抱きしめて優しい口調で話をした。

「この場で終わらせるよ。ごめん、付き合わせて——」

フタバはアキハの頭を優しく撫でると穏やかな口調で返した。

「そんなに謝らないでよ。アキハと一緒になら私、怖くない——。ヨツハ、ごめんね。お姉ちゃんが最期は一緒に逝ってあげるから許してね」

最後の最後までヨツハは無表情だった。だが、アキハの流れる血を見て「ごめんなさい」と小声で呟いた。

そんなヨツハを見てアキハは「頑張った甲斐があったな」と感じた。朦朧とする意識の中で、アキハはE x Gの左拳をネオ・アツグバレットのコックピットに叩きこんだ。

E x Gの拳が叩きこまれるその前にテツハはネオ・アツグバレットの自爆プログラムを起動させていた。

「アンドー家とジオン公国に栄光あれ!!」

狂気の科学者の雄叫びと同時にカルパチア山脈を震撼させた化物が最後の時を迎えた。

六基の核融合炉を暴走させた大爆発で一帯は光の渦に飲み込まれた。

その場にいた多くの連邦軍兵士たちは声を揃えてこの後に語った。

「アキハ・アンドー技術士官は命を賭して化け物を屠った」と——。

エピソード 希望

※宇宙西暦0080年1月10日 ブカレスト 午前10時
戦争は終戦になり、残ったのは無残な戦火の痕だけだった。

04小隊はアキハ・アンドーを除き、全員の生存が確認されていた。アキハ・アンドーは戦死者として扱われ、除籍となった。

だが、04小隊の全員がアキハは生きていると確信していた。マリアもコフィンもマーフィーに至るまで、全員が口を揃えて、「あの坊やが死ぬはずがない」と切に語っていた。

だが、そんな04小隊も戦争が終わると全員がバラバラになってしまった。

ミツハは1人、脱走兵として自由を手に入れたと同時に、04小隊全員からの願いを託された。

場所はルーマニアの首都ブカレスト。

そこで、フタバらしい人物を見たとマーフィーが情報を仕入れてミツハに回して来た。

ミツハはアキハとフタバ、ヨツハが全員生きていると信じて、街を訪ね歩いていた。

ブカレストは戦時中、両陣営の占領下に置かれ、戦争の被害を受けた首都として有名だった。

だが、街は復興の兆しを見せており、人々は賑わいを見せていた。そんな中、ミツハは初めての一人旅を楽しみながら、アキハたちを探していた。

「全く、生きているのですしたら一報くらいよこして頂いてもいいのではありませんか？」

ミツハは露店で買った珈琲で渴いた可愛らしい唇を濡らすと文句を垂れた。

そんなミツハに店主の女性が優しく声をかけた。

「あんた、誰か探しているのかい？ そんな若さで人探しとは、ご苦労

だねえ」

「そう思っ頂けるのはありがたいことですよ。失礼ですが、この写真の男性に見覚えは有りませんか？ 何でも構いません。情報を頂きたいのです」

店主の女性はミツハから写真を受け取ると、マジマジと見て驚いた風に話した。

「この人、最近、郊外の村に引っ越して来た夫婦の旦那様にそっくりだねえ。仲の良い夫婦で、娘さんまでいる歳若い3人だったような……」

「そのかた、どこの村にお住みなのでしょうか？ うかがってみたいものですわ」

店主の女性は珈琲をもう一杯入れては右掌を差し出して来た。

「このご時世、情報料つてのも商売なんだよ？ 珈琲、もう一杯どうだい？」

ミツハはこの地に住む女性は逞しいと感じて、珈琲をもう一杯、購入した。

○

「街はずれの村とは……、あそこですよわね」

ミツハが目指した先はブカレストから北東へ3キロ離れた山のふもとに隠れるようにある村だった。

村の中にミツハが入ると村人たちは奇異な目でミツハを見ては、家の中に姿を隠した。

「何でしょうか？ わたくしを怖がっているのですか？」

ミツハは小声で呟くと村人の老婆に声をかけた。

「すみません、人を探しているのですが――」

「……あっちに行っておくれ」

会話を短く切った老婆は即座に煉瓦造りの古い家に入ると鍵をかけた。

まるで、この村はまだ戦争を続けているようにミツハには感じられた。だが、ミツハはこの村に拒まれようともアキハたちを見つかるまで

帰らないと腹を括った。

しばらく、村の中を散策したミツハだが、どの家も嚴重に窓や戸を閉めているので、中の様子は解らなかった。

そんな時、ミツハの背後に殺気を感じた。

ミツハの背中に不意を突いた形で銃口が突き付けられた。

「貴様、よそ者だな。何用だ？」

若い青年の声がしたので、ミツハは冷静に返した。

「わたくし、ミツハ・バーキアと言いますわ。ここで人を探していますの」

「バーキア……。お前の知った人間はこの村にはいない。出て行け」

「なぜ、わたくしが出て行く必要がありますの？ あなたの口調では、まるで『アキハがこの村にいる』と語っているのと同じですわ」

「出て行け！」

激昂した青年が拳銃の引き金を引く瞬間に、ミツハは瞬間的にしゃがんで足払いを仕掛けた。

青年はミツハの体術が余りにも早すぎて、対応しきれなかった。

仰向けに倒れた男性の拳銃を蹴り飛ばしたミツハは鞆丸を抑えて男性に問うた。

「このまま踏みつけても宜しくつてよ。でも、あなたには聞きたいことがありますわ。この村はなぜ、旅人を拒むのですか？」

「……ッ！」

「沈黙が回答だと宜しくありませんよ？ わたくし、非道になれば相應の事ができますので——。あなたの家族がどうなっても知りませんよ」

「負けだ。離せ」

青年が簡単に吐いた。

ミツハは青年がなぜ、こんなにも必死になっているのか解らなかった。

青年は立ち上がると答えた。

「この村は戦争中に脱走や軍規違反、敵前逃亡した人間と家族が暮らしている。だから、お前みたいな変な奴が来たら俺が追い払う役割を

村長から受けている。村長は優しい人だ。会わせてやる。着いて来い」

青年は少し残念そうな口調で話すとミツハを先導した。

村長が住むという家は普通の民家だった。コンクリート製の平屋。酷く古めかしい作りだった。

青年がドアを二回ノックして応答を待った。

返って来たのは、低く唸る男性の声だった。

「合言葉は？」

「祝福を、バーキア」

ミツハは合言葉を聞いて驚いた。自身の苗字、バーキアシリーズの名前の由来が合言葉になっていたことに驚いた。

ドアが開かれて青年はミツハを中に通した。

中で待っていたのは屈強な男性だった。筋骨隆々といった言葉が良く似合う体躯。右目に傷を負っており、禿頭。身長は二メートルくらいあった。

ミツハは村長がアキハだと思っていたが、違ったのがっかりした。

「どうした、ご客人。俺で何か文句あるのか？」

「いいえ。探し人と違ったのがっかりしただけですわ。あなた、アキハ・アンドーという男性とフタバ・バーキア、ヨツハ・バーキアを知らなくて？」

「話を急ぐな。まずは貴様の名前は？」

「ミツハ・バーキアと申します」

「そうか。俺の名前はガズだ。ここの頭を張っている。貴様の探し人だが、会いたい理由はなんだ？」

「私以外にも生きていると願う人の想いを託されてきましたわ。その想いと手紙も受け取っています。どうか、会わせて下さいな」

ガズは顎に手を当てて考えた。

後に、一つの提案をして来た。

「貴様も聞いただろうが、この村は訳ありの村だ。他言無用で今後一切かわらないを条件ならいいぜ」

ミツハは全てを承知で「解りました」と返した。
ガズが「着いて来い」というので後に行く。

薄暗い小道を進んだ先の部屋にミツハは通された。
ノックをして中に入った。

その先の光景でミツハは涙が溢れて止まらなかった。

アキハがいた――。

フタバもいた――。

何より、ヨツハがフタバと笑って遊んでいる姿がミツハには嬉しくて仕方がなかった。

アキハは右腕が肩からなかった。戦いの怪我がまだ癒えていないと一目で解った。ベッドに横になってフタバとヨツハのおままごとを優しく見守っていた。

フタバは五体満足で元気に笑顔で遊んでいた。髪が伸びて、お腹が少し膨らんでいた。きつと新しい命が宿った証拠だ。

ヨツハはあの感情のない表情が嘘だったみたいにアキハとフタバに笑顔を見せていた。

ミツハは零れる涙を拭っては、アキハたちの輪に入った。

戦争は多くの傷跡を残した。

だが、新しい命を繋いでいくことだって出来るとアキハたちが証明していた。

ミツハはきつとこの時のことを語り継ぐ。

砂漠で出会った青年と乙女の行きついたエンドロールを――。

(了)